

平成22年度研究報告書

乳児院における子どもの社会情緒的発達を促進する 生活臨床プログラムの模索

研究代表者 青木紀久代（お茶の水女子大学）
共同研究者 南山今日子（子どもの虹情報研修センター）

社会福祉法人 横浜博萌会

子どもの虹情報研修センター

（日本虐待・思春期問題情報研修センター）

平成22年度研究報告書

乳児院における子どもの社会情緒的発達を促進する 生活臨床プログラムの模索

子どもの虹 情報研修センター

目 次

はじめに

I 章 研究の目的と方法

1. 研究の経緯1
2. 目的4
3. 方法5

II 章 実践事例

1. コンサルテーション1 (A事例).....12
2. コンサルテーション2 (B事例).....31
3. コンサルテーション3 (C事例).....45

III 章 総合考察

1. プログラムを体験した担当養育者の体験59
2. コンサルテーションの展開過程と関係性アセスメント63

<資料>

1. 1回のコンサルテーションで用いた資料一式68
2. 振り返りシートのフォーマット71
3. 研究報告会の資料72

はじめに

本書は、研究題目『乳児院における子どもの社会情緒的発達を促進する生活臨床プログラムの模索』に関する報告書である。昨年度まで行った『乳児院における愛着の発達支援に関する研究～乳児院を拠点とする子どもの社会・情緒的発達に適した養育環境とは～』の研究に引き続き、乳児院での実践研究を進めたものである。

現在心理職が乳児院に配置されるようになった。個室で子どもの心理療法を行うというよりも、家族関係の再構築、子どもの発達に関するコンサルテーションなどを通して、院全体の養育システムが向上するような働きが、現実場面では多く期待されることとなる。緊急性の高い現場のニーズに、十分適合するコンサルテーションを行うためにも、心理職の経験知と研究知見の蓄積は、焦眉の課題であり、今後の専門研修も多く求められる段階にある。

そこで本研究では、心理職が乳児院の現場で働くことを前提に、現場の生活に適合する子どもの社会情緒的発達支援のためのコンサルテーションの方略を検討した。この支援のために筆者が特に重視したのは、担当養育者と子どもの関係性を育てることである。すなわち、コンサルテーションでは、養育者側の子どもに対する「間主観的な関わり合い」について、養育者自身が様々な気づきを得ながら、子どもの感情を深く理解し、共感する態勢を強化していくことが含まれる。そしてそれは、子どもにとって特別なものではなく、毎日おとずれる、何気ない生活場面で確認でき、繰り返し体験可能な相互交流の中で行われることが望ましい。

そこで、食事介助場面でのコンサルテーションという設定を作り、3名の子どもを一年間フォローすることとした。この実践経過の検討を通して、心理職並びに養育を行う職員への専門研修に必要な課題を抽出することを試みた。報告書では乳児院関係者の方々に向け、紙数が許す限りできるだけコンサルテーションのやりとりをそのまま伝えるよう努めた。今後多くの皆様と対話する機会が得られることを願っている。

ところで、本研究活動期間の最終月、東日本大震災を経験した。混乱の中、予定していた研究報告会をやむなく延期した。しかしながら、新年度に入ると、職員や研究スタッフの異動や、震災による大なり小なりの職場環境の変化などから、開催期間が思った以上に伸びてしまった。

再び訪問した研究協力院で温かく迎えてくださった職員の皆さんと子どもたちの様子に、ある種の懐かしさを感じた。改めて、この一年間の生きた臨床的活動で培われた絆を思い、実に有り難かった。「介入」や「支援」というと、あたかも研究者側の能動性と貢献が輝くように錯覚するが、臨床活動の実際は、むしろ他者によって生かされているのは、自分の方だと感じる体験の連続だと言える。

毎日子どもから多くのギフトをもらいながら、生き生きと世話をする担当養育者の方々が、惜しげもなく、そのやりとりをカメラの前で展開して下さった。その記録を共に振り返ることによって、しばし私たちも、子どもと担当養育者の関係性の中に生きることが許されたのである。

そこで感じ取ることができたものを、心理職と養育者という専門家のコラボレーションの場で、いかにコンサルテーションの言葉として返していくか。

前書と等しく、難しさとやりがいを同時に与えてくれた実践研究であった。実践を終えた直後は、実践疲れと資料ばかりが膨大に残り、効率よく研究成果を出すこととはほど遠い地点にいたことは否めない。しかし、研究協力院に恵まれ、子ども達や職員の皆さんに励まされるようにして、何とか投げ出さずに、この小さな報告書を送り出すことができた。関係者の皆様に、心から御礼申し上げます。

I 章 研究の目的と方法

1. 研究の経緯

社会的養護の課題と将来像

現在、社会的養護の必要な子どもたちを、施設中心の養育から里親などの家庭的な養育へと多くを移行しようとする動きは、周知の通りである。日本の大規模型の施設中心の社会的養護のあり方に対し、これまで国連・子どもの権利委員会から2度にわたって勧告があり、2009年11月、第64回国連総会での「児童の代替的養護に関する指針(Guidelines for the alternative care of children)」の採択¹を受けた3度目の勧告に至っている。

代替的養護は、できる限り家庭的な養育環境の中で行われるべきだというもので、特に幼い児童(3歳未満の児童)では、それが重視される。

これらを受け、厚生労働省は2011年「社会的養護の課題と将来像」をとりまとめた²。その後も、施設の運営指針、第三者評価基準作りなどが急ピッチで行われている。

社会的養護の基本的方向性は、次の4つである。

① 家庭的養護の推進

家庭的養護(里親、ファミリーホーム)を優先。施設養護でも、できる限り家庭的な環境で養育(小規模グループケア、グループホーム)を推進する。

② 専門的ケアの充実

虐待を受けて心に傷を負った子ども等への専門的な知識や技術によるケアを行う。

③ 自立支援の充実

自己肯定感を育み自分らしく生きる力、他者を尊重し共生する力、生活スキル、社会的スキルの獲得

④ 家族支援、地域支援の充実

虐待防止の親支援、親子関係の再構築、施設による里親等の支援、地域における子育て支援

乳児院の課題と将来像

こうした方向性のなかで、乳児院の課題と将来像として求められる役割が次のようにまとめられている。すなわち、その基本機能は、

○乳幼児の生命を守り、心身及び社会性の健全な発達を促進する養育機能

¹ 厚生労働省ホームページ 児童の代替的養護に関する指針

<<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000018h6g-att/2r98520000018hly.pdf> Guidelines for the alternative care of children 2009 11' >

² 厚生労働省ホームページ 社会的養護の課題と将来像

<<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001j8zz.html>>

○被虐待児・病児・障害児等への対応ができる乳幼児の専門的養育機能

○早期家庭復帰を視野に入れた保護者支援とアフターケア機能

(在所期間は1か月未満が26%、6か月未満を含めると48%。長期在所にはこれらの支援が必要)

○児童相談所から乳児院に一時保護委託を受けることが多く、乳児の一時保護機能

○子育て支援機能（育児相談、ショートステイ等）

であり、また、今後の課題として、

①専門的養育機能の充実

・被虐待児、低出生体重児、慢性疾患児、発達の遅れのある子ども、障害児など、医療・療育の必要な子どもに対し、リハビリ等の医療・療育と連携した専門的養育機能の充実

・個別対応職員や心理療法担当職員の全施設配置、経験豊富な看護職員の確保など

②養育単位の小規模化

・乳幼児期の集団養育や交代制による養育は、心の発達への負の影響が大きいことから、養育単位の小規模化（4～6人の小規模グループケア）の推進。養育担当者との愛着関係が築かれ、乳児初期からの非言語的コミュニケーションにより、情緒、社会性、言語をはじめ、全面的な発達を支援

・乳児院では夜勤が必要なため、例えば2グループを1人の夜勤者がみることができる構造等が必要

③保護者支援機能、地域支援機能の充実

・保護者の多くは、子育てに不安や負担感をもち、育児の知識や技術をもたず、家族関係が複雑な場合もあり、かかわりの難しい保護者も増加しており、保護者支援の充実が必要

・不必要に施設入所の長期化や児童養護施設への措置変更にならぬよう、里親委託の推進が必要

・新たに里親支援担当職員を設置し、家庭支援専門相談員、個別対応職員、心理療法担当職員を合わせ、直接ローテーションに加わらない職員のチームで、保護者支援、里親支援等の地域支援機能を推進

・ショートステイ等の子育て支援機能は、虐待予防にも役立つ重要な機能であり推進する。

以上「専門的養育機能の充実」「養育単位の小規模化」「保護者支援・地域支援の充実」の3つが掲げられている。

これに並行して全国乳児福祉協議会では、独自の「**乳児院の将来ビジョン**」について検討を重ねている。

変わらず大切なもの

このような社会的養護のあり方が激動する中で、ここ数年、虐待の心のケアや、途上国でのECDプログラムなどの実践について講演する機会があると、あなたは施設を擁護する立場ですか？それとも里親推進派ですか？といった質問を複数経験した。どうやって子どもに適切な養育環境を提供するか、という中味が空洞化したまま、誰が提供すればいいのか、という文脈に議論が転んでしまっ

他ならぬ子どもに還元されるものがあまりに薄くなってしまいう危険があるのではないだろうか。

科学的知見の用い方にも、その国の文化・社会的文脈を考慮した熟考が必要だろう。2010年夏に、ドイツで行われた世界乳幼児精神保健学会でのことである。大会では、Zeanah氏による“Early Experience and Brain Development: The Bucharest Early Intervention Project.”の発表があり、メイン会場を埋め尽くす聴衆の中、ルーマニアの海外養子縁組の大プロジェクトの研究結果が報告された。施設生活を強いられる小さな子ども達の様子が大きくスライドに映されていた。この講演後に、私たちは、これまですすめてきた、乳児院でのより良い実践に関する研究のポスターを発表した³⁴。発表はごくささやかなものだったが、予想外に多くの方々から質問を受けた。

特に、良質な施設でのケアをどうやって充実させるか、施設対家庭の構図で子どもの発達を語るのではなく、子どもが育つ場をいかに豊かにするかで発達を語ろうとする視点について、共感的な理解を示してくれたのは、自らソーシャルワーカーやナースなどの資格を持ち、実務を重視する研究者だったように思う。その中に、あるフランスの実践家、研究家のグループがあった。彼らは、これから先ほどの講演に対して抗議に行くところだった。確かにひどい施設もあるだろう、しかし制約のある中で、本当に献身的に子どものケアをしている、世界中の実践家たちを無神経に傷つけることは許せない、というのである。

もちろんこれが大勢の意見かという、ほど遠い声かと思うが、子どもにとって良質な養育環境を真摯に探求し続けることは、常に最優先課題であり続けるし、一つの施設で多職種が協働してこれに取り組むことの意義を鮮烈に感じた出来事だった。

心理職として

心理職が乳児院の現場で働くことは、特別なことではなくなったが、乳児院で働くための心理職の専門研修が確立されているとは言い難い。しかし、上述した将来像の中に、乳児院が養育単位の小規模化によって、担当養育者との愛着関係はもとより、乳児期初期からの非言語的コミュニケーションにより、情緒、社会性、言語をはじめ、全面的な発達支援を充実させる環境整備に乗り出すと、専門的養育も当然その環境の中で展開することになる。

つまり、心理職が行う生活場面でのコンサルテーションは、大きな集団で暮らす子どもの心の発達支援よりも、もっと、担当養育者と密な関係が作りやすい環境で、子どものニーズに応えるような養育構造の中で行われていくことになるだろう。

³ Aoki, K., Minamiyama, K., Konno, N. & Masuzawa, T. 2010 Childcare in the Promotion of Social-Emotional Development of Young Children (1)-A Practice in Infant-Home Settings in Japan. *Supplement to the Infant Mental Health Journal*, 32(3) 201.

⁴ Konno, N., Aoki, K., Minamiyama, K. & Masuzawa, T. 2010 Childcare in the Promotion of Social-Emotional Development of Young Children (2)-A Practice in Infant-Home Settings in Japan. *Supplement to the Infant Mental Health Journal* 32(3), 201-202.

これを好機ととらえて、筆者が特に重視したいのは、担当養育者と子どもの関係性を育てる支援の実現である。すなわち、子どもが大人数の場合は、生活場面ごとに、複数の担当者が仕事を分割して、流れ作業的なかわりになりやすい。しかし、一人が、少ない子どもに対し、総合的に一貫した世話をできるようになると、担当する子ども理解の仕方にも、自分との関係の連続性の中でとらえる部分が増えるはずである。

このように考えると、養育者側の子どもに対する「間主観的な関わり合い」について、担当養育者自身が様々な気づきを得ながら、子どもの感情を深く理解し、共感する態勢を強化していくコンサルテーションの意義と可能性が大きくなる。

筆者がこれまでの実践研究で述べてきたように、子どもにとって特別なものではなく、毎日の何気ない生活場面で確認でき、繰り返し体験可能な相互交流の中でこのようなコンサルテーションを行うことができたなら、本当の意味で子どもと担当養育者の関係を育てる支援ができるのではないだろうか。

2. 目的

このような経緯から、本研究は、現場の生活に適合する子どもの社会情緒的発達支援のための、コンサルテーションの方略を検討した。これはまた、乳児院における、生活臨床プログラムの構築に、心理職がどのような形で協働できるかを実践的に検討することでもある。

乳児院では、先述した乳児院の機能にある専門的養育機能を発揮して、子どものニーズに対応した、様々なケアが可能な環境を広く提供することが、今後一層強く求められる。本研究では、このような目標を持った毎日の様々な養育活動の総和を生活臨床プログラムと呼ぶ。プログラムの構築は全ての職員が協働して実現しているはずのものである。その中で、本研究では特に心理職の活動について、取り上げる。

コンサルテーションの場面

具体的には、食事場면을介する担当養育者への継続的な養育コンサルテーション場面を設定し、筆者が心理のコンサルタントの役割を実際に担う。

コンサルテーションの基本的なテーマは、子どもの社会情緒的発達を促進している子どもと養育者の相互作用のエッセンスを探求していくものとした。

これを実践事例として、子どもの変化を軸に、様々な視点から包括的に検討する資料を収集、編成していく。この過程を通して、子どもと担当養育者の関係性を心理職がどのようにとらえ、育てる支援をなし得るかを考えたい。一年間の実践を試行錯誤ながらすすめ、その経過をまとめあげる作業は、一つの関係性のアセスメントと言えるだろう。

また発展的には、心理職並びに養育を行う職員への専門研修に必要な課題を抽出することも可能であるが、その分析は、次の機会としたい。

⁵青木紀久代 2010 子どもの虹情報研修センター 平成 20・21 年度報告書『乳児院における愛着の発達支援に関する研究～乳児院を拠点とする子どもの社会・情緒的発達に適した保育環境とは～』

3. 方法

協力乳児院について

協力乳児院は、定員 25 名であり、普段は 2 グループで縦割りに分かれて養育を行っている。小規模グループホームを設けており、日中、4 名はホームで過ごしている。

◆ 子どもの生活空間



図2.小規模グループホーム

図1.乳児院の外観

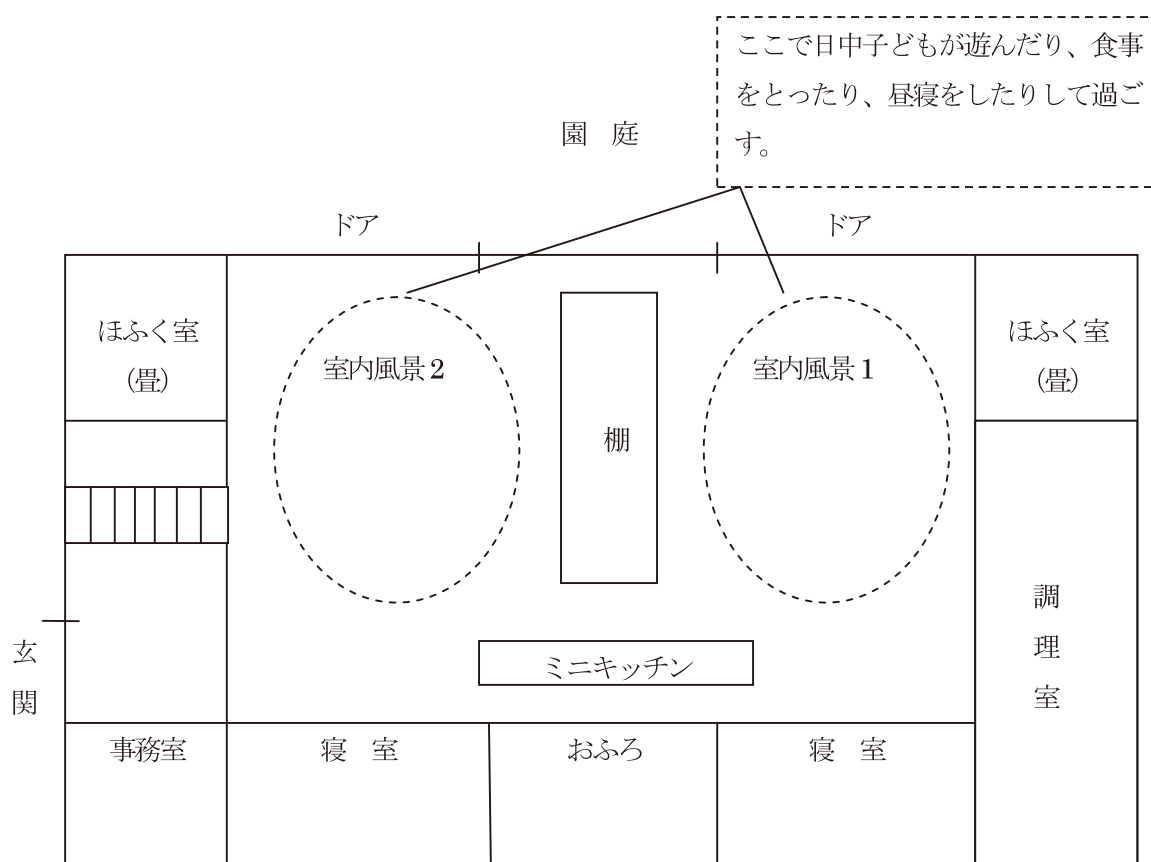


図3. 乳児院内の図



図4.室内風景1



図5.室内風景2

◆子どもの生活の流れ

基本的な生活の流れを乳児グループ、幼児グループに分かれて示す。

乳児グループ *子どもの発達状況に応じて対応

起床・ 検温	離乳食	日光浴	沐浴	離乳食 授乳・おむつ交換・午睡・就寝は適宜
-----------	-----	-----	----	------------------------------

6:00 7:20 8:30 9:00 10:00 11:30

幼児グループ *子どもの発達状況に応じて対応

起床 更衣 検温	朝食	引き継ぎ	散歩	おやつ	昼食 午睡 検温	おやつ	入浴	夕食 更衣	テレビ等・ 歯磨き	絵本 就寝
----------------	----	------	----	-----	----------------	-----	----	----------	--------------	----------

6:00 7:20 8:30 9:00 10:00 11:30 14:45 16:00 17:00 18:30 19:30

実践の経過

本研究の実践経過を示し、本章の最後に図6としてまとめた。

◆ミーティング

協力乳児院とのミーティングを5月より月1回のペースで1月まで行った。5月のミーティング後、対象児3名とコンサルテーションに参加する担当養育者を選定した。

◆観察

6月より月1～2回のペースで直接子どもの観察を行った。

◆ビデオ観察

食事場面のビデオ観察を6月より行い、録画されたビデオを用いてカンファレンスを行った。ビデオデータをカンファレンスで使用するために表1のような手順で、資料を作成した。

毎月3名についてそれぞれ資料を作成し、カンファレンス後には、フィードバック資料を作成して還元し、職員会議でそれを共有するという流れを作り、実践研究の成果がリアルタイムで院の中に波及するよう工夫した。

表1 ビデオカンファレンスの資料作り過程

カンファレンス			
↑	・カンファレンス逐語録を作成	・ビデオの内容、大切な箇所をexcelの表に記録	
一週間	・校正確認後、協力乳児院の心理職を介して、先方にまとめを送付		
↓			
職員会議	・1ヶ月分のビデオ、日誌、検査、アンケートの回収・職員会議の記録をとる		
↑	・分析用DVD作成	・日誌の打ち出し	・検査結果FB資料の作成
一週間	・DVD、日誌、検査結果FB用資料、アンケートのコピー、職員会議の記録から総合所見を準備		
↓	・当日のアジェンダを作成し、乳児院へ送付		
カンファレンス			

◆発達検査

月に1回、協力乳児院の心理士により子どもの発達検査が行われた。毎月繰り返し実施するため、実施の簡便性を重視し、発達検査は、遠城寺式乳幼児発達検査を行った。発達の様相を、一定のツールで、大まかにつかむことを目的とした。

◆ビデオカンファレンス

7月～12月の間、月に1回、ビデオを用いたカンファレンスを行った。第1回には、乳児院全体のアセスメントのフィードバックを行った。

ビデオカンファレンスを始めるにあたり、まず院の一階や庭にて養育場面の直接観察を行った。その後院の二階にある個室に移動し、パソコンや資料等の準備、施設心理と事前打合せを行った。ビデオカンファレンスは、担当養育者一人につき約30分程度を予定していたが、前もって担当養育者の勤務時間等の調整を施設心理が行い、それぞれの時間を定め、アジェンダを作成した。そのアジェンダに沿ってビデオカンファレンスを進め、担当養育者は、自分の時間になった頃に入室して頂く形とした。なお、施設心理やファミリーソーシャルワーカー(FSW)、園長、主任保育士などは、その月により参加者の変動あったが、ビデオカンファレンス時間中ずっと参加した。

個々のビデオカンファレンスについては、おおよそ次のように進められた。まず前回のビデオカンファレンス以降の対象児の様子について担当養育者から話があり、コンサルタントからは、当日の直接観察や前月の日誌などから得られた理解が伝えられた。また、遠城寺式発達検査の結果について、資料をもとにフィードバックが行われた。以上のやりとりをもとに、現在の対象児の発達の様子について共有がなされた。

次に、食事場面のビデオについて、コンサルタントが抽出した介入ポイントを中心に参加者全員で鑑賞し、それをもとに参加者の意見を伺ったりしながら、ビデオフィードバックが行われた。

全員のビデオカンファレンスが終わると、主に施設心理と事後打合せが行われ、次回の研究スタッフの来園日やデータ受け取りの段取りについて確認がなされた。

1回のビデオカンファレンスで用いた資料一式について、参考例を〈資料1〉に付した。

カンファレンスに入る前後の準備は、図7の通りである。

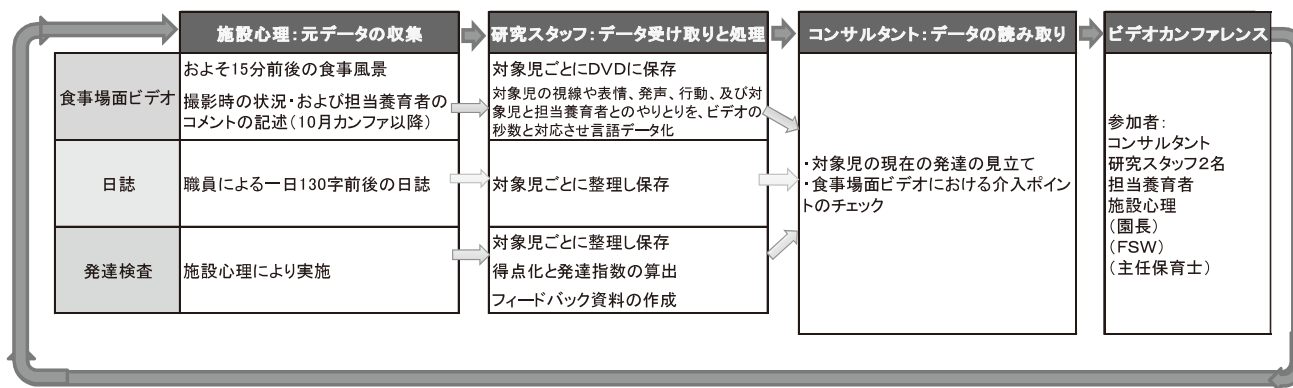


図7 ビデオカンファレンスまでの作業



図8 ビデオカンファレンスが行われた部屋

◆アンケート

9月より、ビデオカンファレンスに参加した担当職員を対象に、振り返りシートの記入を実施した。シートを<資料2>に付した

◆インタビュー

ビデオカンファレンスが終了した1月に、対象児の担当養育者に振り返りのインタビューを行った。

(青木紀久代)

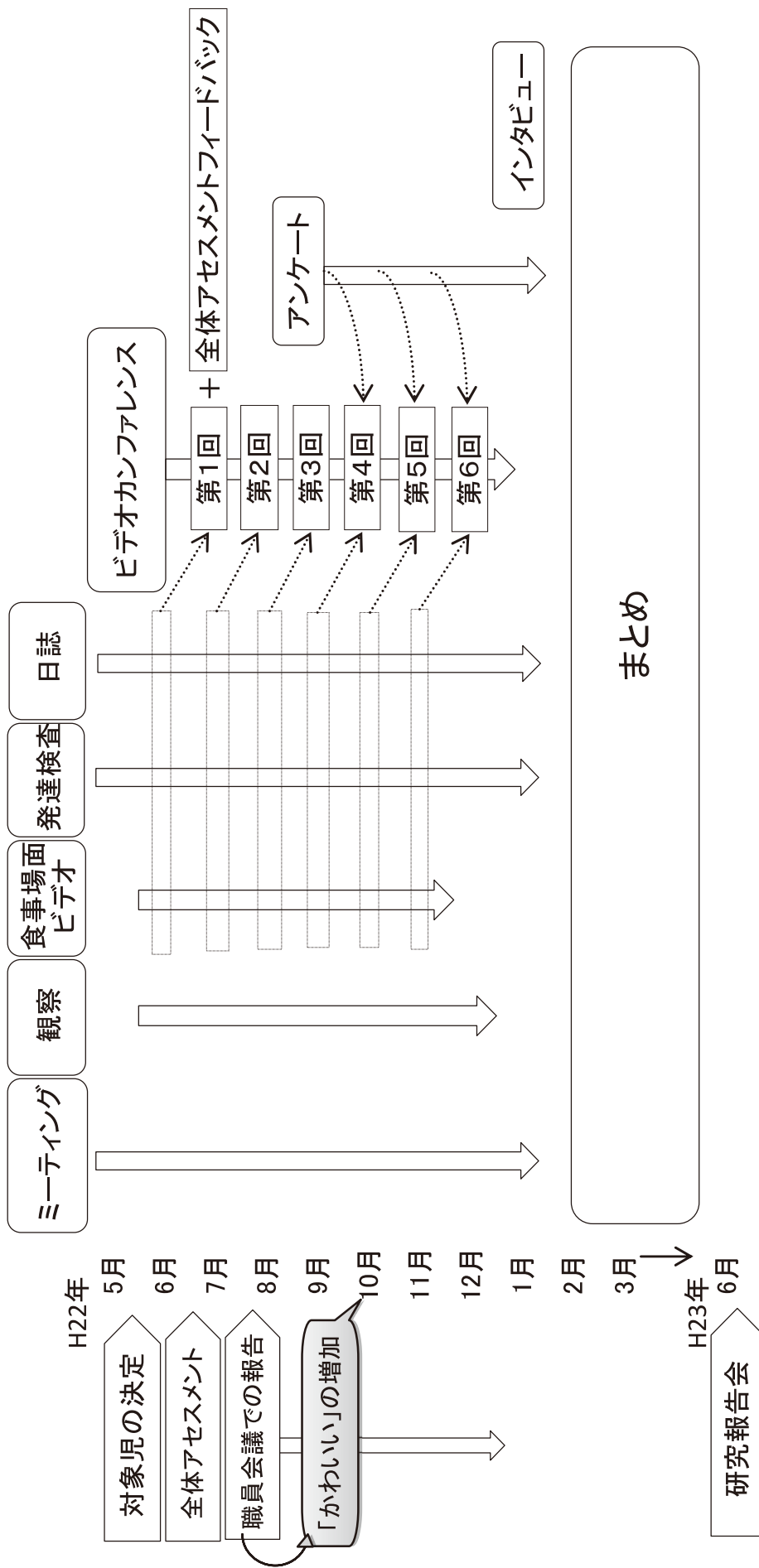


図6 実践活動の経過表

Ⅱ章 実践事例

本章では、6ヵ月間にわたり毎月、対象児の発達についての養育のコンサルテーションを行った3例の経過を詳述する。ビデオフィードバックの様子と子どもの実際の変化をできるだけリアルに伝えるために複数の資料を次の通り作成し、個別所見として統合した。

コンサルテーションに用いた素材は、①生活場面の直接観察、②担当養育者との食事場面のビデオ記録、③発達検査結果、④養育日誌、⑤担当養育者への個別面接である。①は、戸外遊び、室内遊びの両者を含む。協力乳児院の常勤の心理士の協力も得ながら、月一回のコンサルテーションに合わせ、お茶の水女子大学青木研究室にて、発達検査の所見とビデオ場面の子どもと担当養育者の相互行動を言語及び非言語のコミュニケーションとして文章化した資料を作成した。担当養育者と共に1ヵ月の発達状況を確認した上で、ビデオを再生しながら、情動表出場面に焦点化して、担当養育者の見立てや、子どもの反応についてコンサルテーションを行った。また、事後評価をかねて、担当養育者一人一人に対してコンサルテーションに参加した感想等をたずねた。

上記の方法で実施されたコンサルテーション事例の経過を、以下の4つの視点からまとめ、所見を述べる。

1) 養育日誌

協力乳児院より提供された、職員が毎日記載している子どもの養育日誌（1日約130字）6ヵ月分をもとに、【情緒】 【言語・表現】 【運動・遊び】 の3側面からまとめ直し、重要な部分を所見に記述した。

2) 発達検査

施設心理によって毎月実施されている遠城寺式発達検査をプロフィール化し、所見を示した。

3) 食事場面のビデオ撮影記録

研究スタッフや施設心理によって撮影された食事場面の中で、子どもの発達の様子がわかるシーンや、乳児院職員との関係性の育ちのポイントとなるシーンをピックアップし、詳述した。

4) コンサルテーション記録

3) でピックアップされたシーンに対して行われたコンサルテーションを示した。

6ヵ月間の経過を示した後、最後にまとめとして子どもの変化について記述した。

1. コンサルテーション 1 (A 事例)

事例概要

事例A 男子 入所時2ヶ月

○子どもの育ち

6月 (1歳1ヶ月)

日誌

【情緒】「指を吸ってじ〜っとしている、周りを見ている」という記録が多い。また「笑顔はあるが表情が何か冴えない」「表情にコミュニケーションが不足しがち」等と、職員は表情の乏しさが気になっていることが伺える。予防接種では注射が終わるとすぐ泣きやみ、待ち時間その他はとても大人しい、他児におもちゃを取られても数回目には気にしなくなる等のエピソードもあり、全体的に情緒の表出は少なく、指吸いで自己調整をしている様子が伺える。

【言語・表現】「降りるのが怖いようで職員を呼ぶ」等、大人を頼りにして助けを呼ぶことができる。また、つかまり立ちをして職員に見てみて！と笑顔を見せたり、犬を見ては指を指してあ！と示す、職員と目が合うとにっこりと笑う等、大人と非言語的やりとりで情緒を共有することを楽しんでいる。発語に関しては、車を見て「ぶー……ぶー」や「きた」、「いっちゃった」等が出ている。

【運動・遊び】床から自分で立ち上がり2・3歩進む、つたい歩きで1m進む等、移動運動面での発達は順調。遊びの面では、自分から玩具のもとへ行ったり、遊びを変えたりといったことがなく、指をくわえて与えられるのを待っている事が多い。職員が遊びに誘ったり遊具まで連れて行くと、少し遊び始めようとするがすぐ動きが止まり、指を吸って皆を見学している状態へ戻る。遊びの内容は砂をすくってはさらさらとこぼして遊ぶといった、「マイペースに」「黙々と」遊ぶもの。

発達検査

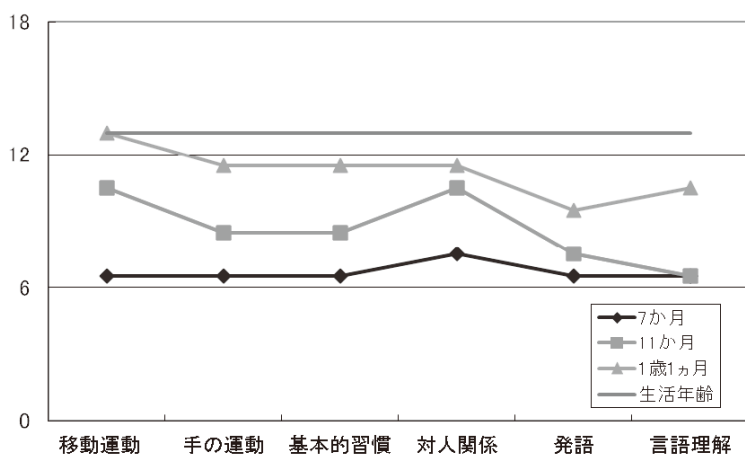
6月(1歳1ヶ月時)の結果

【遠城寺式発達検査】

Aの検査結果(発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
7ヶ月	6.5(93)	6.5(93)	6.5(93)	7.5(107)	6.5(93)	6.5(93)
11ヶ月	10.5(95)	8.5(77)	8.5(77)	10.5(95)	7.5(68)	6.5(59)
1歳1ヶ月	13(100)	11.5(89)	11.5(89)	11.5(89)	9.5(73)	10.5(81)

単位は月で、発達月齢を示した括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

移動運動面を除いた全ての下位項目で平均より下回り、全体的にやや発達の遅れが見られる。特に「発語」と「言語理解」が低く、言語領域の発達の遅れが目立っている。

1. コンサルテーション 1 (A 事例)

事例概要

事例A 男子 入所時2ヶ月

○子どもの育ち

6月 (1歳1ヶ月)

日誌

【情緒】「指を吸ってじ〜っとしている、周りを見ている」という記録が多い。また「笑顔はあるが表情が何か冴えない」「表情にコミュニケーションが不足しがち」等と、職員は表情の乏しさが気になっていることが伺える。予防接種では注射が終わるとすぐ泣きやみ、待ち時間その他はとても大人しい、他児におもちゃを取られても数回目には気にしなくなる等のエピソードもあり、全体的に情緒の表出は少なく、指吸いで自己調整をしている様子が伺える。

【言語・表現】「降りるのが怖いようで職員を呼ぶ」等、大人を頼りにして助けを呼ぶことができる。また、つかまり立ちをして職員に見てみて！と笑顔を見せたり、犬を見ては指を指してあ！と示す、職員と目が合うとにっこりと笑う等、大人と非言語的やりとりで情緒を共有することを楽しんでいる。発語に関しては、車を見て「ぶー……ぶー」や「きた」、「いっちゃった」等が出ている。

【運動・遊び】床から自分で立ち上がり2・3歩進む、つたい歩きで1m進む等、移動運動面での発達は順調。遊びの面では、自分から玩具のもとへ行ったり、遊びを変えたりといったことがなく、指をくわえて与えられるのを待っている事が多い。職員が遊びに誘ったり遊具まで連れて行くと、少し遊び始めようとするがすぐ動きが止まり、指を吸って皆を見学している状態へ戻る。遊びの内容は砂をすくってはさらさらとこぼして遊ぶといった、「マイペースに」「黙々と」遊ぶもの。

発達検査

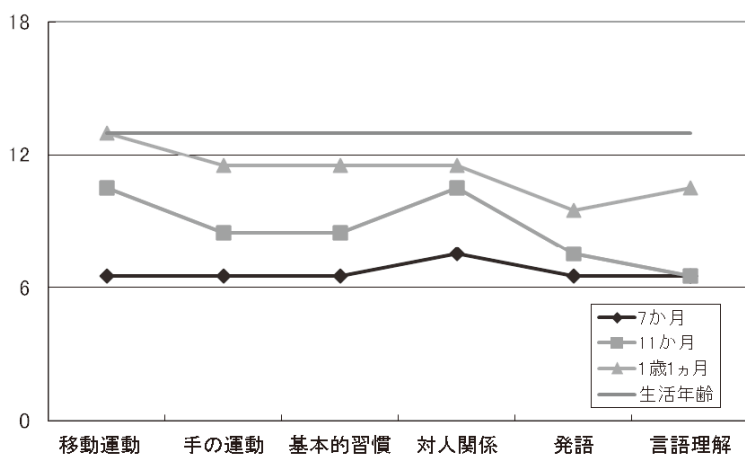
6月(1歳1ヶ月時)の結果

【遠城寺式発達検査】

Aの検査結果(発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
7ヶ月	6.5(93)	6.5(93)	6.5(93)	7.5(107)	6.5(93)	6.5(93)
11ヶ月	10.5(95)	8.5(77)	8.5(77)	10.5(95)	7.5(68)	6.5(59)
1歳1ヶ月	13(100)	11.5(89)	11.5(89)	11.5(89)	9.5(73)	10.5(81)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

移動運動面を除いた全ての下位項目で平均より下回り、全体的にやや発達の遅れが見られる。特に「発語」と「言語理解」が低く、言語領域の発達の遅れが目立っている。

育ちの所見
<p>日誌より、大人と非言語的なやりとりで情緒を共有することを楽しむ姿は見られているが、一方で全体的には情緒表出は少なく、指吸いにより発語の機会、遊びも狭まっているようである。発達検査の結果からも言語領域の発達の遅れが確認された。</p>
ビデオ記録・コンサルテーション記録
<p><ビデオフィードバック></p> <p><シーン></p> <p>同じテーブルにはもう一人のプログラム対象児であるBと他2人の子どもがおり、職員は子ども2人につき一人が食事介助に入っている。AとBが対面、職員（担当ではない）がそれぞれと90度の位置にいる状況。</p> <p>【ビデオ】</p> <p>周囲をキョロキョロと見ながら、指吸いをして待つ。食事が来るとフォークを持ちすくおうとするが、すぐに反対の手で手づかみで食べる。職員がAの口にご飯を近づけると、ほんやりしながら無表情で口に入れる。また職員がBの食事介助をしている時もあまり表情や様子は変わらず、黙々と食べているが、時々お皿をひっくり返したり、腕に付いた麺を投げたりした。8分を過ぎると眠そうに目をこすり、あくびをする。頭を掻いている表情はやや不快感。職員が口に持って行くとAは大きくのけぞる。そんなAに職員が「眠くなってきたねー」と声をかけると、Aは指吸いをする。また口に持って行くと大きくのけぞり、指吸い。もぐもぐしながらフォークやコップをいじり、3回ほどフォークを投げた。Bのコップに手を出し、2人の職員に止められた時には、気にする様子もなく目の前に落ちていた食べ物を手づかみで拾い食べた。その後エプロンを外され着替えている途中で歩行器につかまり歩き出して食事は終了となった。</p> <p>【コンサルテーション】</p> <p>Con.：Aの様子ではあまり美味しそうには見えない。Bは職員が違う子の介助に行くことやきもちをやいている。だがAはそれがなく一人の人という感じになっている。Aは一緒にいる他の2人と関係なく、捨てたり眠たくなったりしている。嫉妬がない。“私がいるじゃない”と伝わるよう、もう少し声掛けをする。Aには“食事と私とあなた”という関係について、熱を入れて関わる必要があるかもしれない。Aの世界に他者が入ってくると情緒が上がってきて、はじめは崩れ易くなる。そうなってくると大変に見えるが、人を使ってなだまることができるようにする。ここでも“私がいるじゃない”等と。先生の体の一部を使って落ち着けていけると、外部に開かれていることになる。それが出来てくると、もう少し大きくなった時に逆に大変でなくなってくる。例えば、耳をAに貸してあげる、エプロンに何か柔らかくて音が出るようなものを付けておく、先生が手をAに添えてあげる等。</p> <p>A担当：赤ちゃんの腕に巻くとカラカラ音のする玩具をエプロンにつけてみようと思う。</p> <p>Con.：なだまる時誰かと一緒に、ということが続くとよい。なだまった時に職員が「あー良かった」と言ってくれる環境。（観察と合わせて）指吸いは自己スージング、つまり泣いたり叫んだりしないように、自分で調整する方略。自分なりに集団適応しようとしている。指吸いにより、発語の機会を自分から奪っている状態になっている。快の情緒が高まって自分で発声したくなれば、指は取れてくる。体を動かす遊びをするのも良いだろう。</p>

7月（1歳2ヶ月）
日誌
<p>【情緒】 他児に玩具を取られても泣かずに指をしゃぶっていたりと、相変わらず指吸いは多く、親指の爪がはがれそうにまでなっている。しかし職員が働きかけると、楽しそうに遊び始めたり、ニコニコ笑顔になったり、時には声をあげて笑ったりもする。大人との関わりを通して情緒が上がっている。</p> <p>【言語・表現】 「たんたんた」「がーん」「やだぶ」「（おやつを食べ終わって）終わっちゃった」等の発声が見られ、また絵本の読み聞かせを楽しんだり、Aの中で言葉が沢山蓄積されてきている。</p> <p>【運動・遊び】 以前に比べ、自分で遊び始める姿、探索する姿がある。押し車や、ボール投げが好き。またよく歩くようになり、5～6mは一人で歩く。</p>

発達検査						
7月（1歳2ヶ月時）の結果						
【遠域寺式発達検査】						
Aの検査結果（発達月齢）						
月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
7ヶ月	6.5(93)	6.5(93)	6.5(93)	7.5(107)	6.5(93)	6.5(93)
1歳1ヶ月	13(100)	11.5(89)	11.5(89)	11.5(89)	9.5(73)	10.5(81)
1歳2ヶ月	15(107)	15(107)	11.5(82)	11.5(82)	11.5(82)	10.5(75)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ

技能	7ヶ月	1歳1ヶ月	1歳2ヶ月
移動運動	6.5	13.0	15.0
手の運動	6.5	11.5	11.5
基本的習慣	6.5	11.5	11.5
対人関係	7.5	11.5	11.5
発語	6.5	9.5	11.5
言語理解	6.5	10.5	10.5

【所見】
「移動運動」「手の運動」以外は月齢相応よりやや発達が遅れているようである。しかしその中でも「発語」に関しては先月より伸びがあった。

育ちの所見
日誌からも発達検査からも、運動面での発達は順調であることが伺える。また、大人との関わりにより情緒が上がったり、発声が出てきたり、自ら遊び始めたりと、「移動運動」での発達と合わせて、徐々に外に向かって意識が開かれてきているようである。

ビデオ記録・コンサルテーション記録

<行動観察および発達検査フィードバック>
A担当：前回以降、自分の気持ちの持ち方が変わって、Aの表情をよく見るようになった。その事によってAが私に向けて発声してくれている。
施設心理：気にして関わっていると、Aからの訴えが増えた。職員会議でも主張ができるようになったと話された。
Con.：今日は外のプール遊び観察。私達が来たせいで、気分は最悪という感じだった。決して触ったりはしていませんでしたが。施設心理へ向かい、抱っこをされ、指しゃぶり。程なくして指は外れていた。そしてもう少し能動的に私達のことを見ていた。先生がいれば、指吸いをせず、外へ意識が向かうようになった。施設心理にべたっとくっついてた。泣き叫ぶって感じではない。先生を使いながら情動調整が出来ていた、というのが一ヶ月前と違い、伸びたところ。不安になっているのは変わらないが、大人を使えていて、泣きわめいて崩れるということになっていないので、私達がいなくなったら、たっぷりと遊べていた。玩具を探索的に遊ぶのをAは出来ていた。閉じていなくて遊びが出来ていたので、情緒面で伸びがみえた。発達検査自体も伸びていた。「言語理解」も伸びている。

<ビデオフィードバック>
<シーン>
Aともう一人Dが隣で食事をしており、机を挟んで対面でA担当が二人の食事介助に入っている。
【ビデオ】
初めから一人で黙々と食べている様子。中身の入ったコップやお皿を逆さまにしたり、ポイッと投げたりすることが何度もあり、A担当は<どうして～？><やだった？>と言うが、あまりAは反応がなく、黙々と食べていた。しかし途中、A担当がDの介助をしている時や、Aが落としたコップ等を拾いに行っている時はA担当のことを見ていた。後半はA担当の出すスプーンに対するのけ反ったりしてぐずり出し、最後はA担当が膝の上に抱っこさせてく眠くなっちゃった？>

となだめて終了となる。

【コンサルテーション】

Con.：食事場面は、楽しく食べることときちっと食べることで葛藤的。もし何かこの場面でやろうとなると、情動の調律、食べて楽しい、子どもの食べているものに合わせた声かけ、表情を合わせるのが7割、残り3割でしつけやちょっと新しいことをやる、そうやると情動を外せずにいけると思う。Aは三者を見る視点はある。わかっている。表現が薄いだけ。三人で話すことがAは出来る。今のところ、Aだけ指しゃぶりしているが、担当だから甘えてこういう「眠いよ」を出している。Aを外に広がるように何かあるとよいかも。

A担当：この日はばたばたしていたという事もあり、気持ちのやりとりもあまり見られないなと思った。

Con.：初めからAは先生を見ていない。自分だけでやっている。このぐずりはおなかがいっぱいだった、眠くなった？

A担当：このまま眠ってしまっている。先生にご指摘していただいて私の接し方が変わって、ぐずるのが前よりちゃんと出るようになった。

【ビデオ】

手づかみで黙々と食べていた所から、A担当の声掛けに反応して見上げ、目が合う。その後A担当がDの介助をしている時にはそれを見ていた。しかし基本的には手づかみで、ななめ上方向を見ながら黙々と食べ、A担当の「Aちゃん上手〜」や「あむあむあむあむ」といった声掛けには反応がない。そしてお皿の中身や、飲みほしたコップを裏返してポイっと捨てる。A担当が、Aの投げたお皿等を拾いに行く際には、その後ろ姿をAは目で追いかけている。

【コンサルテーション】

Con.：この前のシーンと状況が違うが、Aも見ている。

A担当：Aが見ている時、私、気づいていない。

Con.：ががつ食べているようだが、最初先生を見ている。繋がりが全然ないわけではないが、やがて見なくなる。むしろつながるタイミングは最初なのかもしれない。「おいしいね」などおしゃべりを入れてみては？指しゃぶりの子は自分の中から外へ開かれた時に泣く子が多い。不安があるから指しゃぶりをするわけで。ネガティブな情緒を出し、ちょっと最初は大変だが、その後先生を使ってなだまり、「あーハッピー」と立ち直りの時間が大事。皆でやっていく。先生どうですか？

施設心理：今日はAは私を使って、不安から保たれたなって感じがする。庭に知らない人がいなくなると、自分で遊びに行ったから、不安な時に人を使っていたんだな、と。一ヶ月前にはそんな事はなかった。そういう部分が成果かな。今言ったことを職員会議で皆で共有していきたい。A担当が受けた事を皆に知らせていきたい。

Con.：怖くて吸うのと自己刺激が欲しくてやるのと両方？

A担当：テレビを見ている時も吸っている。

Con.：両方あって、だから爪がはがれるまで吸う。とにかく困った時は人がいるよっていうのをAに知らせていきたい。自己刺激のところは少し放っておいてもいい。眠たい時指を吸うなどは横でなでていると取れてくる。不安の調整を自分の中ではなく、外に出すように。

A担当：人見知りとかイヤな音とかがある。

Con.：そういう時は気持ちを大人が先取りして「怖い怖い」って言ってあげるとよいかもかもしれない。

A担当：感情を出させる？

Con.：感情を照らし返す。大人がAを見ていて彼が怖いって感じになっていたら「怖い怖い」でも大丈夫って。自分の気持ちが正しいと言ってもらうことは大事。

A担当：私は子どもがどんな感情か観察してしまう。怖そうなら怖いねって先に表現はしていない。怖くなさそうなら「ばいばいしようか」と言っている。

Con.：それは子どもの気持ちをしっかりと受け止め、解釈しているということですね。そういうのは複雑な情緒を深める時に大事。ただ怖かったよねって言われても、言葉を持つ前の子どもはその解釈がわからない。「あら、うるさい」とAが感じているのと同じようにしてあげれば、自分の感覚が間違っていないという体験を重ねる事ができる。Aと一緒にいて周りが思う事が、Aが思っていることと一緒に「怖い？怖いんじゃない？」ではなく「怖いよね〜」としていく。食事のスタートの3分くらいを大事にする。かなりAが育った感じする。言葉をたくさんしゃべっている姿を早く見たい。もうすぐ出るでしょう。

A担当：言葉と共に甘える方法をわかってきた。扱いにくい感じにもなりやすい。「わー」「ぎゃー」が以前より多い。

Con.：「ぎゃー」と泣かせる前に、その手前で大人がAの感情を捕まえる。「わ」となる前にちゃんと見ていたら分かるから。乳児院の先生は「ふえふえ」となっている時に誰かが応えてくれている。だから子どもたちは噴火しない。ダメだと一人が噴火して、周りの子もそれにつられて噴火する。ベッドで一人寝ている子でも誰かが応答している。

それが乳児院が静かな理由。

食事場面では見返してみるとキューを出している。そのキューが鳴っている間に、<なに？ちょっと待って>と拾う。それをされると、本人は自分の不満を受け止めてもらえているという気持ちになる。

8月 (1歳4ヶ月)

日誌

【情緒】指吸いの記述は、病院や遠足、知らない大人の存在といった緊張する場面とセットで登場するようになり、遊びの場面ではあまり登場しなくなった。また「激怒」や「大泣き」といった激しい情緒の表出が頻繁に見られるようになる。そのような時には抱っこやベッドでのトントンによりなだまっているようである。怖くなった時には職員のエプロンを掴みに来る様子も見られ、大人を使って情緒を調整できている。遊び中も何度も職員の元へ来て甘えては、遊びに練り出したり、近くにいなくても見ているよ～と視線を送ると、安心したように遊び出す。大人との信頼感・安心感がとても育っている。この月は、情緒面での日誌の記述が快・不快ともに、とても増えた。

【言語・表現】<お散歩行く人？>の問いかけに元気よく「は～い！」と答えたり、知らない人の前で顔を手で覆って隠れているつもりだったり、自分の気持ちを生き生きとよく表現しており、職員もそれを見て可愛らしい、主張が増えたと感じている様子である。

【運動・遊び】率先して歩く、自分から遊びに誘い込む等、積極的な姿が見られ、また「楽しそう」と言った記述が多い。友達と追いかけてこしたり、一緒になってキャーキャー騒ぐ等の記述も見られる。

発達検査

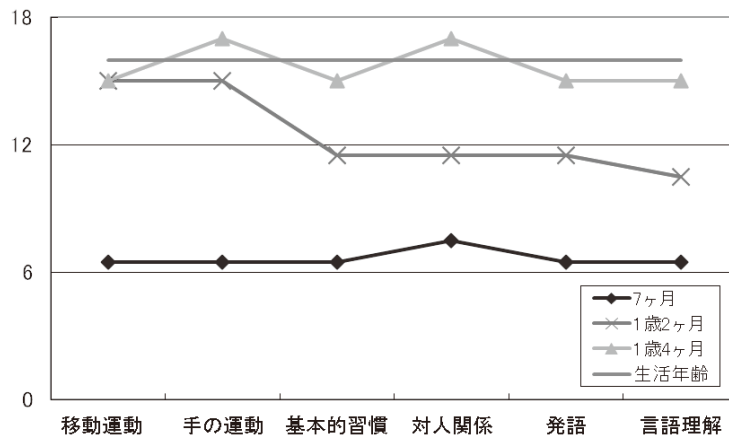
8月 (1歳4ヶ月時) の結果

【遠城寺式発達検査】

Aの検査結果 (発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
7ヶ月	6.5(93)	6.5(93)	6.5(93)	7.5(107)	6.5(93)	6.5(93)
1歳2ヶ月	15(107)	15(107)	11.5(82)	11.5(82)	11.5(82)	10.5(75)
1歳4ヶ月	15(94)	17(106)	15(94)	17(106)	15(94)	15(94)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

全ての領域において、ほぼ月齢相応の発達レベルとなっている。特に「対人関係」と「言語理解」における伸びが大きく、対人的やりとりにおける成長が見られる。

育ちの所見

情緒が大きく崩れることも出てきたが、大人との関係を通してなだまり、一方で楽しい快の情緒も大人や他児との間で沢山共有しており、情緒の幅が広がるとともに対人的やりとりも広がっている。そうしたことが背景にあって、発語や自己表現、言語理解、基本的習慣等の発達が底上げされてきていると考えられる。

<行動観察および発達検査フィードバック>

A担当：前回、その子の気持ちを代弁してあげたいと思うと私が話した時に、まず私の感情を、Aに伝えてしまってもいいのではと先生からアドバイスをもらい、それからそうするようにしてきたら、それだけで、言葉が出てきたように感じる。私の言ったことがAを誘発するというか。

Con.：今日Aと遊ばせてもらった。すごくよく発声していて、指を吸っているよりも、指を指していることの方が多かった。それが変わったところ。自分に閉じこもるよりは外に開かれている。発達検査の結果、Aはとてもよく伸びている。指数で10伸びているということは、普通の期待される発達以上に伸びているということ。1歳2ヶ月時には、1歳2ヶ月で期待されているものの8割しかできていない、それが1歳4ヶ月では、1歳4ヶ月で期待されているものの100以上。期待される速度で伸びている子はいつも100という数字が出てくる。先生と先生のチームの想いが、よく働いているということ。小さな工夫だけどそれが生かされて伸びた。言語も伸びてきた。発達のにもう乗ってきたのでもう少しここを強化していくといい。70を切るというのは、個別ケアが必要。それが回復してきているから、発達検査の結果としても出てきているということ。

<ビデオフィードバック> (担当ではないO職員のビデオ。当日はO職員とA担当が出席)

<シーン>

同じテーブルにはBとその食事介助をしている職員がおり、O職員とAが向かい合って一対一で食事をしている。ビデオを気にしているAの視線を追い、O職員もニコニコしながらビデオの方を向く。

【ビデオ】

Aは自由に食べ、O職員がそれをずっとニコニコと見つめ、たまに目が合って「おう！」というやりとり等がある。

【コンサルテーション】

A担当：うらやましいと思うくらい、沢山目が合っている。O職員はずっと視線がAに行っている。むしろAの方がきょろきょろしていて、O職員がずっと見ていてくれる。そういうのがいいな。

Con.：(Aが) たまに離れる。でも戻ってくると、いる。

A担当：O職員がぶれないでいてくれる。

Con.：注意を向けておくということは、対話が続くし大事。おいしいとうなずくなど、対話をしようとしている。先生達が自分の気持ちを伝えるとかということと、つながっていると思う。連動してきている。Aの発達の変化でもあるし、保育者との間で、より一層際立たせてもらっている感じ。先生方はどう？

主任：あんまりAのテーブルに着くことはなかったけど、すごく成長したなあって。皿をぼーんとしたりして、どっちなんだろう、どっち？て聞いて…というやりとりだったのが、全然違ってびっくりした。

Con.：私たちが最初見たときは、そんな感じで、A担当もそこを心配されていた。最初から食事場が社交的な場所として成立していないと、単に栄養補給の場所になってしまう。ぐしゃぐしゃ、がつがつになってしまう。分け合って、ぐしゃぐしゃだけど「ねっ」とやりながら食べていると、ちゃんと食べられるようになった時に違う。情緒的にやりとりがないままにやっていると、驚くほどぐしゃぐしゃにむさぼり食うことになってしまう。人間らしく食べる。食べっぷりが違う。いかにも対話している顔が、あまりなかったが、ここでは心の成熟が見えた食事場面だったと感じる。先生はいかがですか？

A担当：変化を感じた。

【ビデオ】

同じテーブルで食事していたBは食事を終え、席を立ち、周囲には遊んでいる子やテーブルに遊びに来る子もいた。Aはスプーンで食べながら、時折頭を横にかしげてO職員を見て、O職員も一緒に頭をかしげてアイコンタクト。また、Aがビデオの方が気になり一瞬視線を横にした後、視線を前に戻した瞬間、O職員と目が合ったのか、にっこり笑ってまたスプーンで食べ始める。食べている最中に、またA主導で頭を一緒にかしげる仕草をする。

【コンサルテーション】

Con.：場面としてはぐしゃぐしゃしていて、でもつながれている。周りがうるさくても、自分にちゃんとマッチしてくれているというのは、他の刺激から浮き出して、ここ(先生と子)でやりとりをしている。これ指を指して、何かやっている。面白いのは、直接食べることに関係のないことだけれども、マッチングをした後にAは喜んでいる。マッチングした後に食べて、おいしい、って感じ。自分から発したものにマッチングしてもらって、食べたものは、おいしい。情緒と結びついてごはんを食べる。それは食のQOLが高い。バンバンと叩く、スプーンをカンカンすることがさっきもあった。頭にきているわけではなくて、つながりたいという気持ちの表れ。別のビデオでもあった。Bがにこおとして見ていた。食べるということとは全然関係のないこと。にっこりした後、必ずぱくっとしている。

【ビデオ】

食事を終え、Aの手や顔をO職員がタオルで拭いていると、Aは大あくびをし、その後身体を大きく後ろや横へくねらせる。しかしそのまま泣き始めることはなく、O職員がAの手を握って〈ごちそうさまでした〉とやろうとした時には、再度ビデオを向いてニッコリし、O職員もニッコリして終了となる。

【コンサルテーション】

Con：身体がこう崩れたんだけど、不機嫌にならない。眠たくても泣かない気持ちのよい終わり方ができる、こういう終わり方ができて良かった。Aが最初のビデオよりも、表情が出てきた。黙ってもぐもぐ食べていたのが問題だったので、ここ1、2ヶ月の変化で一番大きいところ。

施設心理：きちんとやりとりができていて、声とか反応できている。撮ってきた中では一番できているビデオだったので、すごくいいなあって。最初に撮ったビデオとの差をすごく感じた。気にかけて関わってくれていることで、こんなに変わるんだなあ。Aの発達ということもあると思うが。

Con：出せば応えてくれるということが分かった。不快感情とか怒りとかではなくて、ちょっと仕掛けて、いい感じで人と関われるということが、すごくいい。性格的に言えばマイルドさが出てきている。かわいい、愛らしくなる。私にも今日、少しおどけてくれた、にやっと。ああいうことは以前にはなかったので驚いた。あとは、Dとの並行遊びをして、そして接点があって、というのがあった。年齢的に見ればそういうのがあって当然だけれど、今まではあまりなかった。Dがこうしたから自分もこうしてみようっていうのが、今日の遊びの中で見えた。先生がつなげてあげると、取り込んで、もっと遊べるようになる。それができてくると、すぐにファンタジーが出てくるので、そこが思考発達のもう一つの壁。自分の中でイメージが育って、それを共有していく。Aはそれができると思う。2人で育っていくことが大事。Dと一緒に、こちらが台詞を乗せてつなげてあげると、ファンタジーが出てくる。苦しいところで走っていたようなAが、突然トップに出て走ってくるようになる。表情が無くなっている子というのは、そこに電気が全然ない子。Aははじめ、ともし火がない状態だったが、ものすごく発達してきた。

A担当：子ども同士の空間を見守ってあげるということ？

Con：今日私がやったのは、2人が車に乗って、〈どうしますかー？行きますか？〉と言うと、「あ、あ、あ」と言うのでく行きますよーと乗せていって、Nも〈乗りますかー？〉と言って乗せて、2人で車に乗せていった。

A担当：人が絡む何かをこちらが作ってしまっていていいということ？

Con：作るというか、先生も入って遊び込んでしまう。砂場のへりに座って、ああできたねと言うと、子どものファンタジーでしかないの、カップケーキでおしまい。先生が入ってさあお山を作りますよーと行くと、遊びが展開する。保育園でもダイナミックに遊べる保育者はそんな風にやっていく。丸い筒状の道具があると水が使える。そういうものとか、ジョウロ式になっているもの。子どもがお山を積むことができなくても、こちらが積んで、子どもが刺せる。一つの遊びが展開できる。1歳半頃とかにそういう遊びができるよ。その後ブロックとかになってくだろう。お互いが見合って待つ、ということが出来る。それは先生が遊びながら、色んな人を巻き込んでいく。今は小さい赤ちゃんで、見てて、危ない時に手を出すというふうになっているが。

A担当：人数の制限は？保育者一人に子ども3人か2人が目が行き届く範囲だと思うが。

Con：40代くらいの保育者が8人くらいが上手にやっていた。8人で遊べと言っているわけではないが、順番に満遍なく声をかけていくことで、最後は大きな山の周りに皆でいた。

A担当：それは周りに傍観している保育者とかはいない？つまり、ここでは、赤ちゃんを抱っこして見ている、大きい子を束ねて遊んでいる養育者がいて、という感じ。

Con：もちろん8人を一人でというのはできないが。その保育園はここよりもすごく敷地が広くて、散らばって遊んで好きなところに集まっていくので、そういうこともある。砂場は安全で、食べることだけ気をつけていればいいので。その保育園は5歳までいるので、色々やっているのをじーっと見ているとか。とりあえず今年の一年の実践で、責任を持って関わるのは食事場面ということだが、このことも遊びに広げていってもらえればと思う。お母さんと比べて、多くの子と関わることになるが、買い物に行かなくていいし、食事でも作らないし、その分遊ぶ。大人がダイナミックに遊びを仕掛ける。すると乳児院の中に活気ができる。

A担当：つい子どもから自発的に出てほしいと思うので、子ども同士が関わり出すと、離れて見ているが、今お話を聞いて、一緒にいるんだから離れることなかったなあと思った。

Con：先生方は補助自我と思ったらい。相手を感じていることを先に言ってあげてもいいし、ちょっと手を伸ばして届きそうなものがあれば届くようにしてあげる。入ってしまっていていい。自分達が自然と分かるようになるとは、どうやって分かるようになるかと言えば、やっぱり経験なので、少し面白いグループに入って色々な経験をするのが大事。こういう顔が見られて良かった。

9月 (1歳5ヶ月)

日誌

【情緒】ちょっとしたことでめげて大泣きしたり、ぐずることが多く、さえない様子（耳垂れや鼻水など体調の悪さが関係している?）。「甘える」という記述が出てくるようになり、散歩では先月の率先して歩こうとする様子とは打って変わって、A担当を見つけては抱っこを求めることが多いようである。嫌なことがあると少し遠くても職員の所まで「しっかり抱きつきに来る」ようで、職員との結びつきの強さを感じられる。

【言語・表現】欲しいものを指差して示す、遊んでいるものを取られそうになり“僕が遊んでいるの”といった感じで主張する、「A君の～」と聞こえるような言葉を発する等、主張がはっきりと出来てきている。A担当を呼んでいるような発声もあるとのこと。

【運動・遊び】大好きな車やお気に入りの絵本にじ～っと見入っていたり、遊んでいたものを大人が少し借りると大泣きしたり、他の人が別な所へ行ってしまうと、自分の興味のあるものへ近づいていったりと、遊びに関して自分のこだわりを見せるようになってきている。

発達検査

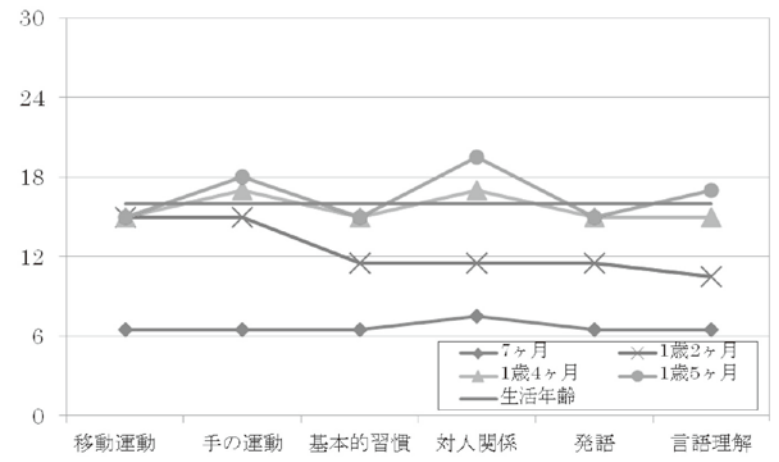
9月 (1歳5ヶ月時) の結果

【遠城寺式発達検査】

Aの検査結果 (発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
7ヶ月	6.5(93)	6.5(93)	6.5(93)	7.5(107)	6.5(93)	6.5(93)
1歳2ヶ月	15(107)	15(107)	11.5(82)	11.5(82)	11.5(82)	10.5(75)
1歳4ヶ月	15(94)	17(106)	15(94)	17(106)	15(94)	15(94)
1歳5ヶ月	15(93.8)	18(112.5)	15(93.8)	19.5(121.9)	15(93.8)	17(106.3)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

先月に引き続き、全般的に月齢相応の発達を示している。また、先月同様、「対人関係」と「言語理解」における伸びが見られる。

育ちの所見

自己主張をしっかりとするようになってきており、出せば受け止めてもらえるという確固とした安心感や主体性が育ってきていることが伺える。

ビデオ記録・コンサルテーション記録

<行動観察および発達検査フィードバック>

Con. : 1ヵ月でDQが20伸びている。初めて100を超えてきた。追いついた。割とバランスがとれている。対人関係が出てくるのはAらしい。「言語理解」が伸びてきている。このあたりはどう？

施設心理 : 「対人関係」で伸びたのは、項目で言うと、「担任から離れて遊ぶ」。「言語理解」の「命令を実行する」というのは、前回できていなかったのが、丸になった。今は1歳5ヶ月くらいの発達。

Con. : 遠城寺式の検査は情緒発達のカテゴリーがない。先生の心配は発達もそうだったが、対人関係に関すること、情動調整とかだった。そこが遠城寺式だと測りにくいということはある。でも情動調整がネックになって伸びが抑え

られていたのが、なくなった。先生の感覚からすると、情緒的に変わったとか、ある面で扱いづらくなった？ごねるとか、そういうことが感じられていると思うがどう？見えないけど全体がぱっと伸びた。100を切っているところに対して療育、訓練をしたわけではないが、情緒的なコミュニケーションをするにはどうすればいいか？ということこれまで話し合ってきた。項目にはないけど、伸びる原動力になった。発達は両輪。一個がダメだとこっちがブレーキかかる。情動のところ先生が問題を感じて、色々やったことで、他の発達が伸びてきたということだと思う。ここまで伸びたのは、情動面だったから。例えば身体的・知的な障害があると、ここまでの発達は難しい。発達停止だったのが伸びてきている。それも急速に。

<ビデオフィードバック>

<シーン>

A担当と90度の位置にD（自分から要求・主張を沢山する子）、対面位置にAとE（入所二日目くらい。食事は全て介助が必要な子）が座り、4人での食事。

【ビデオ】

A担当、それぞれの子どものごはんやお茶の準備をしている。子ども達はそれぞれにごはんを食べ始め、Aは手づかみでごはんを食べていた。一度ふと左手に持ったスプーンを見てスプーンを使うも、その後はまた手づかみで食べ始める。席に着いたA担当がAの口にごはんを持って行くと、「ああ」とのけ反って泣く。そして自分で手づかみで食べる。またAのスプーンにA担当が触れようとする嫌がるが、やはりスプーンは左手で持ったまま、右手の手づかみで食べる。

【コンサルテーション】

Con.：手で食べている。

A担当：私も結論が出ていない。どうしたらいいのって言いながら他の子にいつてしまった。

Con.：ここは3人を見なければいけないから、まずある程度の世話をしなければいけない。日常普通にあること。そのときに、<ちょっと待って>などと声をかけるといい。本人が置かれている状況についての言葉。何がしたいの？と聞いても答えられない、仕方ない。それよりも、Aは待っているわけだから、こちらから<ちょっと待ってね>とつながる言葉をかける。何をしたいのかと言えば、先生と食べたい。このような場面が続く。一人もくもくと手づかみで食べる。前から手づかみ？

A担当：前はすごく上手く使えていたのに、最近ちょっと。

Con.：この食事は手づかみ。いつもではない。スプーンで食べている時というのは、実は一人でもくもくと食べているのではなくて、誰かと食べている。一人でもくもくと食べるというのは、栄養補給になる。普通はこうなってからスプーンで食べ始めるということはない。でもAは、7分過ぎた頃から、スプーンを使うようになった。それまでも一応離さずにスプーンを持っている。

【ビデオ】

A担当がAに対して<スプーン貸して>と言い手を差し出すが、Aは渡さずもくもくと食べている。しばらくして再度A担当が<スプーン貸して>と手を出す、そこでもやはりAは渡さなかった。しかしその後、それまであまり使っていなかったスプーンでごはんをすくい、「あー」と大きな声を出しながらA担当へスプーンを持つ腕を伸ばし見せた。そして自分の口へ持っていこうとしたが、A担当の方へ差し出し、A担当は<んぱ、んぱ、んぱ>と食べる真似をする。Aはパクッとスプーンから自分で食べる。

【コンサルテーション】

Con.：スプーン貸してと言うのね。この子(E)は？

A担当：初日か二日目。奥の子(D)が、新しい子に反応している。

Con.：その中で、先生はAに対してコミュニケーションの言葉を言った。<貸して>と。そして手を出して待っている。Aは手をちょっと見た。それまでは、先生がスプーンを取り、食べさせていた。まだ先生は他の作業があるから、入ってはいけないんだけど、その後はやっぱりスプーンで食べられている。今まで食べられていない。

A担当：さっきのがきっかけなんだ。

Con.：Aなりに、今は無理だになってというのがわかっていた。Aは一人で待てるようになるのが次の課題だと思う。自分ひとりで食べている時は手づかみでいい。<スプーン貸して>と明確にコンタクトを取ったときには、渡して、すぐスプーンで食べて、「あーん」というコミュニケーションが出てきた。自分ですくって嬉しくて先生にあげた。ごはんという行為の中でやりとりした。今いいのか悪いのかも見ているし、変な形だけど、先生を待てる、期待して待てる。そういうことが見えている。コンタクトを取っていて、7分待っていて、あーんて自分から。“横の子と先生と一緒に”というのはできないが、“自分と先生”というのはよく分かっている。このときはとっても楽しそうだった。そしてスプーンを使うようになる。

【ビデオ】

A担当が中身のなくなった大皿を皆に見せてくほらおしまーい！>と言う。するとDがまず『うい！』と驚いた表情をしてみせ、AはA担当の顔を一瞬見てから、身体を乗り出して大皿を覗き込み、「うい！」と言った。その後もスプーンを使ってごはんを食べている。そこでA担当も自分のごはんを食べ始める。Aはまたごはんをスプーンですくい、A担当に手を伸ばして見せながら、自分の口へ。Dも同じようにする。

【コンサルテーション】

Con.：これ先生すごくいい。<おしまい>と先生、ほら、やりとりが始まっている。最初の不愉快さから持ち直してスプーンを持っている。これを見たとき、スプーンは食事を食べるものではなくて、つながるところの方が始めなんだなと思った。やがてスプーンは食べるのに使うものなんだ、と子どもは分かってくる。食べるだけならスプーンでなくてもよかった。先生とのコンタクトが始まってから人とつながる道具になる。私達は、スプーンを持って食べさせるようにしつけるという考えがあるけれど、スプーンはコミュニケーションの道具だったりする。Aの場合は、最初は落ち着かなくて不愉快で、でも長い時間の中で、10分以上経って、先生が落ち着くまで、待っていた。先生が色々な人にやりながらも、スプーン貸してと、Aとのやりとりを入れてくれたから。先生が食べていると、Aが落ち着く。奥の子も同じ。Dのスプーンの話もこのビデオで出てくる。食事のスプーンとは、子どもがどんな意図でやっているのか考えることが必要だと思う。

A担当：考えたことなかった。

Con.：でも見ていると、食事場面でスプーンを通してコミュニケーションしているし表現している。

A担当：こうやって待っていることに何の意図も感じなかった。叩くということには言っていたが、この15分の中でAが使っているスプーンの意味はちゃんとあった。

Con.：最初は持っても逆の手で食べていた。今はスプーンで何かしている。Aのいいところを先生が引き出しているし、慌しい中で、つながるタイミングをAなりに、見極めている。もし私が心理的に関わるとしたら、こういうふうなタイミングを計って待っていてくれるAの思いに応える。<どうもどうも、待たせたね>とAの思いを汲んで声をかける。「待たせるなよ」と今度はそういうことが言えるようになる。時間的な見通しの中で、先生に気持ちを言う。「まだ？」と言うということは、自分で期待して待っているということ。いつなかと聞くことは、いなくなって泣いてしまうということの次の段階。泣き崩れていなくて、先生とごはんを食べられたという体験は、Aにとっていい。

施設心理：スプーンを中心に見たことがなかった。でもいろんな意味がある。大人とつながる手段の一つ。きっと色々なものがつながる手段として使われているんだなあと思う。そういうところ細かく見ていければと思う。食事場面だけでなく。

Con.：「手ではなくてこれでしょ」と言うこと、教えること以外に、スプーンを使う窓口が色々ある。一緒に先生もすくって食べるとか。先生と一緒にごはんを食べて、もぐもぐとやっていて、自分も一緒にやる。食事という文化的な方向へ。先生が最初色々な人にあっちゃこっちゃやっている時には、手で食べている。このくらいの時間まで3人でニコニコやっているといるのは、先生の力量がある。このくらいだったら誰か泣き始めて、先生がその一人に向いているうちに、他の子も泣き出すというふうになりやすい。ここでは尻上がりに楽しい食事になっている。前半のほうは慌しいが、でもその中でちゃんと楽しくなっていく。最後に楽しい食事というのがいい。最後に泣き出してしまうのは、眠たかったのねと意味づけするけど、それだけではない。

A担当：途中までは、諦めてはいけないという気持ちで入っていた。途中から、Dが私にすごく話しかけてきて、対応が満足すれば落ち着くとどこかでくくっていたが、Dはこのままだと思ったとき、私に諦めがちょっと出てしまったところが正直あった。でもこれで見ても思い返すと、諦めつつも、目の前に座らせたことで、Aがずっと視界にいたので、違った。真横にいたら、諦めた時点で交流は途絶えていただろう。

Con.：要求がわりと出せる子は、横でもいい。どうだろうと先生の様子を伺う子は横顔を見せ続けるのはよくないかもしれない。Dは天真爛漫に食事を楽しんでいる、自分を出せるタイプ。出るからこちらも対応することが多くなる

A担当：つい対応。

Con.：A、待ったりするんだなと思った。

A担当：嬉しい。諦めないで待っていてくれていたんだって。

Con.：待っているときは別にスプーンを使わなくていい。肴つまんで“いいよ俺はこっちで飲んでるから”みたいな感じで。なかなかやるせない、哀愁のある感じ。でも面白い、先生が<貸して>と言ってくれたら、気付ける。俺がいるじゃないかと、カンカンしない。こういうところから持ち直してくるタイプ。こっちが気が付いて、“見ているよ”と伝えることで、いい気持ちになる。そうすると、ない時にくれと言えるようになってくる。今までであったのになんでないの？と。あって当然というくらいに。いつものあれをくれ、というふうに本人が要求できるようになる。

嬉しかったのだろう。こういうときに4人が一緒になる。お皿見せたとき、皆がこれを見る。皆が一緒にいる。

A担当：でも私ちょっとこの子のことを無視していた。

Con.：バラバラにあげているのではなくて、皆お皿に視線がいつている。“いただきます”、“ごちそうさま”も大事。お皿を持った後、大げさに動きを作り出す、<なーい！>と横に体を動かす。そうすると3人も「なーい！」と言う。<あーおいしい>とかね。そういうのを作ってもらえればいいと思う。

A担当：Aがちゃんと待っていてくれているというのが、この先やっていくのに、安心した。他の子の対応に追われて、ごめんねと思いつつ、待っていてくれているということに確信がなかったので、諦めずにそこまで対応を延ばすということができていなかった。諦めるということではなくて、Aとの関係はずっと続いていて、自分ができる時にやる。何か期待を、やってもらいたいというのを蓄積することを、ちょっとずつできるといういなと思う。

Con.：ちょっと分離する時、相手がどう思うかこちらは分からないけれど、空白を埋めるような言葉を言う。<ごめんねー、待ってた？>とか。いない時間もつながっていたんだよと確認できる。対象恒常性というが、分離した時、いなかった時も、相手の気持ちをこちらが抱えるように“お待たせ”と言う。すると3歳になった時には自分が待っていた時の気持ちを今度は自分から言いやすくなる。まずこちらが分離の穴を埋めるような、ちゃんとつながっていたことを確かめられるような言葉を言ってあげる。例えばおかわりを取って来る時、子どもは大体その前の行動をやっている。それを誰も見られないわけだけど。そうやって待っている子どもに対して、<お待たせ、一人にさせちゃったわね>そういう言葉を添え続けることによって、今度は自分が出せるようになる。「寂しかったんだよ。待っていたんだよ。」と。分離が平気という感じ、人がいなくても大丈夫というシナリオにならずに寂しがれるのは、寂しがってくれる人が家庭の中にいるから。

A担当：小さいときでもそういうふうを考えていくんだ。

Con.：<はい、来ましたよ～。はい、今到着～。>と、分離と再会を何回も楽しむ。

A担当：言葉は少なかった。こういうところだからしょうがないと思ってしまって。いなくてごめんね、というのが素直に思えてなくて、言葉に出てこなかった。気にして発していききたい。

Con.：<ごめんね>でなくていい。お待たせというのは、再会を喜んでいること。職員がいなくなるについて、可愛そうなことしているとは思わなくていい。喜んでいる顔を見ることで、彼らは満たされる。乳児院の人達は、見てあげられていないことに罪悪感を持ち、でもしょうがないじゃないと自分で落とし前をつける、ということをしがち。そうじゃなくていい。戻ってきた時に再会を楽しむ、それが大切だと思う。

10月 (1歳6ヶ月)

日誌

【情緒】笑顔に関する記述が多い。機嫌が良い、満足そう、楽しそうといった記述も多く、全体的に情緒は落ち着いており、快の情緒が優勢のよう。また、A担当に身体をべったりと預けたり、身体をよじらせたりと大人への甘えがとて出ており、遊び中も大人に抱かれながら指を吸うことで落ち着く場面がある。

【言語・表現】まだ遊んでいたいということや、行きたい場所、読んでもらいたい本などを、声を上げてはっきりと主張する様子が見られる。また大人の面白い動きや絵本に対して「もう一回」と言うのが流行っているようで、「もう一回」と催促しては、職員に「もう一回なの？」と聞かれ、大きく頷く様子が可愛いと、別な日に違う職員がそれぞれに書いていた。

【運動・遊び】先頭を切って遊びに出掛けたり、皆が散歩車の中一人歩いたり、一番大きく手を振っていたりと、エネルギーにあふれているよう。また他児とのやりとりも多く、他児の乗る車を押したり、食事中3人でケタケタと笑い合ったり、他児のマネをしてガンガン遊ぼうとしたりしている。

【養育者の視点の変化】「～して楽しそうだった」という記述だけでなく、「～してとっても可愛らしかった」という、2人の関係性の中から出てきた記述が多くあった。またAの成長に関しても、「～できていた」という評価でなく、「たくましかった」「とってもかっこよかった！」等と、自身の感動を含んだ記述も見られた。

発達検査

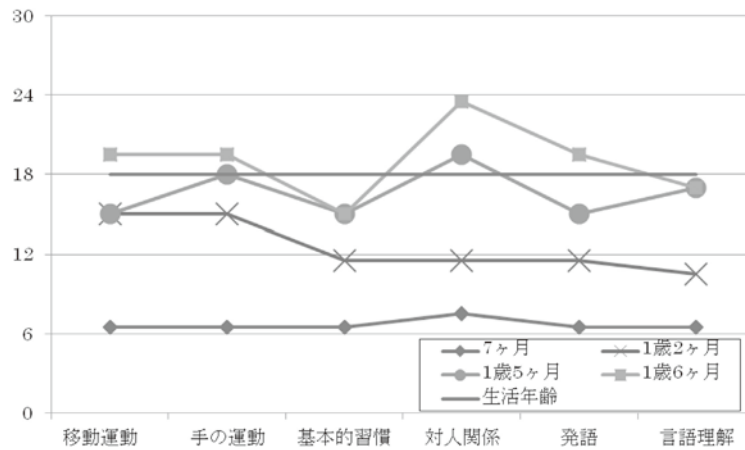
10月（1歳6ヶ月時）の結果

【遠城寺式発達検査】

Aの検査結果（発達月齢）

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
7ヶ月	6.5(93)	6.5(93)	6.5(93)	7.5(107)	6.5(93)	6.5(93)
1歳2ヶ月	15(107)	15(107)	11.5(82)	11.5(82)	11.5(82)	10.5(75)
1歳5ヶ月	15(93.8)	18(112.5)	15(93.8)	19.5(121.9)	15(93.8)	17(106.3)
1歳6ヶ月	19.5(108)	19.5(108)	15(83.3)	23.5(130.6)	19.5(108.3)	17(94.4)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

「基本的習慣」以外の領域では、概ね月齢相応あるいはそれ以上の発達を示していた。「移動運動」「対人関係」「発語」における伸びが大きく、能動性・積極性が育ってきていると考えられる。

育ちの所見

日誌・発達検査の両面から、Aの能動的で積極的な姿が確認できる。先月の自己主張の芽生えから始まり、大きく成長している。職員側の感じたこと、感動が含まれている日誌の記述の多さは、発達検査における対人関係領域における発達の伸びと関係しているだろう。

ビデオ記録・コンサルテーション記録

<行動観察および発達検査フィードバック>

Con.：前回、「言葉が伸びますよ、でもほんとくと伸びない」と話していたが、今回言語が伸びた。「発語」がDQ108.3という、約15も伸びた。1ヵ月で、4ヵ月分くらい伸びたということになる。急に伸びたなという感じはした？

A担当：発声はほんとによく出ている。歌ってるんじゃないかなという時もあるくらい。

Con.：普通の子だと、4ヵ月で育つものが4倍速で育った。養育日誌の方も急に変わりだした。面白かったのは、皆がすごく「かわいい」と書いている。やりとりができてきているし、大人とつながっている感じ。つながりながら、ぼろっと何かを言う感じ。わざわざ“見ていて”かわいい、ではなくて、“関わっていて”楽しかったということ。記述の中に、誰と誰がとか、何があったとかが入っていて、自分が一緒に関わっていて、楽しかったという感じ。今までは満たしてあげて喜んでいて、という感じだった。能動的に関わっている。

施設心理：ニコニコとしている場面がすごく増えたね、ということは、職員の話の中でよく出てくる。「楽しそうだねー、陽気な感じがする」と職員の話の中でよく聞かれるようになった。簡単に諦めない、「こうしたいんだーぎゃー」というのが、ここ最近で出ているような気がする。寝かすときに、なかなか寝たくないという泣いたり、おもちゃを自分から欲しいと子どもの輪の中に入っていき姿も見られる。

Con.：1ヵ月に一回会っていて、初めて終始にこやかに過ごしていた。最初の情動のベースラインが以前より上がっている、貯金がある。前は人見知りの時期ということもあったと思うが、今日は私を見て、探索とか興味の方が上回る感じだった。にやっとして、何かイマジネーションがわいて、近づいてきた。先生がいらしたことも関係するかもしれないが。怖いけど、興味がある、近づくという貯金が出てきている。引っ込んでいたところから出てくるときに、Aはにやっとする。新しく来た私と関係する際、安心感のベースがある。自分の情動が使えている感じ。これは日誌

と、私が今日見たことがびったり重なっていて、成長したなあと感じた。横のつながり、友達にも興味が出てきて、やれるようになっていく。

<ビデオフィードバック>

<シーン>

A担当が10日間の海外研修から戻っての最初の食事。午前中はA担当と乳児院近辺で機嫌よく遊べ、その流れでの昼食となる。両隣には月齢の高いD、Fがいて、それにつられてよく食べていたよう。

【ビデオ】

ビデオが回り始めた瞬間から、ビデオに向かってニコニコ顔で「おあ！」と身を乗り出し、相手の反応を試しているよう。A担当はそれぞれの子どもに話しかけながらスパゲッティをよそっているが、Aは食べながらその手つきをよく見ている。そしてFに取り分けている時に、お皿を覗き込んで「うえあー」と発声する。

【コンサルテーション】

Con.：そもそも今までの雰囲気と違うからびっくりした。カメラに向かってこんなことして。カメラがあるとき、今までは少し引っ込んでいた感じ。全然違う。Dとは一番やりとりができています？

A担当：Dと、もう1ヵ月月齢が低い男の子、Eが仲良しで、その姿をAが見ている様子をよく見る。

Con.：この時Fとやりとりしている？

A担当：見つめ合っている。

Con.：先生との間で関係が出てきて、縦の関係が安定してくると、横の関係が育ってくるということの典型。Aは1歳児クラスになるから、もうすぐ2歳？

A担当：AもDも2歳児。

Con.：2歳児クラスというと、皆で揺れて食べています。“ほら～”とかやって(食べさせるフリ)子ども同士でやりとりしたり。もちろん食事介助が必要だけど、先生が2人で子どもが10人とかで、楽しく。お互い同じものを食べていて、相手も食べていて、楽しいですね。全然もう、ぴーちくばーちく、訳分からない話をずっとしていたり、揺れていた。横との関係が出てきたのは、先生との関係が出てきて、言葉も出てきたから。Fも自然な感じで相手にしている。3人で楽しめる食事。今までは<誰々ちゃん>と個々に対応せざるを得なかったが、皆で楽しむというところまで発達が上がってきた。Aも、先生どうかなーと見ている感じですね。あつという間に上がった。

目があって「うー」とか「あー」とかのやりとりができた。今度は、A一人でも食べられるようになる。先生とAの関係だと落ち着いて、待てるようになった。一人で食べられるようになって、それだけではなく横の関係も利用できるようになっていく。先生を起点に、みんなで楽しむ。“食卓”という言葉がある。食卓で楽しむ。食事の仕方を教える、一対一ということ以上に。例えば両側にいる職員同士がしゃべってもいいし、ちょっとずつ今日あったことの話を入れても。先生はそれをやっていたらいい。

【ビデオ】

A担当がAにスパゲッティを差し出すと、AはA担当の目をじっと見つめながらぱくっと食べた。A担当は<ああっ上手>と言い、またスパゲッティをとりわけながら、<Aちゃん、今日サッカー上手だったね><上手、上手>と話しかけた。AはやはりじっとA担当の目を見ながらもぐもぐしている。

【コンサルテーション】

Con.：私たちは分からないけど、なにか文脈があったのだろうか。

A担当：はい。

Con.：食べるのが上手、ということから、“上手”つながりで、ここへすーっと今日の話を話している。私が見た中ではこれまで先生そういうことをされていなかったが、Aとの間で自然に育ってきている。先生が次のステージへ。こういうのは“食卓の会話”。今日あったこと、色んな思い出を話すことは、意外と2歳児クラスでできている。これは今までは、先生はこの子達にはやっていない。たぶん無意識に、<上手～>から<サッカー上手～>と。まだ遊び食べもするが。

今度は3人をつなぐような食事。トマトを<ほらー>とか言って、3人にくるっと見せる。新しいもの<これだよー>とか。3人をつなぐというのは、座っている子ども達の視線を1つにすること。一回こちらに注目させて、先生がぐるーっと子ども達の顔を見て、食べる。食卓を楽しくするという形でやっていくとよいと思う。先生が意識してこの子の時間、と区切ると、他の子達は自分の時間ではないと思う。でも食卓の中で<あぁおいしいの>ってなると、ジェラシーを感じない。一人ひとりの時間を分割していると、待たされている時にジェラシーを感じる。どの子も一緒にという意味だと、皆で食べた、ということになるので、これも発達がそろっている子達のごはんの場面ではいいかもしれない。

【ビデオ】

A担当がスパゲティを取り分け、自分の所へ置いてくれるのを見てうなづきながら「ま、ま、ま」と発声する。A担当も同じように「ま、ま、ま」と応える。

【コンサルテーション】

Con.：<ま、ま、ま>と、Aは行動に乗ってくる言葉をすごく大事にしている。今日も車を押し出すと、自分で「終わった」という意味で言葉を発していた。

施設心理：「よしよ、よしよ」って。

Con.：行動に合わせて先生たちが言ってくれた言葉を、自分から能動的に使っている。子どもは最初は受動的でいい。貯まってきて、色んなことが満たされてきて。それが自分で使えるようになってくる。

【ビデオ】

Aが前掛けを自分で外して机の上に置く。A担当、<もうごちそうさま？><ごちそうさまでした>と頭をぺこりとすると、Aはちらりと見て、頭を両手でかきながら、横方向、ビデオの方を見る。

【コンサルテーション】

Con.：すごく面白いのは、これも先生を見ている。<ごちそうさまでした>を見てから、横を見た。こうして、人を見て。“ごちそうさまでした”を皆でやるとそれで一体感が出る。

Con.：喧嘩をしないようにしていくというのがこのくらいの年の課題だと思うが、先生と2人でやっていたことを、4人でやっていく。“ああ嬉しい”を3人と私(先生)でやる。つながりあって楽しいと、子ども達自身でやろうとしていく。喧嘩が始まると先生が仲裁に入る、とすると、喧嘩すると先生に訴えに行く、というコンテキストになっていく。くつつく→ひっかく→座る→一緒に揺れる→楽しい、というセットが、食卓で出てくるようなものができる。

A担当：今の話のように、丁寧にやるということは、個別にみるということだと思っていたので、食事も、この3人をつなげて食べるというやり方をしていなかった。Dはやきもちを焼くような様子がちょくちょく見られるようになって、なんでそうなるのかな？と思っていた。でも私がAを中心に広げている食事をDは感じ取っているんだろうな。3人をつなげていられていない。

Con.：ジェラシーが出ているというのは、横の関係を見ているということなので、それをうまく使う。Aが一人の世界で没頭していた時に、先生が働きかけて、発達してきた。追いついて来た。そこで、今度は食卓を囲む、ということをするというと思う。

【全体を振り返りながら】

Con.：ビデオに向かってスパゲティ、今までなかった。自分の口に運ぶもので、そんなふうにするものではなかった。Aも横のつながりが見えてきたということ。これはもう明らかにこちら(ビデオ側)に働きかけていて、相手の反応を見ている。こういうのは今までなかった。「うおっ」と出ている。Aは自分を満たしながら、周りの人とつながることができている。今芽生えている。人間らしい食事にカムバックしてきたし、次のステージでやれる。それは先生がまずい関わりをしているというわけではなくて、Aが成長していることを確認している。4人で食べる経験ができたら、もっと落ち着くだろう。なぜなら楽しいことを子どもでやる。仲のいい兄弟の発達という感じ。子ども同士のけんかの仲裁。

A担当：子ども同士で解決させるということ？

Con.：皆で楽しかった、という経験を。先生がいなくても、3人でこうやって。

A担当：まずは私も入って、皆でこうなれるっていう経験を積んで。

Con.：これがとっても楽しかったら、次の日からでも子どもはやる。お母さんと遊んでいて、お母さんがいなくなると、お母さん側の遊びをする。されたことを、今度は自分がやる。お母さんに同一化する。それと同じで、4人で楽しい経験したら、3人でやる。3人で楽しくなるようにとやっていた人に、子どもは同一化するから、それができる。一個一個の快の体験は、重ねることが大事。よく本を読んでもくれる先生がいなくなると、子どもが自分で読むようになる。楽しい食事と同じ。

A担当：されたことの蓄積が、その子の中であって出てくるという考え方から考えると…フォークを取り合いになったので、もう一本渡した、そういう仲裁をしてしまったが…。それは個別的に考えて、どっちも取めてあげればいいんだ、と思ってやったがどうか。

【ビデオ】

Aが大皿に気を取られている間に、隣のFがAのスプーンを取ってしまう。気付いたAは「うきゃあ～たのー(Aの?)」とA担当に訴えかける。A担当は、<これはA君の。Fちゃんのはこっち。ほら、あった！>とFの反対側の手を上げる。しかしFは自分の方のスプーンを置きAのスプーンを離さなかったため、A担当はAに新しいスプーンを渡した。

【コンサルテーション】

Con.：それもいいと思う。集団生活なので、トラブルの数がそもそも多い。絵本の取り合いになれば、それぞれを満たして、ある程度トラブルを避けるということをする。それはそれで必要。もう1つある。取られて、嫌なんだというAにとってのトラブルがある方に、<あなたはこっちよ>と言っている。そこで3人でいるためにどうすればいいか、を工夫すると、<もう1つ？もう1つ欲しいの？>と言ってみるといことができると思う。先生と自分の2人の会話で、「僕のが取られそうだ」と先生にキューを出している。そこで先生が<2ついるね>と2人の子どもを向いて言う。先生が、もう1つあったら解決できる、ということをして2人に伝えて、それを子どもが理解する。そして今回みたいにもう一人が持っていたら<あった!>と持ってくる。<〇〇ちゃんのだからダメ>という仲裁はよく見ますが、2人が自分たちで「1個足りない」と言ってくるようになるにはどうしたらいいか？を考えると、そういう工夫ができると思う。そうでないと物を取り合うことになる。足りないということを先生は知りたいわけでしょう。もともと環境が提示するもめごとの種。一つだから仕方ない、というのは1つの解決の方法。二つあれば<良かったですね、失礼しました>とこっちが引き受ける。そしたら2人は仲良くできる。そういうキューの出し方、解決の仕方、色々なところで応用できることだと思う。皆で楽しくやれるような応答の仕方をグループで考えていっていいと思う。

A担当：一冊で取り合いがあったら、<私が読んでみようか？>と提案してみて、それでもダメだったら出す。

Con.：ただ、2人は聞かれて自分の意思を決定する、ということはまだできない。引っ張ってみて。大変だった火事の場面に出向いていって、<大変だ、大変だ、どうしようどうしよう>と先生が方向転換して、<はい、あった!>とやっていく。こっちが役者になって情緒を豊かに出していく。

Con.：最初は1対1のやりとりだった。次の段階として3者でやれるというのは大事。社会の縮図なので。この子の発達段階が来ているので、とにかく個別で食事を満たす、ではなく、今度は食卓を囲む、というのがキーワード。身についている自動的なやり方で、養育者は気付かないかもしれない。ビデオで見た場面で、例えばどうすればいいか、職員間で話合っていないかといけないとは思いますが、スローガニックにやってもいいと思う。つながる前はなかなか大丈夫かな、と思っても、一度つながってしまうと、子どもはすぐ次に行ってしまう。その時に初めて、愛着が理論的に大事だということが分かる。愛着は、怖くてひっついていられるだけでは、意味がない。探索ができる、というところに、初めて愛着の意味がある。最初は先生とつながるということが課題だったが、今はそれができてきたから、バンと進んできた。先生とのつながりは切れることはないので、今度は3人で、“皆と私”、“皆で楽しくなる”、ということができればいいと思う。

A担当：自分でこうなっている(指吸いのマネをする)出だしのときに、私は気付かなかったので、大丈夫だという判断の積み重ねでこうなってしまったと思うが、今は泣いていないから大丈夫だと判断してどこかへ行く、離れるという判断はしてもいいのか？前だったら、Aがふりむいた時に私がいなかったことで、出せない、ということの中で入ってしまった。

Con.：でも平気なんだ、と思わずに、埋めるようにするといいと思う。一人で平気というのは、自分の中にいるとか、してもらったことを自分でやっている。分離が平気かどうかと言ったら、2歳の子でも3分と持たない。同じ遊びをせせと3分、人がいなくなってできるというのはない。分離が平気というわけではない。分離して戻ってくる、までがセット。いなくなっても戻ってくるという確信を裏切らないことが大事。<お待たせ、ちょっと行ってくるね>という、子どもが時間的に予期できる言葉かけをするといいだろう。

A担当：<今日はもう帰るね>と言って帰ってもいいものか？今は大分私との関係が深まってきたところなので、すごく泣いてしまう。<明日の朝来るね>と言ってもすごく泣く。今テレビが大好きで、見ている間に帰ったりする。

Con.：先生たちが“帰る”という言葉はどうか。“帰る”というより“いってきます”の方がいいのかなとも思うが、そのところは乳児院としてはどうですか？

A担当：そんな風に言う職員もいる。

Con.：どうなのだろう、<いってきますー。また明日帰ってくるよー>とか、その方がいいかな？とふと思った。それは職員で統一した方がいいと思う。

A担当：そうですね。そういうことをしてもいい時期だと思う。

Con.：再接近期に入っている。再接近期というのは、離れることができるようになってきたけれど、離れていたんだ、と急に思い出して不安になってしまう。情動のコントロールが一時できなくなる。忘れることもできるが思い出すということもできるようになる。忘れていたことを思い出すとすごく不安になる。そんな時期。それを上手に抱えてくることが必要。

Con.：たまたま黙って出ていってしまうことは普通にある。お母さんがお仕事とかで、行かなくてはいけなくて、ずっと黙って出ていくとか。<誰々さんと楽しくしてね>と言うとか、それでも泣いてしまうけど、<また戻って来る>ということが大事。

11月 (1歳7ヶ月)
 日誌

【情緒】A担当の姿を気にして遊ぶ。楽しく遊んでいても、A担当の姿が見えなくなると名前を呼んで探し、見つけると抱っこをしてもらう。また、遊びに行く途中でふと思い出したようにA担当の名前を呼び探しに行くこともあったようだ。再接近期に入り、分離がテーマとなっている。

【言語・表現】「やだぶ」がブームになっているようで、事あるごとに「やだぶ」と使うよう。しかし嫌だという主張だけでなく、「やだぶ」と言った後にニッコリもするようで、大人とのコミュニケーションツールとして使っている。「ククカ〜」「カカテテちゃった〜」「うちよん」などA語で沢山お喋りもする。

【運動・遊び】一人マイペースに、そして積極的に遊びに出る様子は先月までと変わらず。今月は更に、車だけでなくこれまであまり遊んでこなかった玩具で遊んでいたりと、車の中でも更に大きいダンプカーで遊んだり、滑り台でも滑るのではなく立って遊んだり頭から滑ろうとしたりと、遊びが発展している様子が伺える。

発達検査

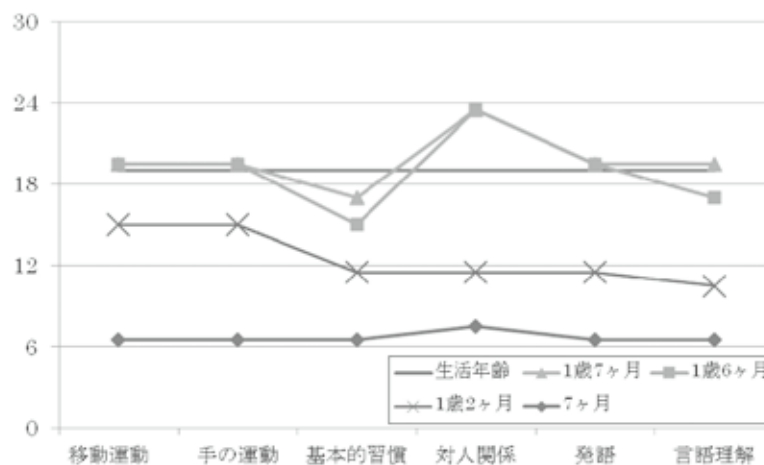
11月(1歳7ヶ月時)の結果

【遠城寺式発達検査】

Aの検査結果(発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
7ヶ月	6.5(93)	6.5(93)	6.5(93)	7.5(107)	6.5(93)	6.5(93)
1歳2ヶ月	15(107)	15(107)	11.5(82)	11.5(82)	11.5(82)	10.5(75)
1歳6ヶ月	19.5(108)	19.5(108)	15(83.3)	23.5(130.6)	19.5(108.3)	17(94.4)
1歳7ヶ月	19.5(102.6)	19.5(102.6)	17(89.5)	23.5(123.7)	19.5(102.6)	19.5(102.6)

単位は月で、発達月齢を示した
 括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

前回の検査から20日しか空いていないこともあり、伸びている領域は少ないが、「基本的習慣」と「言語理解」が伸び、月齢相応の発達を保っている。

育ちの所見

発達検査からは、発達の偏りも見られず全般的に発達が順調であることが確認された。情緒的にも、現在A担当を情緒的エネルギー源として探索行動に出掛けるが、分離がテーマとなる再接近期にさしかかっている。

ビデオ記録・コンサルテーション記録

<行動観察および発達検査フィードバック>

A担当：全般的な様子だけでいうと、Aの解放している様子が、心地よくて、わーと怒ったりするが、私に出してくれているという感じがすごくして、お互いが素直に対応できているのではないかと思います。Aだけでいうと、成長している、格闘している時期かなと。突然怒り出したりするし、それは私が気付かなかったことでの、“突然”。おしゃべりも、伝えたくて喋っている感じがする。

Con.：2歳くらいまでの5,6ヶ月が、出すだけ出して、収めていく時期になるので、情緒のレパトリーが“～しすぎちゃう”のがこの時期の子どもの特徴。トータルで見ると不安定に見えるが、むしろ重要なのは、情緒のレパトリー。

丸太のいかだの上をばたばた歩いている感じで、生き生きしているけどすぐ落っこちてしまう。最初の4月頃ご心配なさっていた、内側にもってしてしまうということ、それを解き放つ、確かにそののこのところをやってきた。

<ビデオフィードバック>

<シーン>

午前中をA担当と一緒に過ごし、その流れでの昼食。他児が他の机を希望したので、結果的に久しぶりの1対1の食事となる。

Con.：とっても楽しそうな食事だった。先生の意義のあった関わりだけを、秒単位で拾ってきているが、それがとても多い。一対一だからということだけではなくて、やっぱり見つけ合いがあって、文脈のあるやりとりができていた回数が多かった。先生が途中で結構いなくなった、それでもここまであるということは、Aが意味のある食事をしていて、ということになる。

【ビデオ】

A担当はお皿を用意したり取り分けたりしており、Aは自分でスプーンを使って上手に食べている。そしてふとビデオの方を見て、にっこり「やだぶ」と言う。そしてまた食べる。A担当は料理を取り分けながら、<おいし？><もっと食べる？>等話しかけるが、Aが再度ビデオの方を向いてにっこり手を動かすと、A担当もふっと微笑み、<Sさん（ビデオ）いると気になるね>と声をかけた。

【コンサルテーション】

Con.：Aが笑って、先生も吸い込まれるように笑っている。食事に全然関係ないことだけれども、先生も一緒に情緒に乗かって、一緒に揺れている、情緒が通い合っているというのが、べたに出ているシーン。そういうのが今回いっぱいあった。心理的には豊かなものが乗っかってくる。同じ時間の中に、かわいい、かわいいわよ、というのが乗っかってきている。そういう記述が今回たくさんあった。

【ビデオ】

<ちょっと待ってて、サラララップしてくる。待っててね～>と言い、A担当は席を立った。AはA担当を目で追い、その後「あわぶ。あわぶ」と独り言を言いながら、食べ続けた。ごはんがスプーンから落ちてしまった時には、「落ちちゃった。～ちゃった」とビデオに向かって言う。手づかみで食べ始めるが、すぐにスプーンで食べる。A担当の行った方向を振り返り、次にビデオの方を見て、「あばぶ」。ちょうどA担当がその時くお待たせ、ただいま>と言って戻ってくると、A担当を見上げて「あばぶ」と言う。

【コンサルテーション】

Con.：2分近くいない。だけど面白かったのは、通常の子はいなくなるともっと表情がなくなって、おかしなことになるんだけど、Aは1分40秒待っている。気持ちの良い状態にしたままで。そのことがAの成長だと思う。先生との関係がしっかりあるので、心を温めるように備蓄されている。誰もいなくなると、くしゃくしゃになってしまうとかではなくて、食べ方もしっかりしている。先生が戻ってくるまで、一人の孤独な食事の顔ではないでしょう。それで「あわぶ」と自然に、とっても自然に話しかけている。思い出してもらいたいが、最初の頃、見ていないとき確かに寂しそうな顔だったと思う。一人にさせてはいけないとか、そういう思いで最初スタートされて、つながりを付け替えてきたけれど、子どもが、ちゃんと先生を待って、食事ができるころまで、水準をあげてきた。待てるというのは、待てるから平気なんだというわけではないが、2分近い間、情動がいい状態で、落ち着いて食事ができるというのは、人間的にいい。

施設心理：自分があるからかな、とも思ったが、その割にはビデオを見ていない。確かにそうだなと思う。(ビデオの画面は)大きく撮れているが、実際はもっと離れている。

Con.：一人になって、不安があるというのは誰でもそうだけれど、一人になって、情動が混乱するのを抑えられている。Aは芯のところがすごく育ってきていると思った。発達する手前でものすごく人とのつながりを求める。今度は先生に、自分の情緒が、機嫌が悪くなるとか、そういう時は先生にぶつけてくるとかがあるが、それを超えると、今度はお説教でもちょっと聞けるようになってくる。

【ビデオ】

A担当がAの食べるのに合わせて<あむあむあむあむ><ゆっくりゆっくり>と言葉をかける。

【コンサルテーション】

Con.：このシーン、いっぱいある。食事の完成バージョンを見たかなと思った。2人で心通わせて、楽しく食べられる、そして世話もしてもらえる。先生がずっと<あむあむ>してくれていて、それで口に入れる、ということができている。これは当たり前のように思えるかもしれないが、初期の頃はなかった。目線を取り込んで、「あむ」とやる。一人ではない食事。全部ぐしゃぐしゃにして、全部下向いて、栄養を取っているというだけだったのが、食事になっている。

先生方、どうでしょうか？

FSW：成長が、すごく感じる。

Con.：もちろんAが成長しているということもあるが、食事場面として、1つの到達があるかなと思う。2人で作り上げた。一対一でも、こういうふうに展開しない食事は多い。

【ビデオ】

Aが一回手づかみでお芋を持ってからスプーンに移そうとしたのを見て、＜上手～。おいし♪＞とA担当が言うが、Aのスプーンからお芋が落ちてしまう。A担当が＜もう一回！＞と言うと、AはA担当の顔を見ていたので落ちたのに気付いていないようで、「おいし！」と満面の笑みで言う。A担当は笑って＜もう一回！＞と言い、それらがリズムのいい掛け合いのようなやりとりになっていた。

【コンサルテーション】

Con.：この「おいし！」がいい。もう一回というのは、「おいし！」をもう一回ということ？

A担当：スプーンに乗せるのをもう一回、と言ったのだと思う。

Con.：Aは先生との関わりの中で、「おいし！」と言いたくなった。結局Aはこの日ものすごく食べていた。すごくはっきりおいしい、と言った。

A担当：もっとそこを褒めてあげればよかった。

Con.：そう思わなくてもいい、美味しいは楽しいでもあるし。Aの中から出てきた。使いたくて出してきた。最後ごはんも全部食べてしまう。お芋とごはんとゼーンぶ食べてしまった(笑)。食事のまとまりをずっと保って食べていた、ぐしゃぐしゃになることなく。

【ビデオ】

自分のお皿のごはんがなくなったのを、Aが「あっちゃ、あっちゃ」と訴えると、A担当がお皿を受け取って＜ねー、偉い。ピカピカだもん＞と言いながらお皿によそう。Aはそれを見て「ええーい」と満足そうな顔をする。

【コンサルテーション】

Con.：今の顔の満足そうな顔。前回までのビデオは、ポイントがいくつかあって、拾いだしてお話をしていた。ということは、取り出したいポイントが限られていた。でも今回は、全部が、同程度にいい。じわっと染み出していて、全体が落ち着いて見られる、調和した食事。先生とやりとりがあって、食事の自律と、情緒のやりとりが、全部調和して出来ているので、まとまりのある食事だった。先生方、何か印象など。

施設心理：やっぱりこう、最初から2人でという感じがする。最初のビデオだと、一人で食べていた。今日のビデオでは、そこにいなくても、目で追って食事をしているので、1人ではなくて2人で食事をしているよう。一対多でやるとなかなか難しいかもしれないが、Con.がおっしゃったように、つながってる気がするな、と思った。

FSW：他の子がいてもできるのではないかな、と思った。たまたまこれは違うけど。

Con.：ちょっとしたことだが、笑ったときに先生もふっと笑ってくれるとか、ああいうのはなかなかできない。

園長：Aが満足しているという感じ。

施設心理：前のビデオはこんな感じ(下を向いてごはんをかけ込むフリ)になっていた。今回のビデオは上を向いて、そこ(体の手前の空間を示して)を含めている感じがする。

Con.：食事は前から“快”ではあった。でもむさぼるように食べる感じで、それは人との関係が切れていた。栄養と自分、快感と自分。そういう子は大きくなった時にむさぼっている、がつがつしていることになる。とても面白かったのは、発達検査と日誌。発達検査は100の大台に乗ってきて、過不足ない。はじめに心配だった頃は、80で発語が低かった。でもこの半年の間に回復ができていく。ものすごく変わったのは、元々遅れの問題というより、表情とか情緒の面をすごく心配されていたが…日誌を見ると、先生は「かわいい」をたくさん使っていて、他の人も皆「かわいい」と書いている。こうやって見ると、たくさんかわいい、かわいい、と。今月は特に多かった。最初の1歳何ヶ月の時はあまりなかった。それは、食事場面が1つの象徴。関係ができていくなど、見ていて我々が感じる。他の場面でも、何かAは豊かさを獲得している。かわいいということは、関わりを持っているということ。Aは、A担当以外にも、記憶に残る、直接的なやりとりを、ちゃんと生き生きとしていると思った。実際Aは、変わったし、育った。豊かに成長した。「～して、楽しそうだった」という記述は、普通によく見る日誌の書き方。なのに、Aはそういう中で、複数の人に日を変えてかわいい、と書かれている。そういうことを、職員会議の中でも話されるといいかもしれない。「かわいい」と書きなさい、と言ってしまったらおしまいが、自然に書いているということに共有していただけたらと思う。記述ってこんなに変わるんだなと思った。最初はAの中だけの成長かと思ったが、他の子と比べても、やっぱり特別多いなと思った。

A担当：前はAの表情が想像できない記述が多くて。でも最近の日誌を読むと、こういうことをやって、こういう表

情だった気がする、と想像できる。関わってもらえているんだ、ということは確かに感じている。関わってもらえているというのは変だが、皆に対する信頼感というか。

Con.：Aと先生の親密感がまず大事だが、その信頼できる関係が、今度はAと周りの大人達をつないでいく。もっと大きく信頼を育てていく。これはチームの強み。私達は食事場面だけに関わっているが、先生と継続的に関わっていて、職員会議などでも報告してもらってきた。現実のコミュニケーション、日誌、A自身の成長(発達検査の結果から)、の3つが上手にいったケース。それはAが情緒面を気にしていく、という点で乗りやすいケースではあったと思う。

A担当：先生に色々お話しいただいて、見逃さないように気を向けていたが、やっぱり落としてしまうことも多くて、全部は受け止められないし、でも受け止めたいし。そういう葛藤の中で、〈ただいま〉とか付属的なこと、すぐできることも固めるということもしていただいた。自分でも気にかけて、修正したいというところだけでなく、周りからも固めて行く、ということもしていただいた。

Con.：〈ただいま〉という声掛けは、分離が終わったんだということが分かる。

A担当：以前は、子どもの世界を大事にするあまり、ずっと行ってずっと帰ってくるほうがいいのかと思っていた。でも今思うと、この子にとっては私も含めて一緒くたに一つの世界なんだと、考え方が遠くから見えたと思う。

Con.：侵入的でないという意味でいいが、一回子どもが嫌そうにしたら、適切に触ってほしいのであって、触ってほしくないという意味ではない。養育環境として、みんなで話し合いながらやっていただければと思う。とても愛くるしくなっている、いい養育なんだなと思わされる。チームに感謝ですね。

まとめ

6月時点では、情緒表出が少なく、指吸いにより発語の機会、遊びも狭まっていた。発達検査では、全体的に発達がやや遅れていたが、特に言語領域における遅れが目立った。食事場面は“一人の食事”という感じになっており、Aの世界に他者が入ること、自己スージングではなく大人を使ってなだまれるようになることが課題と考えられた。

7月に入ると、大人との関わりの中で情緒が賦活される様子、また発声や自ら遊び始める様子も見られ、「移動運動」での発達と合わせて、徐々に外に向かって意識が開かれてきたようだ。また食事場面のビデオを通して、つながるタイミングは食べはじめの頃にあるということが共有された。

8月には、全般的に月齢相応の発達にまで到達した。その背景には情緒の幅と対人的やりとりの大幅な広がりがあったことが考えられる。情緒が大きく崩れることも出てきたが、大人との関係を通してなだまっていること、また楽しい快の情緒を大人や他児との間で沢山共有している様子が日誌の記述から伺えた。食事場面も、職員とのマッチングがあった後にバクッと食べるなど、つながり感がとても感じられるものになっていた。

9、10月になると、自己主張をしっかりするようになってきており、能動的・積極的で生き生きとした姿が見られるようになった。連動して、「かわいい」など職員がAと関わっている中で感じたこと、感動が含まれている日誌記述が増えた。発達検査においても対人関係領域が月齢相応以上の発達を示していた。食事については、コミュニケーションの道具としてのスプーンの意味などに触れながら、この頃から他児との横のつながりや、分離と再会という心理的テーマが多く話題とされていった。Aは新たなステージへと入っているといえた。

11月の発達検査からは、発達の偏りも見られず全般的に発達が順調であることが確認された。食事場面は、食事の自律と情緒のやりとりが調和しており、まとまりのあるものとなっていた。

(山崎玲奈・青木紀久代)

2. コンサルテーション 2 (B 事例)

事例概要

事例B 男子 入所時3ヶ月

* 早産、脳室周囲白質軟化症 (PVL) 修正月齢-3ヶ月

○子どもの育ち

6月 (11ヶ月)

日誌

【情緒】 高熱が2度でいたが、特に長泣きやぐずりの記載が少なく、情緒が大きく崩れることは少ないよう。「大人を呼ぶ」「やり取りが嬉しそう」「アピール」「甘えっ子モード」など、職員との関わりの記載が多く、Bが大人と求めていることに注目し、職員も対応している。

【言語・表現】 言葉そのものの記載はないが、職員との関わりの記載は多い。

【運動・遊び】 寝返り、さらにははいはいができるようになり、自分で移動できる範囲が急激に広がっている。玩具で遊んでいるというより、寝返りや移動に注目している記載が多く、運動発達が伸びている時期のよう。「身体のどこかにいつも力が入っている」と記載があり、今後の運動発達にどれぐらい影響を及ぼすか。

発達検査

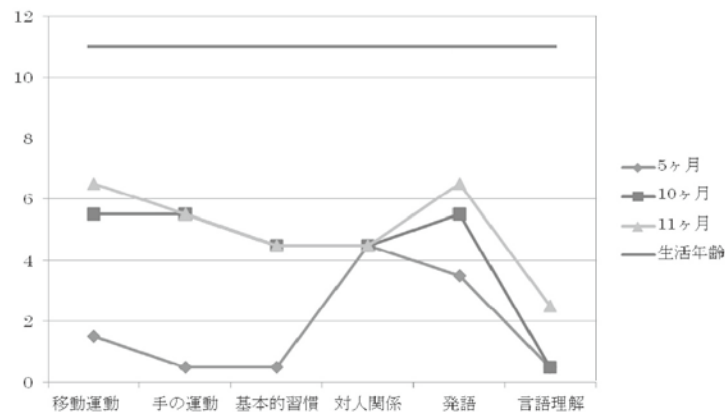
6月 (11ヶ月時) の結果

【遠城寺式発達検査】

Bの検査結果 (発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
5ヶ月	1.5(30)	0.5(10)	0.5(10)	4.5(90)	3.5(70)	0.5(10)
10ヶ月	5.5(55)	5.5(55)	4.5(45)	4.5(45)	5.5(55)	0.5(5)
11ヶ月	6.5(59)	5.5(50)	4.5(41)	4.5(41)	6.5(59)	2.5(23)

単位は月で、発達月齢を示した括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

全般的に生活年齢よりも発達がゆっくりであり、特に「言語理解」が顕著である。10カ月時よりも少しずつ数値は上がってきているため、徐々に伸びていくと考えられる。

育ちの所見

高熱がでたり、体重増加を気にしている記載が多く、そのためか食事がどれだけ食べられたかということに注目した記録が多い。また、職員とのやりとりや、笑顔でいる記載が多いため、情緒的には穏やかでいることが多いよう。

<ビデオフィードバック>

<シーン>

1テーブルに子ども4人、職員2人で昼食。Bは全介助が必要であり、対面に座ったもう一人の子どもは半介助が必要。

【ビデオ】

B担当は片手でBの頭を支え、片手でスプーンにすくった食事をBの口にもっていく。B担当が<あーん>とスプーンを口を持って行くとBは食べ、B担当は<くもぐもぐ>と言う。BはB担当を見ながら食べている。後半、B担当が他児に食べさせているとBがスプーンを落とし、B担当が拾って渡す、ということを何度か繰り返す。B担当が机を拭いているとBが食器がのったトレイを引っ張る。B担当がスプーンを口を持って行くとBは食べる。食べ終わるB担当が<おいしかったねえ>と頭をなでるとBも「ふうん」と言いくん>とB担当も応答。手や顔を拭いてもらい、B担当がBの手を持って合わせて<ごちそうさまでした>とぱちぱちする。「えええ」<ねえ>と何度か声のかけ合いをし、B担当がBを抱っこをして席を離れる。

【コンサルテーション】

Con. : BとB担当はコミュニケーションをしている。飲み込んでいく体験ができています。3人で1対1、1対1となるのではなく、1対2の関係を作っていく。食事を貰っている時と貰えていない時とがはっきりと分れていると、貰えないと腹が立つという、嫉妬するという、ささやかだが発達がある。Bの動きがゆっくりだから感じていないように見えるが、この園に来て10ヶ月、かなりB担当が密に関わってくれていたんだと思う。

B担当 : 私は4月からの担当で、前の担当が関わっていたと思う。

Con. : Bにまとまりがあるのは、順番を予期しているから。今日I職員がBをとんとんとリズムに乗ってたっちをさせて遊ぶ関わりをしていた。大人がBの体を支えると「んしょ」とBも力む。大人の補助があれば「んしょ」となる。関わりの中でBは自分が立っている感じを持っている。Bも高揚していた。そういうBの発達において、情緒的には三人での食事を繋ぐことができる。一緒にごはんを食べている子それぞれに<〇〇ちゃん(一緒に食べている他児)と一緒にだよ>と言って繋げていく。Bは発達検査を見ると、年を追う毎に落ちているが、Bの発語はどう？

施設心理 : 発声という感じ。

Con. : 喃語は？

B担当 : 喃語というより発声のよう。

Con. : ほとんどしゃべらない？ふてくされた時に発声がある方がコミュニケーションができるようになる。自分から手を伸ばしていけるようになるといい。発声を促すようにするために、うつぶせ遊びなどどう？Bはひっくり返る前に「あっ」と言っており予期している。それが言葉につながってくる。Bには予期できるダイナミックな遊びがある。情緒はあるし、アイコンタクトも出来ており、そういう面で発達出来ている。Bはじっと見ている、今日参与観察に入っている間に何度か目が合った。目が合った後、はっとしばらく固まっていて“あっ、賢い子なのね”と思った。

B担当 : ごはんの時、反り返っている。最近減ってはきているが、反り返っているのは相手してもらえていないからなのかなと分かりやすくなった。やりとりが分かりやすくなった。Bなりの成長があるのだろう。

Con. : 情動調整が出来たようになったように感じるの見通しがついていること。“ある。ないけど、ないけど、ある！”や“1, 2, 3で待って・・・4！”と予測、見通しが出来れば、“2, 3”と待っている時は泣かないでいられる。

7月 (13ヶ月)

日誌

【情緒】 【言語・表現】 高熱の時にはぐずっていたという記載もあるが、「機嫌が良かった」「にこっと笑う」など情緒が穏やかな記載が多い。はっきりとした発語はまだだが、名前を呼ばれると「はい」と返事をしたり、「うんうん」「あー」と返事をしたり、と“返事をする”という記載が多く、職員からの呼びかけ・働きかけにBなりの言葉で反応している。返事をする際に笑顔が多く、職員がBと関わることを楽しみにしているよう。

【運動・遊び】 「ころころと動いて」移動しており、移動距離も遠くなっている。後半、歩行器が導入され、移動できるようになる。自分で動くことができおり、足の力がついてきている。他児の名前がでてきており、玩具を通しての関わりや、移動距離が拡がり他児の近くに行っている様子が見られる。

【養育者の視点の変化】 「頑張る気になっていた」「不満げな表情」「遊んでと言っているようで」など記入者が本児の感情や意図を汲んでいる記載が多い。また、食事・睡眠に気遣っている記載は変わらず多い。

発達検査

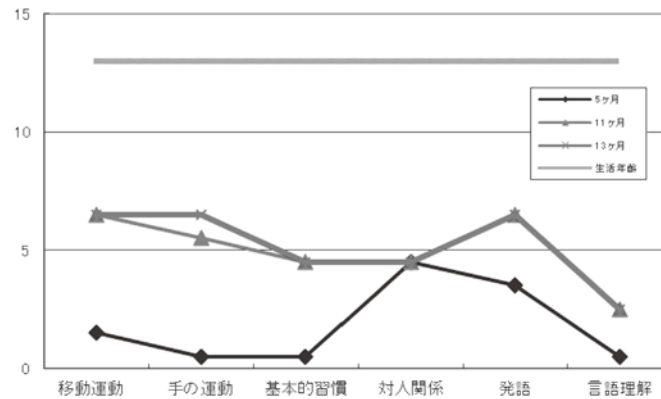
7月（13ヶ月時）の結果

【遠城寺式発達検査】

Bの検査結果（発達月齢）

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
5ヶ月	1.5(30)	0.5(10)	0.5(10)	4.5(90)	3.5(70)	0.5(10)
11ヶ月	6.5(59)	5.5(50)	4.5(41)	4.5(41)	6.5(59)	2.5(23)
13ヶ月	6.5(50)	6.5(50)	4.5(34.6)	4.5(34.6)	6.5(50)	2.5(19.2)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

全体的に変化はないが、「手の運動」が若干伸びている。

育ちの所見

発達検査からは伸びが見られないが、日誌からは移動運動能力、対人関係が伸びている様子が見える。職員との関わりにおいてはBも笑顔で返事をしてることが多いため、職員もやりとりについての記載が多く、「対人関係」「発語」「言語理解」はもう少し伸びそうに思える。

ビデオ記録・コンサルテーション記録

<行動観察および発達検査フィードバック>

Con.：今日下でBを抱っこさせてもらった。不機嫌そうな感じで見上げていたが、足元から触っていったら、受け入れてくれた。一ヶ月Bはどうですか？

B担当：あまり大きな変化はない？

Con.：そうですね。一ヶ月でものすごく伸びたかというところでもない。指数でいくと、少し下がり気味。それはBのハンディキャップがあるからでしょう。今後Bがどれくらい伸びていくか。午前中見た感じでは、体も心も伸びていく下地が整ってきていると感じた。この間観察させてもらった時は、職員に立位を取らせてもらったりしていたが、今日は一人で結構遊んでいた。Bは様子をうかがいながら寝返りを打ったり、寝ている姿勢だけど、相手の顔を見ながらコミュニケーションができていた。座位を支えながらいいので、上から物を操作できるおもちゃとかこれから持つと、もっと探索的に遊ぼうとする気持ちが深まる。というのも寝っ転がりながら、光るものをみていた。でもそれをやっているとうとう閉じてきてしまう。5、6ヶ月の子が指で遊んでいるのは座位が取れないから。自分の体が起きてくると、車遊びとかできる。全体性が見えるようになる。Bは1歳を超えているから、今一生懸命遊んでいるので、座位でやりとりしたり、起き上がりこぼしみたいな玩具など、少し大き目のもので、自分が座って遊べるものもいいかもしれない。椅子に座れるから、机の上に何かものが置いてある状況もよい。遊び方の工夫をすると次の段階へ行ける。ものすごく探索しているというのは、伸びさかりの子。体がぐにゃつとなっているのは残念だけれど、意識もぐにゃつとなっているわけではない。周りを見回して、コミュニケーションを取ろうとしていた。座位で遊びの練習が必要ですね。また、自分で音を鳴らした時に反応し、音を聞いている。そういう時は言葉が出てくる準備が整っている時。言葉はどう？

B担当：喃語はまだ。「あう」とか「うあ」とか。

Con. : さっき施設心理に伝えたが、イルカのコミュニケーションみたいに、発声と発声を合わせていく。「うあわ」<うあわ>というように。またBは寝返りがきれい。その大きなうごきに合わせて、さすってあげたりするといい。ほっておくと、そのまま停滞してしまうので。先程私は足からBとのコミュニケーションに入ってみた。動きに沿いながら、声も添えながら、Bも「あー」私も<あー>と声のコミュニケーションができる。単語の手前でつながることができている気がする。Bの自発的な発声に周りが反応するというとまだ難しいので、こちらからやっていく。口が上手に動いている。Bの中では色々芽生えているように思う。

<ビデオフィードバック>

<シーン>

机にB、対面に女兒が座り、間にB担当が座っての昼食。B担当は二人に食事をあげている。同じ机に他児と職員がいる。

【ビデオ】

B担当は片手でBの背中を支えながらもう一方の手でスプーンを口に持っていき、Bが「ああ」と声をだして欲しがることもあり、スプーンをBの口にもっていきとすぐに口をあける。B担当はBの背中を支えていた手をBの前においていると、BがB担当の手を触り、噛み始める。B担当が<B君イタイ>と手を震わせるもBは手を口にいれている。Bは手をいったんだし、B担当と目が合い首をくすぐられると笑うが、再びB担当の手を口にに入れる。B担当は前に座っている女兒にも食べさせながら<イテテテ>と言っている。スプーンをBの前に持っていきとBは口から手を外し、B担当の手を触りながら食べる。B担当の手を口にいたり、ごはんを食べたり、を繰り返す。その後、B担当の手が前に置かれたままだが口にいれず、B担当が前の女兒にごはんをあげているスプーンを見ている。続いてB担当が<あーあー>とスプーンをBの前に持っていきがBはすぐには口をあけず、<あーあー>と再び言うと前の女兒をみながら口をあけて食べ、手はB担当の腕を触っている。Bは前にいる女兒をみながら「うえー」と顔をしかめ、Bの食事が載ったトレイに手を伸ばす。B担当がスプーンを口に持っていきとBは食べ、「んわあー」とB担当の手を触りながらうつつむく。B担当が別のスプーンを目の前にだすとBは手に取り、B担当の手の上でスプーンを動かしながら食べる。B担当が前の女兒に食べさせている間、Bはスプーンを口に置いて噛んでいる。Bが左手に持っていたスプーンを落とす。B担当がBに顔を近づけて<おちちゃったよ〜>というBは「えへへ」と笑う。B担当がスプーンをひろい、<はい>とBの前にだすとスプーンを触りながら食べる。

【コンサルテーション】

Con. : Bは先生を見ている。ものすごく嫌そうにしているわけではなく、ずっと先生の手を握っている。噛んだあと先生の顔を見る？噛んでいるだけ？

B担当 : 反応を見られているという風には思っていなかった。

Con. : そう？でも見ている(笑)。反応を見るとか、首の動きが機敏ではないのでわかりづらいが、先生のこの手に手をのせてくる時がある。Bが一番目線が合わないように見えて、一番見ている。関係ができてるのがわかる。そつと手をそえて、先生とつながっている。好きみたい。

B担当 : いじるのが好きで、だからそのままにしたら触ってられるかなと思っていた。

Con. : せっかくBが大人の事をツールとして使ってくれているから、もう一人の子にあげている時もBのために少し手を動かしてあげると、Bが他者とのつながり感を持つと思う。それが、Bが人との関係を持っているという感覚が持てる。会話や先生の目と目があってにこっとするなどが重なってくると良い。<おー>とか<あー>とか、わかりやすく大人がやってみる。あとBはあまり迫られると刺激が処理できなくて顔をそむけるけど、Bは他の子の発達と比べるとつつましいけれど芽生えがある。

【ビデオ】

Bはスプーンを噛んでいたが、それを口からだして床に落とす。落とした後、B担当の顔を見て目が合う。B担当がBに顔を近づけて<おちた>と言う。Bは笑い、B担当がBの腕をつついて<おちたよ〜>と言う。B担当がスプーンを拾い、Bの前にだすとBは手に取り、口にに入れる。Bがスプーンをいじっていると再びスプーンが床に落ちる。Bは「あゝあ」と言い、B担当を見て再び「あゝあ」と言う<おちちゃったねえ>とB担当がスプーンを拾う。

【コンサルテーション】

Con. : Bは投げた直後にB担当をパッと見ている。予期遊び。反応を予測して先生をみる。「ほら、おちた」という感じで見ている。これは5,6カ月の子ではできない。自分の行動の反応を予測できるからやる。スプーン投げの子は結構多いが、コミュニケーション上の問題で予期できて「ほら落ちた」とやれるといい。Bはそれが出来ていて、いいと思う。

【ビデオ】

B担当は拾ったスプーンをBに渡すがBはすぐに落としてしまう。Bは目の前にあるB担当の手を触り、B担当がくなくいと手を広げるとB担当の親指を手に取り、Bの口にいれようとする。B担当がスプーンをBの口に持っていきとB担当の手を触りながら口をあけて食べる。手をつないだように二人で手を合わせ、B担当は落ちたスプーンを拾う。前の女兒がそのスプーンを触ろうとするとくここに持っているよと女兒に別のスプーンを渡す。片手はあわさったまま、B担当はもう一方の手でBの口にスプーンを持っていきと、Bが首を動かしたため顔にごはんがつく。B担当がく揺れてるからついちゃった〜>というBは首を反らせて笑う。

【コンサルテーション】

Con. : BがB担当の手を持っている時、く待っててね>と言いながら、くはい、どうぞ>と次の子へ行くとながらり感もてる。く待ってて。待ってて・・・はい>だとつながり感ももっと持てるようになる。いつから職員の指を食べるようになった？

B担当：あれば食べる。他の職員でも。他児でも。身体があれば食べちゃう。

Con. : 自分の指は？

B担当：舐めていた時期はちょっとあるが、今はない。

Con. : という事は、Bは気持ちは外に向かっているかもしれない。自分の指をなめる子は閉じていることが多い。Bにとってこれはコミュニケーションツールなのかな？のんびりしているようで、Bは外に向いている。3,4ヶ月児のツールを駆使して周囲を探索している感じ。ここでは、Bともう一人と関わらなくてはならなくなる。手間がかかるから、Bの方に時間が割かれる？(はい) Bがいたら、それこそ三者関係のものが扱えるのではないか。次あたりそれを意識してみましょう。三人の関係を他の子どものようにはまだ成立できないが。今回は手も使えて関係も取れている。目線を合わせてみるとよい。言葉が出てくる準備ができていよう。他にいかがです？

B担当：自分で転がって遊びを見つかるのを飽きてきていた。少し目線を変えて遊ぶ時間、大人と甘える時間が少しずつ出てきたかなと思う。

Con. : Bは世界に開かれている。先生の所に手を置きながら、世界を見ている。言葉が伸びるとよい。今はつぼみだからもうひと押し。

B担当：なかなか皆をみている中で見るのが大変。

Con. : 24時間見るのは無理だろう。一日一瞬なんでもいいから意識するとすれば、この三者関係ややりとりの部分。小さいことでも30日続ければ、ないよりいい。ちょっとずつやってみましょう。

8月 (14ヶ月)

日誌

【情緒】職員が名前を呼ぶと声と笑顔で応えてくれるという記載が多く、穏やかで機嫌のいい日が多い。“B担当のことを認識しているように感じる”という記載がでてきており、特定の他者との関係性の育ちがみられる。

【言語・表現】名前を呼ばれたり話しかけられると返事はできるが意味のある単語はまだ難しい。“「うお～ん」「あお～ん」と職員を呼び、抱っこされると満足そう”とあり、職員を声をだして呼ぶことはできている。

【運動・遊び】ただごろごろ移動しているのではなく、玩具や場所などを目指して移動していることが増え、本児の目的・意図が行動から読み取れるようになっていっている。すべり台や泥遊び、お風呂を喜んでおり、ダイナミックな遊びを好んでいる。飛び出す玩具を開けると閉めることができるようになっており、手の運動が少しずつ伸びてきている。

【養育者の視点の変化】“かわいい”という記載が増えている。

発達検査

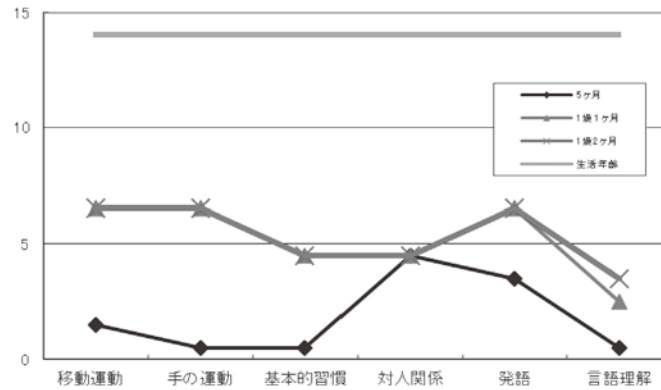
8月(14ヶ月時)の結果

【遠城寺式発達検査】

Bの検査結果(発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
5ヶ月	1.5(30)	0.5(10)	0.5(10)	4.5(90)	3.5(70)	0.5(10)
1歳1ヶ月	6.5(50)	6.5(50)	4.5(34.6)	4.5(34.6)	6.5(50)	2.5(19.2)
1歳2ヶ月	6.5(46)	6.5(46)	4.5(32)	4.5(32)	6.5(46)	3.5(25)

単位は月で、発達月齢を示した括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

先月と大きな変化はない。「言語理解」が若干あがっている。

育ちの所見

身体発達や言語発達で大きな変化はないが、職員との関係性において担当養育者を認識するようになったり、声をだして呼んだりやりとりが増えてきている。手を使った遊びができるようになってきており、発達検査での「手の運動」がこれから伸びることが期待できる。

ビデオ記録・コンサルテーション記録

<ビデオフィードバック>

<シーン>

O職員(担当ではない)と一対一で昼食。Bの隣にO職員が担当している女兒Mがおり、手を触りあったりしている。Mが周りをうろうろしながらの昼食が始まるが、すぐにMは離れる。途中で職員の少し離れた後ろからMの音がする。

【ビデオ】

O職員とBが一対一で食事していると、後ろからMの『あっ』という声が聞こえてくる。O職員が<あ>と合わせたがり、後ろを向いて返事をしながら、Bに食事をあげている。MがO職員の背中にくっついてくる。机にきてBの食事がのったトレイに手を伸ばし『あー』と欲しがっている。O職員は<Mちゃんは食べた>とトレイをずらす。BはMを見ている。<さっきMちゃん食べたね。これはBくんだね>とBに話しかける。Bは少し宙を見たようにぼーっとするが、咳をしてO職員の顔を見て「ああ〜」と声をだして笑う。机につかまり立ちをしていたMが尻もちをつき『ああ』と少しぐずりだすとO職員はMの頭をなでる。Mが机につかまり立ちを再びし、Bの後ろに行く。BはずっとMを見て、後ろに回ると首を回してみている。

【コンサルテーション】

Con: 他児が入ってきてしまってこんなにぐずり、危機的な状況にはなっているが、でもなんとか三人で収まっている。他の先生いかがですか？

FSW: ちゃんと三者関係になっていた。

F職員: よく見る場面ですね。Mにはよくありがちなシーン。

Con: 先生はいかがですか？

O職員: Mは私の担当で、いつものことなので特には。

施設心理: 欲しがっていたので、自分だったら慣れていないこともあって困るかも。そこをちゃんと収めないといけないのだが、Bにもごはんをあげなくてはいけないので、意識が分散するところを、三人で一緒になっていて良い、うまく三者関係になってる。

Con: 結局Mはおかずはもらえない。でもその間<待ってて><ダメ>とかはっきり言わずに、あの中で三人でいられる。なんとなく三人でうまくいっている。先生が揺らいでなくいるところが良い。もう一回見ましょう。

【ビデオ】

MがO職員の背中にくっついてくる。Bの方を向きながら<はい、Mちゃん〜>と声をかけ、Mが背中を顔でとんとんするのにあわせて<あばあばあば>と言う。<Mちゃんきたよ〜>と言いながらBの口にスプーンを持って行き、Bも口をあける。

【コンサルテーション】

Con: 背中にいながら、MとBの三人をつないでいる。この「あばあば」はMにチューニングしているが、Mだけじゃ

なくBにも発している。

【ビデオ】

Mが机にきてBの食事がのったトレーに手を伸ばし『あー』と欲しがっている。O職員はMに向かって<Mちゃんは食べた>と言いトレーをずらす。BはMを見ている。Bに向かって<さっきMちゃん食べたね。これはBくのだね>と話しかける。Bは少し宙を見たようにぼーっとするが、咳をしてO職員の顔を見て「ああ〜」と声をだして笑う。<大丈夫？あーん、あぶ>とスプーンをBの口に持って行くと食べる。机につかまり立ちをしていたMが尻もちをつき『ああ』と少しぐずりだすとO職員はスプーンを下してMの頭をなでる。Mが机につかまり立ちを再びし、Bの後ろに行く。BはずっとMを見て、後ろに回ると首を回してみる。Bが向き直ると<Mちゃん行っちゃったね>とO職員がBに話しかける。Bは身体を反らせて後ろのMを見る。<(Mは)いた？Bくん>とBに声をかける。Bがもとに戻ると<いた？>と声をかけられるが再び身体を反らせて後ろのMを見てすぐに身体を戻す。O職員はMの『あー』に合わせて<はい>と返事をし、Bに<Mちゃんいたね>と声をかける。Bは再び身体を反らせて後を見ると同時に手で机をたたき。すぐに戻り、O職員は<見えた？>と声をかけながらスプーンを口に持って行くとBも食べる。後ろに身体を反り、そのまま首を振っている。Bがもとに戻るとO職員が<いたー。お帰り>とBの口にスプーンを持って行く。Bは手で机をたたき、そのリズムでスプーンをつかみ、B担当の手も一緒に上下させて机をとんとんした後、スプーンを自分の手で口に持って行く。O職員は<すごい>とごはんをすくってBの口に持って行くとBはスプーンをつかんで自分の口に持って行く。

【コンサルテーション】

Con.：この<あーん>という声を先生がどういう風に吸収しているか。言葉に意味があるようで、解説はしているが<食べたでしょ！>でなく、<もう食べたでしょ〜。(だけど欲しくなっちゃったんだよね〜)>っていうトーンが、Mは自分が受け入れられたと感じ、「あーん(泣きまね)」とくずっているが、関係が壊れない程度に言えている。真ん中に入ってくるがその場を壊してはいない。先生が三人つないであげており、Bとひとまず関係をし、そこでMに伝えてあげると、拒否されず三人でいられる。子どもが出てくるちょうどいい応答がいい。ほとんど意識しないでやっている。周りから見ればもごもごやってるって見えるかもしれないけど、そういうところに心が育つ。どうってない中で、ひとまず周りをみられるような子になる。キレないで待ちながら収まっていく子どもを育てるのが大事。Bに戻ると、Bはボンボン手を叩いている。これはどう思った？

O職員：こうするのが楽しい年頃なんだろうと思っていた。

FSW：手を繋ぎたい？

F職員：私が食事介助の際は手が出ていないことが多く、私のときはあんなにバンバンしていないなあと思った。だからビデオを見て、すごく能動的だと感じた。

Con.：Bは能動的で育った感じ。1ヵ月前は体位は保てず、先生の腕を舐めていた。つながりたい気持ちがあったが、Bは体位が保てていなかった。

施設心理：前は不安定だった。前に比べてきちんと表しているという感じがする。

Con.：スプーンをこう叩くのはなぜそうやりたいのか？という事を考える。そういう行為の裏で何を先生が思うのか。先生がおっしゃったように、手が繋がりたいという気持ちの表れかなど。そうすると、関わりが変わってくる。先生との間で繰り返しやっているということは、つながりたい、あるいはそれによってつながっている気がするということ。先生はバンバンやらないけど、うなずいたりして応えている。それが一人で食べているより繋がりを感じられて楽しい。食事が社会化する。

【ビデオ】

Bは隣にいるMの手を触ったり服をひっぱったり(手がひっかかって手を動かすとひっぱっているように見える)している。Mは『あ〜』と不快そうな声をだすが、BはじーっとMの顔を見ながら手を触っている。

【コンサルテーション】

Con.：Mは嫌なんだけど、Bはそれをじっと見る。Bは色々なことを見たい、他者と繋がりたいという気持ちがある。Bは触ったあと必ず相手の目を見ており、コンタクトを取ろうとしている。Bは情緒発達面が進んでいる。先生の食事にはたくさん同じようなことがある。先生が無意識にやっていることだと思うけれど、また効率化とか色々あると思うけれど、先生の持ち味だから、そこを残してほしい。そこを大事にするように、主任たちに考えてもらったりするといい。先生楽しいでしょう？

O職員：人数が少ないと。

Con.：先生は背中も使って情動調律ができる。こうやってみると先生が関わってくれると思うから、子どもたちが集まってきて、それが発達機会になっている。先生は、こっちから関わってきて、その関わりで確認できる感じがあり、それは整然とは見えないが、とてもいい事だと思う。こういうのがいい事なのかどうかをまた先生たちと話し合っ

もらえればと思う。

施設心理：4月から入って、かなり応答性がよく、丁寧にされている。なぜこうやれているのかと考えた時、一つに、新任だからだとも思う。仕事に慣れてくるとそういう所が抜けてくるだろう。だから新鮮な、新しく入ってきた人が大事だねと院の中でも言われてきている。子ども一人ひとりにじっくり付き合っているから、その子を見ている際に別のところで泣いている子がいる部分もあると思うが、この応答性の良さは大事だと思う。

Con.：長く入っていると、子どもを職員に合わせてしまう人もいるでしょう。新しく入ると、こちらから子どもに乗る。ほのほのしていて良いビデオだった。

9月 (15ヶ月)

日誌

【情緒・表現】穏やかな情緒の日が多い。食事の好き嫌いがわかりやすくなっており、“イヤ”の表現もはっきりしてきた。声をだして抱っこをしてもらおうと落ち着いたり、もっと遊びたい時に職員の手をつないだり、職員の膝枕で休憩したり、と職員の中で安心してている姿が多い。

【言語・表現】言葉は相変わらずでてこないが、名前を呼ばれると返事をしたり、声でする所まで移動してきたりなど、職員からの声かけは理解できている。

【運動・遊び】転がった移動は室内であれば自由に移動でき、興味のある玩具を見つけると自ら動いている。前半はつかまり立ちに支えが必要だったが、後半は一人ですっかり立ちができるようになり、足腰が強くなっている。階段はまだ登れず。タオルで“いないいないばー”をしており、見える・見えないの遊びらしい遊びが展開。

【養育者の視点の変化】“食事が食べられた・食べれなかった”という記載よりも、他者（特に職員）との関係や運動発達についての記載が多くなっている。

発達検査

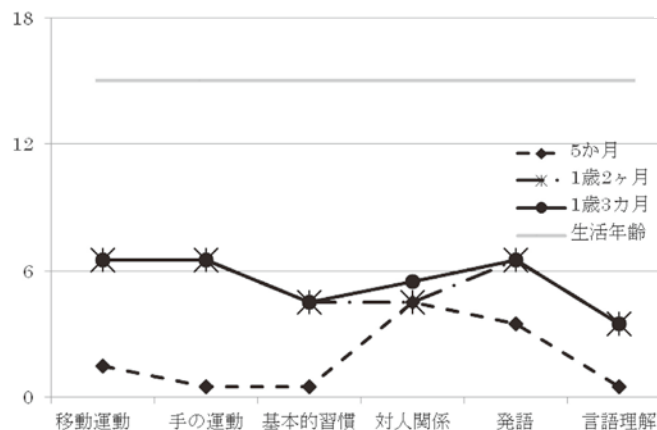
9月 (15ヶ月時) の結果

【遠城寺式発達検査】

Bの検査結果 (発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
5ヶ月	1.5(30)	0.5(10)	0.5(10)	4.5(90)	3.5(70)	0.5(10)
1歳2ヶ月	6.5(46)	6.5(46)	4.5(32)	4.5(32)	6.5(46)	3.5(25)
1歳3ヶ月	6.5(43.3)	6.5(43.4)	4.5(30)	5.5(36.7)	6.5(43.3)	3.5(23.3)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

先月から変化は少ないが、「対人関係」が若干上がった。

育ちの所見

日誌では職員との関わりについての記載が増えており、発達検査の「対人関係」が上がっていることとつながっている。職員の言葉かけを少しずつ理解できてきていることから、「言語理解」がこれから伸びそうなどか。

10月 (16ヶ月)

日誌

【情緒】機嫌よく過ごしていることが多いのだが、“大泣き”している記録が3日あったり、先月からでてきていた食事の好き嫌いに言及する記録が多かったり、情緒の起伏が大きく、好みははっきりとしてきた。移動する力が育ったことで、部屋や玩具への探索行動が盛んで、自ら色々な所にでかけたり、目新しいところに行くときょろきょろしたり、周囲の刺激がとても魅力的な様子。探索にでて一人になると「声をあげて助けを求める」ことや、「つまらなくなると大きな声で呼ぶ」、「抱っこを求める」など、探索と愛着の輪が循環している。

【言語・表現】言葉は依然「あー」「うー」の発声だが、「他児の髪ひっぱった際、Bくん!と名前を呼ぶと止める」と職員の注意を理解したり、食事後の「ごちそうさま」に手を合わせ、食事に関係のない時にはやらなかったりと、相手の声のトーンや状況も加味して判断し、自分の行動を調整できるようになっている。「おしゃべりの種類が増えてきた」とあり、発語がこれから伸びていくか。

【運動・遊び】つかまり立ちをしている記録が多い。足の曲げ伸ばしもできており、足の力が伸びている。自分でかごを使って“いないいないばー”をしており、見える・見えないの遊びを好んでいる。

【養育者の視点の変化】つかまり立ち、食事の好き嫌い、「ごちそうさま」の手合わせなど、新しいことができるようになると、それらに関する記録が増え、Bの成長を職員が注目・共有している。

発達検査

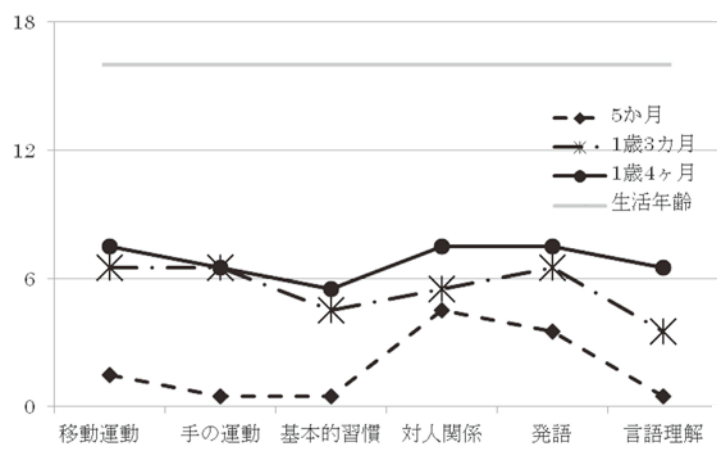
10月(16ヶ月時)の結果

【遠城寺式発達検査】

Bの検査結果(発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
5ヶ月	1.5(30)	0.5(10)	0.5(10)	4.5(90)	3.5(70)	0.5(10)
1歳3ヶ月	6.5(43.3)	6.5(43.4)	4.5(30)	5.5(36.7)	6.5(43.3)	3.5(23.3)
1歳4ヶ月	7.5(46.9)	6.5(40.6)	5.5(34.4)	7.5(46.9)	7.5(46.9)	6.5(40.6)

単位は月で、発達月齢を示した括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

「手の運動」以外は全般的に発達が伸びる。「言語理解」が大きく伸びたことから、発達の凸凹も小さくなっている。「対人関係」「発語」「言語理解」が伸びており、他者とやりとりする力が育っていることが伺える。

育ちの所見

日誌、発達検査ともにコミュニケーション能力があがっていることが見える。つかまり立ちから膝の曲げ伸ばしができるようになり、運動能力が伸びている時期。場所・玩具など周囲の刺激に魅せられており好奇心がでてきている。あわせて他者を求めることもできているので、「対人関係」や「言語理解」が伸びたのだろう。それに伴い「発語」が伸びることを期待したい。

11月 (17ヶ月)

日誌

【情緒】 “甘え” についての記録が多く、接している職員がBの声や行動からBに “求められている” “頼られている” と感じている記録が多い。また、「人見知りをしてB担当を見て泣いていた」とあり、人見知りや場所見知りはこれまででもしていたが、その際に安全基地となっているB担当を意識していることも合わせて記録されている。

【言語・表現】 発話は少ないが、「目線があう」記載が増えたり、「声をかけると「あーい」と返事をした」り、「にこーとよい表情をしてくれた」り、やりとり自体は先月同様増えている。

【運動・遊び】 「ミニカーを手に持ち走らせていた」と玩具を使った具体的な遊びが記載され、手指の力がついてきている。先月同様、つかまり立ちをよくやっており、いい表情もあわせて記録されていることから、身体の運動に高揚感がともなっている。

【養育者の視点の変化】 職員とのやりとりをしている記載が多い。Bからのメッセージがより読みやすくなっているからだろう。

発達検査

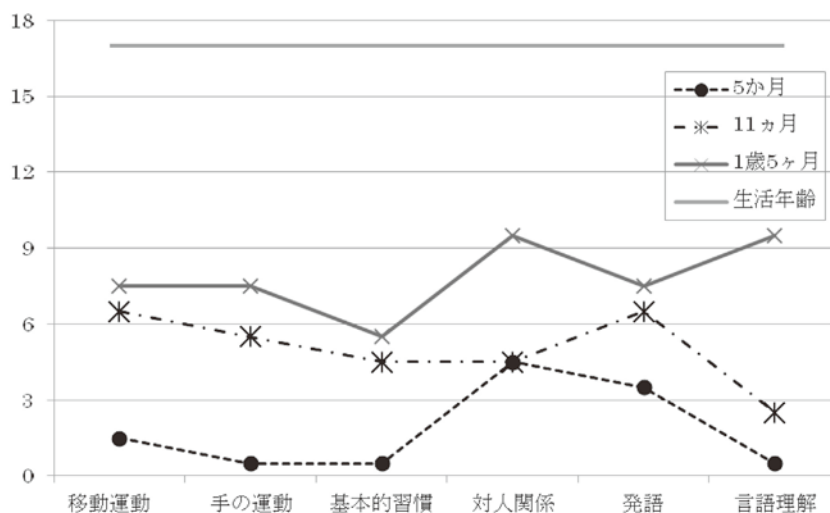
11月 (17ヶ月時) の結果

【遠城寺式発達検査】

Bの検査結果 (発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
5ヶ月	1.5(30)	0.5(10)	0.5(10)	4.5(90)	3.5(70)	0.5(10)
1歳3ヶ月	6.5(43.3)	6.5(43.4)	4.5(30)	5.5(36.7)	6.5(43.3)	3.5(23.3)
1歳4ヶ月	7.5(46.9)	6.5(40.6)	5.5(34.4)	7.5(46.9)	7.5(46.9)	6.5(40.6)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

全領域において月齢でみると伸びている。特に「対人関係」「言語理解」が伸びており、コミュニケーションの力が育っている。「基本的習慣」の落ち込みがあり、全体の発達バランスが変わってきた。

育ちの所見

日誌からも発達検査からもコミュニケーション能力は伸びている様子がうかがえる。発語はないが、目線や表情、声のトーンや強弱などで表現がはっきりとしてきたことで、関わる職員もBとのやりとりを楽しんでいる。運動領域や基本的習慣の伸びが小さく、身体運動系の発達の課題が影響しているのだろう。運動に高揚感が伴っており、そこから発語につなげていくことができないか。

12月 (18ヶ月)
 日誌

【情緒】 “No”の主張を首を横に振ってはっきり示すようになる。「なんでもイヤイヤだがおやつにはイヤイヤしなかった」「外から中に入る時にイヤイヤと首を振った」など、状況に合わせてNoを表現できるようになってきている。また、「抱っこして欲しく抱っこしても降りたそうにし、下ろすと泣いてしまう」とアンビバレンスが見え始めている。

【言語・表現】 言葉はまだ「あー」「うー」の発声のみ。〈おやつ食べる?〉に首を横に振らなかったり、〈部屋に入る?〉に首を横に振ったりと、職員が話す内容は理解し返事はできている。

【運動・遊び】 一人でごろごろと動いて遊んでいる時もあるが、「職員と一緒に乗り物に乗ったりボール遊びをしたりしたい様子」や、「他児が遊んでいるのに仲間に加わりたように声をあげていた」など、“他者と一緒に”遊びたい様子が増えている。

【養育者の視点の変化】 Noの主張ができてきていることより、職員がBに問いかけ、それにBが答えているやりとりの記述が多い。

* 中旬に8日間入院

発達検査

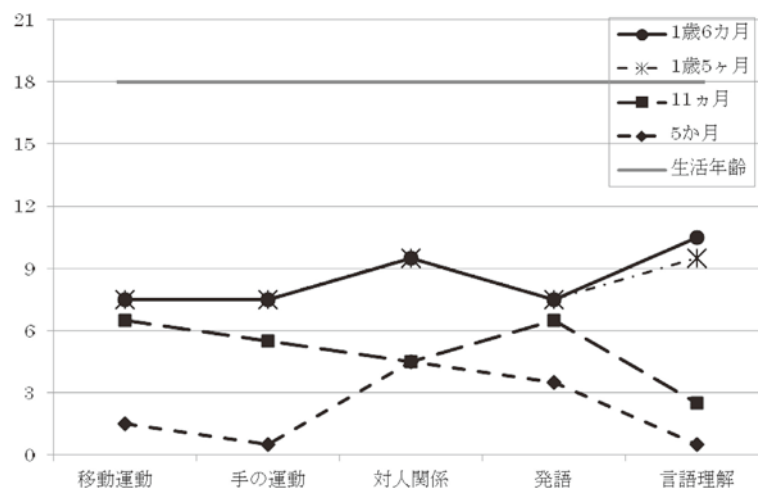
11月 (17ヶ月時) の結果

【遠城寺式発達検査】

Bの検査結果 (発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
5ヶ月	1.5(30)	0.5(10)	0.5(10)	4.5(90)	3.5(70)	0.5(10)
11ヶ月	6.5(59)	5.5(50)	4.5(41)	4.5(41)	6.5(59)	2.5(23)
1歳5ヶ月	7.5(44.1)	7.5(44.1)	5.5(32.4)	9.5(55.9)	7.5(44.1)	9.5(55.9)
1歳6ヶ月	7.5(41.6)	7.5(41.7)	7.5(41.8)	9.5(53)	7.5(41.8)	10.5(58)

単位は月で、発達月齢を示した括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

先月と大きく変わらず、「言語理解」だけ若干上昇している。

育ちの所見

日誌での“職員の言葉での問いかけ一本児の反応”についての記録が多く、また発達検査でも「言語理解」が伸びており、大人の意図を理解できるようになっている。日誌からも職員も“通じている”感が強くなっている。

ビデオ記録・コンサルテーション記録

<ビデオフィードバック>

<シーン>

机に子ども4人、職員2人の計6人での昼食。Bの90度横にB担当、対面に他児、隣に他職員がいる。全体で約30分かか

る。午前中を一緒に過ごし、B担当の休憩後の昼食。午前中はあまり機嫌は良くなかった。昼食後半眠くなって進まなくなったので終わりにして、午睡。午前中起きていられるようになったので昼食後に眠くなることが多い。

【ビデオ】

Bは椅子に座って前を見ている。B担当が<鼻ふくよ>と言うとBはいいやと首をふる。B担当が鼻をふくとBは手で払いのけようとする。B担当がBにエプロンをつけ、腕をまくってあげ、<お手手ふこうね>と言って立つとBはその方向を見る。B担当が<くださいま>と戻ってくると、Bは顔を横にふる。Bの手を拭きながらB担当が他児と話をし、<～ちゃんもヤダブだって>とBに話しかける。<ヤダヤダだもんね、最近ね>と言うとBは机をダンダンと手で叩く。B担当は同じ机にいた職員とおやつやBの最近のやだやだの話をしながら食事の準備をしている。

B担当が<B君のごはん、いただきます>とBの口にスプーンを持っていくと、Bは食べる。Bは食べながら周りを見ている。B担当は口にスプーンを持って行くがBは口をあけず、B担当はそのまま待ち、少しして食べさせる。B担当がパンをだし、小さくちぎりBの口に持って行き、残りをBの手にとんとんと触れさせて<はい>と手渡すと、Bはパンをつかみ口に持っていき、「うい～」と言う。B担当が<B君>と呼ぶ。Bがパンを自分で食べると、B担当は<じょうずー！>と頭をなでる。

Bは手をパンパンと振り、パンを手放す。パンを食べようとするが、入らない。他職員が『Nくんかっこいい～』というのを受け、<Nくんかっこいいって>とBに話しかけ、パンを持っているBの手首を持って口にもっていくとパンがBの口に入る。B担当がそばにいたAに向かって<B君のー>と言い、Bと二人でAを見る。Bは口をもぐもぐさせたまま首を後ろに反り、後を見ている。B担当がAの食事介助をしながら<Aのスプーンあったかい>とBに言う。Bが「えへえ」というとB担当も<えへえ。おいしい？>と返す。B担当がスプーンでごはんをBの口に持っていくと食べる。違うごはんをだすといいやと首を振りながらも食べる。

【コンサルテーション】

Con.：何でもないことだけど、先生と、隣の先生がつながっている。大人同士が話しているのは食事場面の雰囲気作りという面ではとても大事。Bとつながりながらもこっちの子どもともつながっている。先生の背中を見てごはんを食べるのではなく、Bも見て他の子も見て、というのができている食事場面。このパンは、ちょうどBの発達段階で食べる段階のもの？

B担当：ごはんに出してもらっているのはどろどろだけど、食事に興味が持てなくなってくるような気がして、手元にだしてもらった。

Con.：とても大事、手の運動にもいい。

B担当：左手だとできる。

Con.：先生これがとてもいい。(パンを持っているBの“手首”を持って口に持って行くシーン) 手首を持っている、どうして手首を？

B担当：何気なく。

Con.：手首を支えることでBが自分で食べることができている。こぼれることだけが気になるのであれば、Bの手の甲を持つ。Bはちゃんと食べている感じがしているからまた欲がでてきて、また口に入れていく。Bは手の甲をもたれると、先生の手が口に入っている感じがする。手首を持つことを無意識でやっているということは、とてもすごいこと。Bは自分が支えられたと思わないで、自分のペースでいい気持ちでできている。表情が一番豊か。自分で手を伸ばして、自分で食べる。先生のこっちの手はAに貸してあげている。これとってもいいシーン。全然発達段階が違うのに、結局は3人である。手のかかる子のほうに先生が近くにすることは、子どもの目からみたら不公平ではない。

【ビデオ】

BはB担当が持っているお皿に手をやり引っ張るが、B担当がお皿を戻す。B担当は片手でAと手をパンパン合わせながら、片手でBに食べさせている。<すごい音したね>とAに言いながらBにスプーンを持って行くと言ったBが「うえ～」と笑い、B担当も<うえ～>と合わせた後スプーンをBの口に持って行く。B担当とAがおしゃべりしている間、Bは身体を揺らす。<Bくんここにある>とパンを指差すとBは手を伸ばしパンをつかむ。Bはパンをつかんでいるが、手を開くことが難しくなかな口にいれることができない。B担当がBの手を支えてようやく口に入り、<ガブ>とB担当が言うとBはにっこり笑顔になる。B担当は<やったあ！上手ー>と言ってBの頭をなでる。B担当の片手はAの手と合わせ、片手でBのほほをさする。B担当はBにパンを食べさせ、席を立つ。そばのベビーベットにいる乳児をトントンとして戻ってくる。Bはその様子を見ている。

B担当が戻り、Bはスプーンで食べさせてもらっている。Bは皿に手を入れ、引き寄せようとする。Aがビデオを見てにこにこし、スプーンを投げると、スプーンがBの方へとんでいく。Bはパンの包み紙をいじり、特にスプーンが飛んできたことに反応はない。B担当が<危な～い、Sさん(ビデオ撮影者)って呼んだら？>と言うとAはB担当の手を

ばしばし叩き、二人でやりとりしている。Bが「うい。うい」というと、B担当は包み紙をBに渡す。Bが包み紙を口に含むと、<ごめん、それ食べれるものじゃない>と紙をだそうとする。AがB担当の手をスプーンを持ったままぱちぱち叩き(スプーンが飛んでいきそう)<やめてちょうだい>とAに言っているのをBは見ている。B担当はAのスプーンをとり、Aに<ね>と言いながらBの前にパンを置く。Bは目の前に置いてあるパンを手を持ったたり、口に持っていくがなかなか口に入らない。Bの手が口に近づく時にB担当が手を添えてようやく手にあったパンがBの口に入り、B担当はBの頭をなでなです。AがB担当の手を叩き、<なあに>と返事をし、Aの手をにぎるとAも食べ始める。B担当が片手でBのパンを前にもってきたり、手を添えたりしているとBが自分でパンを口に入れることができる。<じょうず〜>とBの頭をなでるとBは微笑む。B担当がBの手を持ちくやった〜>と手を振る。B担当は片手でAの手をさすりながら<ぱくぱく>とAの口に合わせて言い、片手でBの背中をさすったりとんとん叩いたりしている。Bは他児を見ながら机を叩いている。Bが前を向き、B担当がスプーンをBの口に持って行くと食べる。B担当はAを見たり、Bの腕をさするとBがB担当の手の上に自分の手をのせる。他の職員がB担当に話しかけ、他児の食事を渡している姿をBもAも見ている。B担当が向き直り、Aがエプロンを外すのを手伝いながらBに<のみこめた?>と話しかける。B担当が<いやーん><ヤダヤダヤダ>と言いながらAの顔をふくとAは声をだして笑う。Bは口をもぐもぐしながらその様子を見ている。

【コンサルテーション】

Con. : 三者関係をBが持てていることを表す場面。先生がつかないでいて、関係が出来ていて、BがAを見て笑うということができている。それぞれの発達段階なりに、記憶の中に三人でいたと感じられる。テーブルをもっとダイナミックにするには、先生と先生の会話も大事。結構にぎやかにやっている時に、<全く仕方ないんだから><どうしたの?>など先生同士のパイプができて、全部の食卓をつないでいくということが出来る。Bを抱えてもそういうことができるという可能性をすごく感じる食卓だった。Bの食事を成立させることだけだと一対一だったが、実は三者関係まで育っている。発達指数からみると介助、介助というシーンが中心になりがちで、そういうシーンを見て誰も問題だと思わないだろう。しかし、このシーンは色んな子どもを勇気付けると思う。豊かな食事にできるのだろうか。誰にでも噛んでいたが、Bはこのところどうですか?

B担当: 落ち着いてきました。

Con. : おいしくって一緒に食べられて、よしよししてもらえて、BはQOLが高くなっている。

【ビデオ】

B担当とBの二人になる。B担当がBの顔を覗き込み、口に入っているか見る。Bが口を動かすのにあわせて<もぐもぐ>と声をかけ、スプーンでBの口へ持って行くがBは食べない。再び口へ持って行くがBは食べず、「へへ」と笑う。Bが両手でバンバン机をたたくとB担当は<トントン>と声をかける。<ファイト、頑張れ>と言ってB担当の手をBの手の上に乗せる。BはB担当の手を持って動かす。Bの顔が正面に向いた時にB担当がスプーンを口にもっていきと食べる。Aがそばでこけ、<大丈夫? A君。マンガのような転び方>と言い、BもAを見ている。B担当がスプーンをBの口へ持って行くが食べずにAを見たり、B担当を見たりしている。B担当もAの方を見ており、<A君、A担当お二階にいるよ〜>とAに声をかけるとAは『ばいばい』とその場を離れる。BもB担当も一緒にAの行った先を見ている。<行っちゃったね><どこ行ったんだろうね>とBに話しかける。B担当が食事を口に持っていきとBも食べる。<おいしい?>と声をかけるといやいやと首をふる。B担当がBの口へスプーンを持って行くと、Bは「うーん」と笑い手をあげるとその手がB担当の手にあたる(目の前にきているスプーンを払いのける感じ)。B担当は<Bくんの不意打ちだ>と笑う。Bが目をごすり、B担当がBの手や目をふく。拭き終わるとBは「えええ」と笑い手と体を動かす。Bが食べくま、うま、うま>と声をかけるとBは<っこおー>と笑い、二人で笑い合う。

【コンサルテーション】

Con. : 手と手がとんとんって合うとき、本当に2人であるのが幸せそう。目線があいにくい子どもだけど、そこを表情で表してくれている。2人のほうに寄せながら、先生が見ているほうを見ている。ほんとに関係がよく出来ている。手がかかり、食事の自立という、とどまっている。しかし、発達が遅れていることは別に毎日の世界が豊かであるということが大切。楽しい食事を自分でできるかという食事の能力を先生がこうやって作り出していて質が高い。楽しそうに長い時間食事ができている。先生が食事をするにだけに急いでやっていたらできないこと。先生はどうですか?

B担当: こうやって見ていると、Bに手も目も行きがちと思っていたが、ビデオで見るとやっぱりそうかなと思った。

Con. : 先生が言語化するといい。そうするとAからも見るようになる。<A君、見てるのね、分かっているのね>と言うと、Aは分かる。BもAもお互いが分かり、育っていく。先生の中で二分の一にするという考え方よりも、Bにかわりながら、三人で食事する、そうすると一体感が生まれて行くと思う。今も充分一体感がある。

FSW：関心する。Aも楽しそう。

園長：初めてのビデオフィードバックに参加していた時、言われていることを職員が分かっているのかなと思っていた。最初はということなの？という感じがあったと思う。でもテーブルで一緒に食事をするのを皆なんとなく分かってきているのかなと思った。本当につなげられるといい。

Con：毎日3回繰り返されることなので、それが分かっているか分かってないかで、1年で随分違ってくる。なんでBの手首を持つんだろうと思った。手首を持つと、Bは自分で動かせる。あるとき、先生が<いやなの>と言ってやめなことが大切。実際脳にもいい。Bがつかめている、この手がほんとうに大切。

まとめ

期間を通してBとのやりとりに注目した日誌が多いが、6-7月はあわせて食事を食べた・食べないという体重増加や、運動発達ができなかったに注目した記載が多かった。8月ごろより、“かわいい”の記載が増え、職員Bの行動や表情から賦活された気持ちが記載されるようになる。9月に入ると職員との関わりについての記載が日誌に増え、発達検査の「対人関係」もあがる。10月に入り、はいはいに加えてつかまり立ちから膝の曲げ伸ばしができるようになり、運動能力も伸びる。それに伴い自分で移動できる範囲も広がっており、場所・玩具など周囲の刺激に魅せられており好奇心がでてきている。あわせて他者を求めることもできており、発達検査の「対人関係」や「言語理解」が伸びる。11月に入ると発語は依然ないが、目線や表情、声のトーンや強弱などで表現がはっきりとしてきたそれによって、関わる職員もBとのやりとりを楽しんでいる姿が多く記載されている。さらに運動に高揚感が伴っており、情緒の幅も広がってくる。12月に入ると日誌には“職員の言葉での問いかけ-Bの反応”に関する記載が多く、また発達検査でも「言語理解」が伸びており、職員の意図を理解できるようになっている。

期間を通して「発語」自体はあまり伸びず発声のままであったが、やりとり自体に注目した記載は一貫してあり、コンサルテーションでも“関係性”に絶えず注目していた。やりとりの内容を見ると秋までは“職員が声をかけ、それに表情や「あー」「うー」で反応する”やりとりが多かったが、秋以降、“意図のやりとり”が増え、関係性の内容が変化し、12月には、職員の“通じている”感が強くなっており、“関係性”が明らかに変化している様子が見てとれた。

(南山今日子・青木紀久代)

3. コンサルテーション3 (C事例)

事例概要
事例C 男子 入所時2ヶ月 *早産・低出生体重児 修正月齢-1ヶ月

○子どもの育ち

6月 (11ヶ月-12ヶ月)
日誌

【情緒】抱っこをすると身体をゆだねるという記載があり、職員への信頼感は育っている。よく笑っているという記載が多く、情緒的には安定している様子だが、“ぼーっとしている”や“寝ている”という記載も多く、全体的に活動レベルは低い。

【言語・表現】言葉での表現が少なく、ちょうだいを手を振って示したり、褒められるとぱちぱち叩いたり手振り身振りで要求を表現することが多い。6月終わりに名前とくはーい>の呼びかけとに対して手を挙げると記載があるが、言葉がでている旨の記載はない。

【運動・遊び】つかまり立ちができるようになっており、歩行車を使って歩いたり身体を使っている記載が多い。午後の散歩中に寝てしまうことが多いようで長時間の遊びはまだ難しいよう。後半にずりばいで移動中に追いかけると声をだして喜んだという記載があり、職員との遊びの中で情緒が大きく動き、その際には声も出ていた。

発達検査

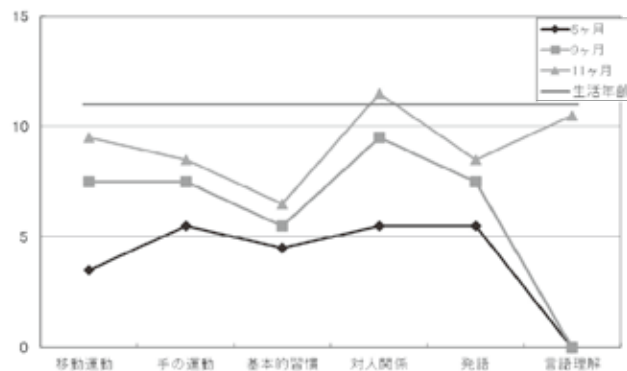
6月 (11-12ヶ月時) の結果

【遠城寺式発達検査】

Cの検査結果 (発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
6ヶ月	3.5(58)	5.5(92)	4.5(75)	5.5(92)	5.5(92)	0(0)
9ヶ月	7.5(83)	7.5(83)	5.5(61)	9.5(106)	7.5(83)	0(0)
11ヶ月	9.5(86)	8.5(77)	6.5(59)	11.5(105)	8.5(77)	10.5(96)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

6ヶ月、9ヶ月時には全下位項目で平均より下回り、全体的に発達がゆっくりである。しかし、6ヶ月より徐々に発達が伸びていき、「対人関係」「言語理解」が平均前後にまで追いつく。しかし、「移動運動」「手の運動」「基本的習慣」「発語」は下回り、発達に若干アンバランスが伺える。

育ちの所見

日誌より活動レベルの低さが見られるが、発達検査で全体的に平均より下回っている結果からも伺える。“泣き”の記載よりも“笑っている”記載が多く、また、発達検査では「対人関係」は全国平均より少し上回っている結果から、コンタクトをとるのは問題ないが、そこに言葉が伴っていないことが課題であろう。

7月 (13ヶ月)

日誌

【情緒】泣く・笑う・怒るという感情表現の記載が増え、情緒の幅がぐっと広がる。機嫌が悪くても歌でご機嫌になる日もあったり、音楽に合わせて身体を揺らして楽しんでいたりとポジティブな情緒が賦活されている。一方、入浴中や水遊び中に泣いていることが多く、水が怖いよう。健診では激しく泣く、遊んでいる最中職員が離れると泣くなど、人見知りやピークの時期か。遊びに飽きると職員を呼ぶ行為もあることから、全体的に職員を安全基地としている様子がうかがえる。

【言語・表現】情緒の幅は広がっているが、前半は喃語を始め言葉の記録がほとんどない。しかし、7/25に指差し、7/26に「あった」「はっば」「あ～い」という発語がみられる。言葉がでてきそうな時期と考えられる。

【運動・遊び】砂場で遊んでいるという記録が増え、遊びの世界が広がっている。「ばあ」を何度かしており、見える・見えないの遊びを好んでいる。人見知りもでており、対象恒常性が育っているサインがみられる。

【養育者の視点の変化】感情表現に焦点を当てた記録が増える。

発達検査

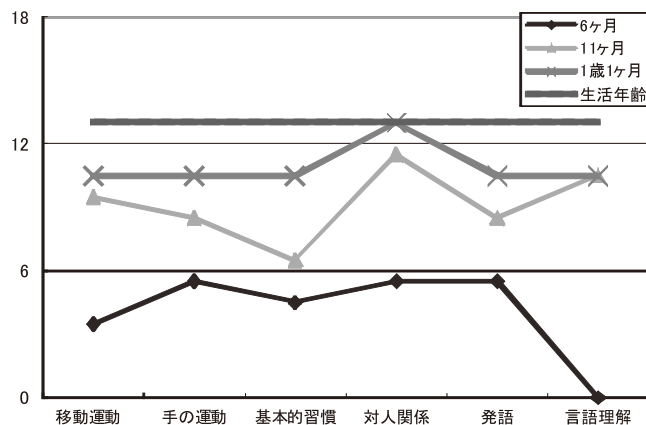
7月 (13ヶ月時) の結果

【遠城寺式発達検査】

Cの検査結果 (発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
6ヶ月	3.5(58)	5.5(92)	4.5(75)	5.5(92)	5.5(92)	0(0)
11ヶ月	9.5(86)	8.5(77)	6.5(59)	11.5(105)	8.5(77)	10.5(96)
1歳1ヶ月	10.5(80.8)	10.5(80.8)	10.5(80.8)	13(100)	10.5(80.8)	10.5(80.8)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

11ヶ月時より「言語理解」を除く全下位項目で上回り、「対人関係」が生活年齢に追い付いた。身体動作や言葉でのコミュニケーションに課題はあるが、表情などを通じたコンタクトについては養育者は年齢相応に感じていることが伺える。

先月からの変化として、発語9ヶ月級「さかんにおしゃべり」10ヶ月級「音声を真似ようとする」が通過。この一ヶ月で言語面での伸びが担当養育者でも感じられるという。

育ちの所見

先月のぼーっとしている様子から、喜怒哀楽の記載が増え、活動的になってきた。自ら遊びに行っている姿も見られることから、主体的に遊び、そして感情が賦活され、そこに言葉ものっかってきた時期と思われる。

ビデオ記録・コンサルテーション記録

<ビデオフィードバック>

<シーン>

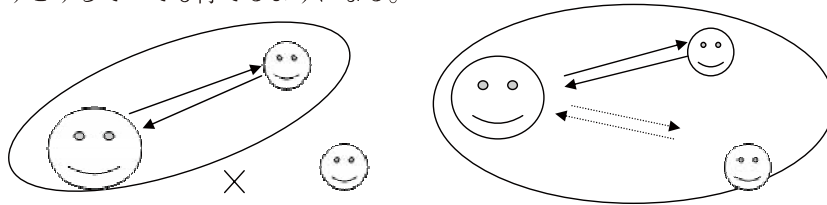
C担当と一対一で昼食をとっている。部屋は違うが少し離れたところに子どもが2人クッションで遊んでおり、声は聞こえている。途中より他児が椅子を持ってきてC担当の隣に座る。

【ビデオ】

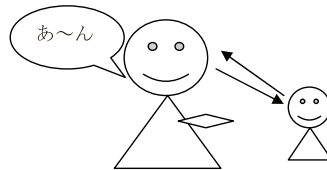
C担当がCにスプーンで食べさせている。C担当の隣に他児が椅子を持ってくる。ごはんをすくっていたC担当がスプーンをCの前のお皿に残し、他児の椅子をセッティングする。その間Cがスプーンを手に取り、いじっている。C担当は別のスプーンでおかずをすくっていると、Cがスプーンでお皿を叩いて音を出す。C担当がスプーンをCの口にもっていきと食べる。C担当がCの手をとってスプーンでごはんをすくおうとするが力がいっているためかすくえず。2回目のチャレンジでCが持っていたスプーンで食べることができる。C担当が隣に座っている他児に話しかけるとCはスプーンでお皿をたたく。C担当が他児にごはんを見せたりしながらCにごはんを食べさせる。Cはスプーンが口の近くにくると手をとめて口をあけるが、口にごはんが入るとスプーンでお皿をたたいたり、周囲を通りかかった他児を目で追っている。C担当と目があうと首を軽くたてにふる。〈どーも〉とC担当もあわせておじぎすとCも再度首をたてにふる。

【コンサルテーション】

Con. : Cは楽しくしているが、このスプーンを鳴らす行動は、Cが三者関係を意識している。やきもちを焼くということはもう一人の子が見えているということ。Cは3人の関係で発達できる子。先生が他の子を抱っこして、1対1になっているところを、Cも一緒に3人にするような意識を持つ。Cの場合は手に持っているスプーンがテーマを示している。音が出て楽しい顔ではない時がある。言葉ではないが、スプーンでたくさんCは表現しているよう。30秒C担当が来ないと、このスプーンを落としていただろうが、その寸前に来てくれた。落としてしまったらそのあとは拾おうとしてもダメ。手を頭を持ってきているのは、そのストレスを自分で自己調整できないから。1対1から1対2の関係をもつようにできるといい。職員は両方を見渡してみる。3人の関係でやりとりしていると、自分じゃない方と職員がやりとりしていても待てるようになる。



ビデオの中でC担当とCが合致していたシーンが、15分の中で1回だけあった。〈あ〜ん〉と目が合うシーン。大人と子どもの典型的なやりとりだが、こうやって見てみると、お互いを見ていない事が多い。一体感のある食事を心がけてみるのはどうか。こういったシーンが何回生じるかが大切。食事の与え方はマイルドで穏やかだが、もっと細かくCと良い食事を取ろうと思った場合、Cともう少しやれる事がある。今後Cが期待を持って相手と関われるようになる為には、Cの目標を拾い上げたりする必要がある。



C担当：昼食時はまだ穏やか。夕食時はもっと忙しくちゃんと見てあげられていない。Cよりもっと大きな子に掛かりっきりで、確かに1対1の時はCは楽しそう。

Con. : 常に1対1は現場では難しい。でも15分で1回のコンタクトを、3回位はできるかなというようにしてもらいたい。Cにとってはスプーンが大事みたいなので、Cがトントンしてたら〈トントントンカ〉とこのスプーンに応えるとか。先生がいない時にもスプーンでトントンして呼んでいる。でも実際はCがスプーンを落とす場面では、ビデオを撮っていたら後で見て何がおきているかわかるけれど、実際には職員はいないのだからあの場ではCが何を求めているのかは分からない。Cの今後のQOLを上げるためには、こういった場面で相手にその意図が分かるようにアピールできるようになるといい。例えばCが自己慰撫している時に“どうしたんだろう？”と職員が思っ関わる。Cのスプーンの先の人とのつながり体験があるといい。

8月 (14ヶ月)
 日誌

【情緒】「遊べず甘えている」ということから気持ちのならない時には職員のそばにいたり、「抱っこしてくれる大人がわかっている」ということから、職員を選択している様子がかがえる。父親との面会の際、泣くことが減っており、少しずつ安心感が育っているよう。

【言語・表現】拍手して「あー」と言ったり、座るときに「トーン」と言う等、動作に効果音をつけているという記載はあるが、発語の記述よりも「ににこしている」という記述が多く、言葉はまだ少ない。

【運動・遊び】初めて靴をはかせてもらったり、つかまり立ちの時間が長くなったりと、もう少しで歩きはじめるところか。電話を耳に当てたり、スコップで食べさせる真似をしたり、ごっこ遊びがでてくる。

【養育者の視点の変化】他児の名前がでてくるが増え、周囲と関わっている姿を捉えている。

発達検査

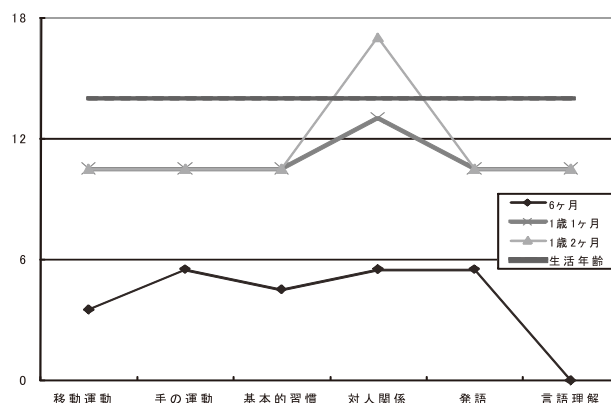
8月 (14ヶ月時) の結果

【遠城寺式発達検査】

Cの検査結果 (発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
6ヶ月	3.5(58)	5.5(92)	4.5(75)	5.5(92)	5.5(92)	0(0)
1歳1ヶ月	10.5(80.8)	10.5(80.8)	10.5(80.8)	13(100)	10.5(80.8)	10.5(80.8)
1歳2ヶ月	10.5(75)	10.5(75)	10.5(75)	17(121)	10.5(75)	10.5(75)

単位は月で、発達月齢を示した
 括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

全体として大きな変化は見られなかったが、先月からの変化として、「対人関係」領域の「1歳2カ月級：簡単な手伝い」「1歳4カ月級：困難な事に出会うと助けを求める」が通過し、ぐっと伸びた。先月辺りからの言語領域の伸びと連動して、他者とのやりとりが活発になってきている。

育ちの所見

他者・他児とのやりとりの記録が増えていたり、発達検査の対人関係領域が伸びていたり、人との関わりが増えてきている。動作に合わせて言葉もできるようになり、少しずつ言語領域も伸びてくるか。ごっこ遊びができるようになり、イメージを使った遊びが今後増えてくるだろう。そこに言葉が添えられると情緒の幅が拡がり、言葉がぐっと伸びる考えられる。

ビデオ記録・コンサルテーション記録

<ビデオフィードバック>

<シーン>

昼食。C担当と久しぶりに一対一で食べている。机のそばで他児が一人おもちゃで遊んでいる。その他児がCの身体を触ったりかまってもCは応じず、黙々と食べている。途中からスプーンを渡されると握り、おかずをすくおうとしたり、お皿をかかん叩いている。C担当はスプーンで食べさせている。

【ビデオ】

Cは片手にスプーンを握り、お椀をかんかん叩いている。2人の目が合うと、C担当がうなずき、それにあわせてCもうなずく。C担当はスプーンでおかずをすくってCの口の前にもっていくと食べる。その後もCはスプーンでお椀を叩いているが、ふとスプーンを見て口に持っていき、おかずを食べる。C担当が持っているスプーンをCに見せるとスプーンとC担当を交互に見た後、自分のスプーンを再び口に持っていき食べる。その後、何度かCが手に持っていたスプーンを口に持っていき、口にいられている間C担当を見ている。

【コンサルテーション】

Con.：この時の食事はどうだった？

C担当：久しぶりの一對一の食事。この頃ちょうど、スプーンを自分で使うのが上手になってきた頃。持たせてあげたら積極的に自分で口に運んでいった。この日初めて、真似してやり返したらまたやり返してというやりとりをした。それ以降やってないけれど。

Con.：先生の食事の負担感とか、感じ方、終わった感じどうでした？

C担当：確かもっと食べたいって怒って終わったのかな？なんか怒ってた、反り返って。もうないんだ、ごめんね、で終わった。

Con.：他の先生方はどうですか？

FSW：今回、口に運んだのを見たのは、初めてだった。スプーンは取ってカンカンカンカンやってるけど、口に持っていくのは見たことがなかった。

F職員：Cのペースを待ってあげている。この日、私は隣で見ている。時間ギリギリになって起きてきて、呼んできてビデオ撮った日。ビデオ回っているのにすごいなあ。一対一で待ってあげられるというのが感心して見ている。

Con.：待っている時に嫌じゃなかった？

C担当：もしかしたら、もっといっぱいいたら、できないかもしれない。でも普段は早くしてよ、という気持ちではない。

Con.：食事は最も自分のペースでやりたいもの。相手に入れられている感じ、ペースが止められている感じが一番嫌。それで、こちらは合わせるのが大事。それができると、本人がコミュニケーションしてくる余裕が出てくる。自分を相手にしてくれているのがすごく伝わる。長いようでも、結果的にはトラブルなく食べられる。Cがスプーンを叩いているのは、ごはんが進まない、ということで止める？

C担当：止めていたかも。

Con.：Cだけ、一人の世界ではなくて、トントンしながらも、「あっ」と言っている。その行動自体を止めるのではなくて、トントントンしながらも先生と目を合わせて、子どもが口を開けて、食べる。先生が自分に付き合ってくれているのか、自分の発信したものに回答してくれているのかを確かめている感じ。Cからちょっとちがうことをやってみて、反応を見ている。そこで先生が上手に反応してくれたので、嬉しくなっている。もし一人で食べることが目的だったら、食べている最中に先生の顔を見ない。口に入れてから、味わいながら先生の顔を見ている。

【ビデオ】

Cは目をつぶっては開けることを繰り返し、開けた時にはC担当を見ている。C担当が笑うとCも笑い、笑い声もでる。C担当がスプーンをCの口に持っていくと食べ、C担当の顔を見て笑う。スプーンでカンカンお皿を叩くが、C担当がスプーンを口に持っていくとC担当の顔を見る。C担当がうなずくとCもあわせてうなずいて口をあけて食べる。その後、口にいられてもらった後C担当と目を合わせて二人でうなずいている（Cは同時にのみこんでいる）。

【コンサルテーション】

Con.：食べ始める前に、迷っている。ここは面白い。先生がずっとつながっていてくれて、他の方向を見た後Cから見ている。自分でごはんを食べている、というところから、先生と関係を作ることに入っている。ごっくん、と飲み込んだ瞬間にうなずいてくれている。

【ビデオ】

Cがスプーンでお皿を叩いているところに、C担当が<あーん>と言ってスプーンをCの口にもっていくと食べる。C担当はおかずがこぼれ拭いている。Cはスプーンでお皿を叩き、窓の外をみながら口はもぐもぐと動かしている。C担当がティッシュをとりその場を立つ。Cのスプーンを叩く力が強くなるが、何回か叩いたあと自分の口に持っていき食べる。C担当が戻ってくるとCはビデオの方を見る。その後C担当と目があう。

【コンサルテーション】

Con.：これ、あーんと言っているのね。確かに最初の方はビデオが気になったと思う。食べ出して、先生といることが動機付けられてくると、気にしなくなってくる。先生がいなくなった時に、ビデオの方を見ないで待っていた。待っていたというのは、先生と一緒にいて充電されたということ。凍りつくとか、泣くとか…そういうのがなかった。

【ビデオ】

Cはスプーンでお皿をカチカチ叩いては口に持っていき自分で食べている。Cはスプーンを口にくわえたままC担当と目があい、首を小さくこっくり縦にふり、C担当もあわせて縦に振る。C担当がCのスプーンを手でずらしてスプーンを口に持っていきと食べる。C担当と目を合わせて二人で小さく首をたてにふる。目をぎゅっとつぶって開けて一緒に首をたてに振る。

【コンサルテーション】

Con.：食べながら、何度か先生が首を合わせてくれていた。最後にCは食べることが目的ではなく、Cからこうして、一緒に先生とごっくんするのが目的になっている。先生が自分に合わせるかどうかを、積極的にやり出した。ほんのちょっとだけど、違いがある。最初は先生があわせてくれていて、気持ちいい繋がり感がある。Cは飲み込む瞬間に大きく首をうなずいてC担当を見ている。小さいことだが、Cが求める勇気を、先生が先に合わせてくれていて、勇気が持て、仕掛けて一緒にごっくんとできると、Cはすごく嬉しい。赤ちゃんの信頼関係はこのようなやりとりでできていく。小さい食事場面だけど、Cの動きにこちらが合わせていくと、食べることだけではなくて、基本的信頼感をCが持てるようになる、小さな積み重ねができてくる。ここでは一対一だから繊細なところで出てくる。大勢だとこんな繊細にはできない。でも大勢なら大勢なりにできる。今のいいシーンを増やして欲しい。一番ほっとできる食事場面。Cは割り私たちから見ると、用心深い人。とても怖がり、消極的、引きこもりがちだと思うが、かなり大胆にこうして迫っているCを見られて、いい食事場面だった。先生はどうでした？

C担当：この食事場面はすごく楽しくできて、Cも自分でスプーンを口に運ぶ瞬間が楽しいという感じで、だから余計楽しくて、次も入れるかな？と楽しい食事だった。

Con.：どうせだったら楽しい食事に、と思っていた方がいい。口に入れるのが嬉しかったと先生がそう思ってくれているから、トントンを止めないでいてくれた。そうじゃなくて<〇〇君！>と止められるとそっくり返って怒り、そういう場面は他でもよくある。Cはつながり方を学んでいるから、積極的に私たちにもやってくるだろう。

乳児院心理：ビデオに撮られて多少意識はしていると思うけど、そういう中で、どういうことをしようと思ってこの食事場面に入っていたのか聞いてみたい。

C担当：こういうところを撮ってほしいと思いつながらやってはいなかった。撮ってもらってから思ったのは、自分から口に入れている姿や、“食べる？うん”というやりとりが最近のCの流行りなので、そういうところを撮ってもらえたのは良かった。

Con.： “うん” というのも、Cの人とつながる方略なのかもしれない。すごく接点ができてきている。関係、ということがCのテーマ。食事だけでなくオムツ替えるときなども、合わせながら、どうせなら楽しくできるといい。

C担当：今幼児食に変わって、このときほど介助してない。結構一人で食べている。今朝はバナナをくれと最初から怒ってごはんが進まなかった。最近また変わってきている。

Con.：非常事態的なことのほうが大人が早く来てくれることが多い。子どもは、要求・SOSが人とつながる一番効果的な方法だと学んでいる。幼児食に入る手前で、つながる楽しさを子ども達が持って食事場面を持るといい。

9月 (15ヶ月)

日誌

【情緒】知らない場所では不安そうな表情をしたり、祭りでは人見知りして泣くという記載がある一方、乳児院に戻ると安心そうな表情をしたり、部屋で実習生と遊んだりという記載から、乳児院全体がCの安全基地になっている様子がうかがえる。父親との面会で泣くことが減っているが、少し外見が変わると泣いてしまうことがあり、恒常性の育ちにはもう少し時間がかかるか。

【言語・表現】「バナナ」と単語を言った記載はあるが、その他は特に発語の記載がない。C担当のくちょうだい>に物を渡したりしており、C担当の言葉かけは理解しているが、Cからの発話が少ない。

【運動・遊び】手押し車で遊ぶことが増えており、だいぶ足腰がしっかりしてきて支えがあれば歩くことができるようになっていく。散歩や外で遊んでいる記載が多く、遊びの範囲が広がっている。“いないいないばー”をしている日があり、“見える-見えない”の遊びが頻繁ではないがある。

【養育者の視点の変化】遊んでいる記載が増えている。

発達検査

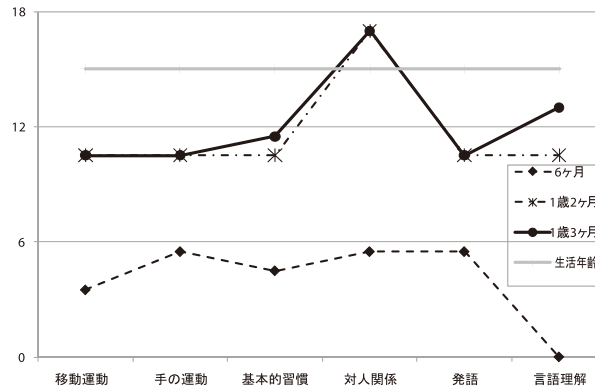
9月（15ヶ月時）の結果

【遠城寺式発達検査】

Cの検査結果（発達月齢）

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
6ヶ月	3.5(58)	5.5(92)	4.5(75)	5.5(92)	5.5(92)	0(0)
1歳2ヶ月	10.5(75)	10.5(75)	10.5(75)	17(121)	10.5(75)	10.5(75)
1歳3ヶ月	10.5(70)	10.5(70)	11.5(76.7)	17(113.3)	10.5(70)	13(86.7)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

先月からの変化として、「言語理解」領域の「1歳級：要求を理解する（おいで、ちょうだい、ねんね）」が通過。先月までの「対人関係」の伸びに引き続き、「言語理解」が伸びてきたようである。

育ちの所見

日誌や発達検査からも職員の言葉を理解する力が伸びてきている。移動運動はまだ生活月齢より下回っているが、手押し車などで遊ぶ姿を捉えていることが多く、身体を動かす活動や遊びの中で情緒体験が賦活され徐々に発語につながっていくことが考えられる。

ビデオ記録・コンサルテーション記録

<ビデオフィードバック>

<シーン>

全体で20分ほどの食事。11時半ごろから寝て機嫌よく起きた直後の1対1の昼食。このところ、昼食前に寝て、起きた後に1対1の昼食となるパターンが続いている。加えて、「自分でやる」と主張したり気に入らないものは口から出したり好き嫌いがハッキリしてきている。

（C担当感想：最初は介助を嫌がっていたが、喉が渴いていたらしくスープを飲み干した後に落ち着いて食事が始められた。1対1だったため、普段は手づかみで食べる場所をスプーンにのせてあげたり、自分で食べるのを待たせられたので良かった。機嫌は普段とあまり変わらなかった。）

【ビデオ】

Cはスプーンを左手で持ち、右手もスプーンに伸ばす。Cはビデオの方を見ている。C担当がスプーンですくい、フーフーしてCの目の前に差し出すとCはイヤイヤと首を振る。C担当がスープカップを手で包みフーフーしているとCはC担当を見る。C担当がスープを飲ませた後、スープカップを目の前に置くと、Cはカップを両手で持ち、上目づかいでC担当を見ながらスープを飲む。

【コンサルテーション】

Con.：最初まだちょっと緊張している。先生をよーく見ている。目も合ってるね。飲みながらも見ている。いつもこんな感じ？1対1だから？ビデオが少し気になった？

C担当：こんな感じ。

Con.：また見つめ合っているいいですね。

【ビデオ】

Cは自分の持っていたスプーンをC担当に渡す。そのスプーンでC担当が食べさせる。少しすると再び「あ」と言いながらCがスプーンを上げてC担当に渡す。受け取ったC担当が食べさせていると他児がテーブルに来て、Cは他児を見る。Cはスプーンを渡され、自分で食べながらビデオの方も見る。C担当が「スープないね、持ってくる?>と席を立つと、C担当の行った方を見ている。C担当がお茶を持って戻ってくると、Cは手を伸ばして求め、上目づかいで見ながら飲む。Cは「うやあ」とスプーンを斜め上にかざすとC担当が受け取り、「はい、どうぞ>とすくってCに食べさせる。お茶を飲んだ後、再びC担当がすくってあげてから、「はい、どうぞ>と食べさせる。C担当がスプーンをお皿に置いて渡すとCは手に取り、C担当を見ながらスプーンを上げる。C担当はスプーンを受け取り、ごはんをすくって「どうぞ>とお皿におくとCが自分で食べる。Cがスプーンを上げるとC担当はその手を持っておかずをすくい、Cが自分で食べられるように口にもっていく。

【コンサルテーション】

Con.: 先生にスプーンを渡すことはよくある?

C担当: 最近よくある。介助用に私も持って、Cも持っている。たまに介助用でなく、Cのスプーンをわざわざ使って欲しいみたいで、私は自分のスプーンを置いて受け取る。

Con.: 明確に先生に渡したいよう。単にスプーンが嫌だったら捨てるだろう。自分のスプーンを先生に渡すということを繰り返している。スプーンを渡されたときどんな気持ち?

C担当: やって、という甘え、かわいいと思う。

Con.: もらいながら先生もニコってしていて、それが大事。甘えもあるけれど、その後自分でも食べている。食べるのが苦痛で先生にやってもらわなければならないのだろう。他の方法で先生とつながっていたら、例えば先生もごはんを食べながらおいしいねとかやっていたら、そういうことはしないかもしれない。このスプーンは、先生につながりを求めている。「自分で食べるでしょ」と言うこととは別に、つながり感を別の形で持つとこのやりとりはなくなっていくかもしれない。「あーっ」と声を添えて先生とコミュニケーションしている。

【ビデオ】

C担当が「食べる?>とスプーンをCの目の前に差し出すと、Cは差し出されたスプーンに自分のスプーンをかつんと当てる。C担当が「あーん>と言いながら食べさせる。Cはお茶を飲みながら上目づかいにC担当を見て目が合う。CがC担当にスプーンを渡し、C担当がごはんをすくってCに渡すとCは口にもっていく。Cはしばらくもぐもぐ口を動かしている。C担当がおかずをすくってスプーンをCの口を持っていくと同時に、C担当の目を見ながらCは持っていたスプーンを上げる。スプーンはぶつからず、C担当が差し出したスプーンがCの口へ。するとCは食べたものを出し、C担当は「あ」と言う。

【コンサルテーション】

Con.: かつんとやるところ。偶然ではなくて、意図してやっている。

C担当: スプーンをかつんと。

Con.: Cからかつんとやっている。これ、スプーンでつながっている。控えめだけど、つながりたい、一緒に食事したいと思っている。こんなに細やかにできるのはここだけかもしれない。控えめだけど、根っこのほうで求めていることはあると思う。願わくは、もっと強く出てくるといい。それには先生からもう一回やるとか、オーバーにやる必要がある。Cが高揚感、心が浮き立つ体験を持って、自分から出せるようになるといい。

【ビデオ】

C担当がすくってスプーンを口へ持っていくとCは口を一瞬開けるが食べずにイヤイヤと首を振る。C担当は「やなの?>と声をかける。CがスプーンをC担当に渡し、C担当がすくってCの口へ持っていくと一瞬止まり、イヤイヤと首を振る。C担当は「やなの?>と声をかけ、スプーンをお皿に置いて渡すとCは自分で口に持っていく。

【コンサルテーション】

Con.: お腹がいっぱいになって、嫌なのね。先生が残りを食べさせなきゃと思っているとき。

【ビデオ】

Cは両手を広げて上げる。C担当はCの手のひらをばちばちと叩く。Cは手を伸ばしたままで、C担当が「ちょうだい>とスプーンの下に手をだすと、CがスプーンをC担当に渡す。C担当はすくってお皿に「どうぞ>と置くとCはスプーンを手に取り口に持っていく。しばらくCが自分ですくおうとしていると、「あ」と両手を伸ばしてC担当を見るが、C担当はCの顔を見て特に反応をしないでいるとCがまた自分ですくおうとし始める。Cが机をスプーンでガンガンと叩き、C担当を見る。C担当が手を出すとCが振っていたスプーンに当たり「いたいいたい>と言うも叩き続けている。CはC担当がすくって食べさせると食べ、C担当の手を持って動かし、スプーンをカンカンさせる。CはC担当の持っていた

スプーンを自分で持ち、両手に持ったスプーンを合わせてカチカチする。C担当が<ちょうだい>と手を伸ばすとCは「あ！」と言ってスプーンをC担当に渡す。C担当が<食べる？あーん>と口に持っていくと食べる。C担当は立ちあがってCを座り直させたり皿を移動させたりする。Cは手づかみで食べる。少しして「ん」とCがななめ上の方を指さすと、C担当も振り向いて<曇ってきたね>と指さしの方向を見る。Cが皿ごと持ち皿をくわえると、C担当は戻させて、すくって渡すと食べる。

【コンサルテーション】

Con.：さっきよりも、控えめではなくて手を広げて求めている。先生は<おーっ！>とならなかった。そうするとその後、もう一回「あっ」と言って求めた。そしてカンカンが出てきた。もう一回流れで見ると、顔が嬉しそうではない、これはやっぱり「あっ」と言ったとき、先生とのつながり感が落ちた。「あっ」と言った時、<おっ>と先生が言っていたら、違ってたかもしれない。Cのスプーンの使い方は、控えめにカチとして先生につながろうとしている。楽しく食べてお腹も満たされてきて、結構大胆に迫っている。「あっ」と言ったときは、もうちょっとオーバーアクションで答えるといい。そうすると嬉しくなって、楽しそうにやるだろう。わりと落ち着いて一人でいたし、Cは幸せだったのだろう。一体感を先生に求めてみるせ、という感じでやっている。Cはきつとヤキモチ焼きだと思ふ(笑)。じっと見ている。控えめだけど、指さしめだけど、Cは終始、Cなりに積極的。スプーンを先生にあげて、自分にくれとやっているし。先生が優しく、受けてくれているから。Cの積極性は普段見えないが、遠くで一人でじっと見ている。先生がもっと出ることで、発語も出てくる。こういうことは、先生だから出してきているのかなと思う。

C担当：短いけど一対一で関わられて、でもそれ以上に求めていることが分かった。こちらからするとゆったりできたなと思っていても、本人としては、満足していないということが表情などでも分かった。遊びの場面でも、明らかにつながりを求めているということが分かるときがあるので、もっとやりたい。

Con.：つながってみようとCが試していることがいい。“満たしてあげられない”ではなくて、充分満たしてあげられている。もう一度試してやるぜと、主体的に環境に働きかけている。多分に期待を持っている。どうせやってくれないと思っていたら、スプーンを渡したりしない。そうした期待に8割くらいは答えてあげる。そうすると嬉しくなってCは高揚する。

10月 (16ヶ月)

日誌

【情緒】 大人数の時やなじみのない状況では圧倒され緊張が高まり固まることが多いが、C担当がそばにいて時間がたつと慣れてきて自分から動けるようになっており、C担当への安心感が育っている。つたい歩きができるようになり、動くおもちゃを中心に、自分がやりたいことは声をだして主張したり、好みではないおかずを「ヤダ」とはっきり言ったり等、主体性の育ち、そしてその表現ができるようになってきている。

【言語・表現】 「ちょーだい」「あんと(ありがと)」「やって」「やだ」は言えるようになってきているが、その他の言葉はまだのよう。欲しいものややりたい時に「あー」と声をだして訴えるようになってきている。

【運動・遊び】 先月に続いて“いないいないばー”を好んでおり、「ばー」という言葉も一緒にでてきている。手を離すと数秒間たっちができるようになっていたり、手をつなぎながらの散歩の距離が長くなったり、もう少しで歩けるようになるところか。

【養育者の視点の変化】 “Cから～する”という記述が多く、Cからのメッセージや主張に注目している記述が多い。

発達検査

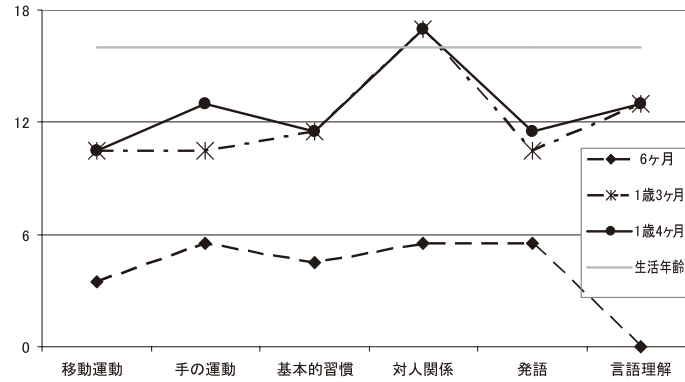
10月(16ヶ月時)の結果

【遠城寺式発達検査】

Cの検査結果(発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
6ヶ月	3.5(58)	5.5(92)	4.5(75)	5.5(92)	5.5(92)	0(0)
1歳3ヶ月	10.5(70)	10.5(70)	11.5(76.7)	17(113.3)	10.5(70)	13(86.7)
1歳4ヶ月	11(65.6)	13(81.3)	11.5(71.9)	17(106.3)	11.5(71.9)	13(81.3)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

先月と比較して、「手の運動」と「発語」において伸びが見られた。「対人関係」は変わらず生活年齢より若干高く、その他の項目は生活年齢より下回っている。

育ちの所見

全体的に発語が少なく喃語がまだ多いが、言葉でCの要求や感情を表現するようになってきており、発達検査の「発語」の伸びにも表れている。「手の運動」が伸びており、主体性の伸びと一緒に手を動かして物をとったりすることも増えたのかもしれない。

11月 (17ヶ月)

日誌

【情緒】 遊びが見つからない時に職員に抱っこをせがむなど困った時に職員に助けを求められるようになっている。同様に父親にも台に上る時に手伝いを求めており、父親とも安心して関係が構築されている。室内では実習生に人見知りすることがなくなり、上手に甘えているという記録があり、職員を安全基地にしなが外へ広がっている。

【言語・表現】 「やったー」と手を叩いて喜ぶ、「やだ」をはっきり言う、おやつへの催促をたくさんする、など情緒表現が大きくなっており、そこに発語も伴っている。また、手を離すと膝から崩れ、“もっと自分に自信を持ってよいのではと思う”と記載があり、Cの成長を認めるとともにCの主体性を期待をするようになってきている。

【運動・遊び】 歩くことが楽しいようで、散歩で長い距離を歩いたり、室内でもつたい歩きをしている記録が多い。砂場でままごとのごっこ遊びがでており、8月にごっこ遊びの記録があったが、スコップで食べさせる真似とその時と内容は変わりはなかった。

【養育者の視点の変化】 Cの表現が大きく・わかりやすくなったからか、情緒をくんだ表現がでてきている。

発達検査

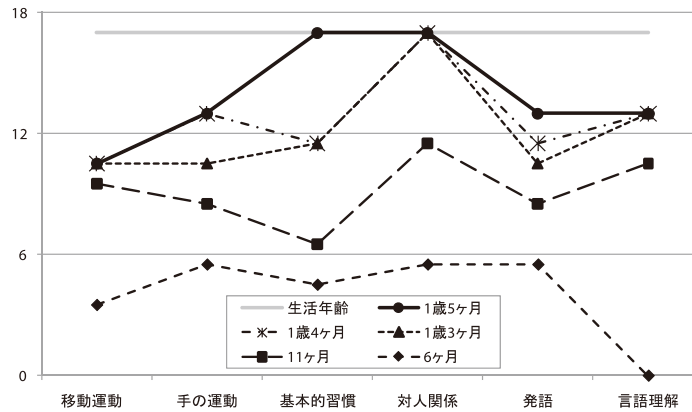
11月 (17ヶ月時) の結果

【遠城寺式発達検査】

Cの検査結果 (発達月齢)

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
6ヶ月	3.5(58)	5.5(92)	4.5(75)	5.5(92)	5.5(92)	0(0)
11ヶ月	9.5(86)	8.5(77)	6.5(59)	11.5(105)	8.5(77)	10.5(96)
1歳3ヶ月	10.5(70)	10.5(70)	11.5(76.7)	17(113.3)	10.5(70)	13(86.7)
1歳4ヶ月	11(65.6)	13(81.3)	11.5(71.9)	17(106.3)	11.5(71.9)	13(81.3)
1歳5ヶ月	10.5(61.8)	13(76.5)	17(100)	17(100)	13(76.5)	13(76.6)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

「基本的習慣」と「対人関係」が月齢相応になった。「発語」が生活年齢より下回るが先月よりも伸びており、人のやりとりの中で言葉がでてくるようになっている。

育ちの所見

情緒の表現が大きくなっており、それに伴い一語文であるが発話もみられる。発達検査でも「発語」が伸びており、少しずつ言葉での表現が伴ってきている。遊びやおやつへの積極性も見られ、自分から催促するようにもなっている。Cの意思が表現されるようになり、職員もCの意向をよりくみとることができ、それがさらにCの主体性の伸びにつながっているのではないだろうか。

12月 (18ヶ月)

日誌

【情緒】 得体の知れないもの（色粘土）に触れなかったり、初めての場所では歩けなかったりと慎重な様子が見られる。そういう時には「やだ！」と言ったり、人見知りをして泣いた時には抱っこを求めたりなど、ただ固まるのではなくCの主張をし、安心を自ら求めている。父親を認めると近づいて行ったり、抱っこをせがんだり、父子関係が深まっている。

【言語・表現】 歌に合わせて所々歌う、「さゆっ」とコップを出してお茶を求める記録があるが、言葉自体は少ない。＜ジャンパーどれだ？＞という職員からの声かけに自分のものを引っ張ってくるなど言葉の理解は進んでいる。

【運動・遊び】 つかまり立ちから自分で歩くことをはじめ、10日に初めて床から立ち上がることに成功。それから歩く距離が伸び、自発的に歩いている様子が多数報告されている。身体を動かすことが楽しいようで、歩くことと笑っていることが一緒に記録されていることが多い。

【養育者の視点の変化】 始歩の時期だったため、歩くことに注目された記録が多い。

発達検査

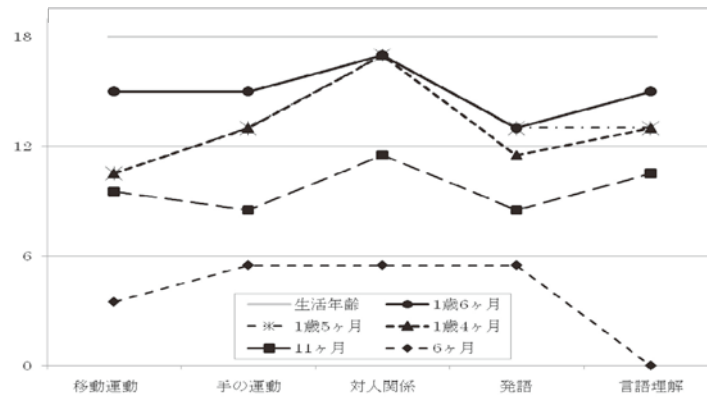
12月（18ヶ月時）の結果

【遠城寺式発達検査】

Cの検査結果（発達月齢）

月齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
6ヶ月	3.5(58)	5.5(92)	4.5(75)	5.5(92)	5.5(92)	0(0)
11ヶ月	9.5(86)	8.5(77)	6.5(59)	11.5(105)	8.5(77)	10.5(96)
1歳4ヶ月	11(65.6)	13(81.3)	11.5(71.9)	17(106.3)	11.5(71.9)	13(81.3)
1歳5ヶ月	10.5(61.8)	13(76.5)	17(100)	17(100)	13(76.5)	13(76.6)
1歳6ヶ月	15(83.3)	15(83.4)	17(94.4)	17(94.4)	13(72.2)	15(83.3)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出したDQ



【所見】

「移動運動」「手の運動」「言語理解」において先月より伸びる。生活年齢にはまだ届かないが、全体的に少しずつ発達が伸びてきている。「発語」は先月より伸びがなく、下位領域の中で一番下回る領域となった。

育ちの所見

始歩により移動の範囲が広がっており、日誌、発達検査両方からも身体運動の伸びが見える。職員の言葉かけを理解できるようになっており、発達検査の「言語理解」も上がっている。しかし、「発語」は伸びておらず、発話の記録も少ない。移動と笑顔がセットで記録されることが多いことから、身体を動かすことによって情緒が賦活され、発語につながるのではないかと考えられる。

ビデオ記録・コンサルテーション記録

<行動観察および発達検査フィードバック>

Con: たっちができるようになって。1ヵ月いかがでした？

C担当: 歩き始めたのは、ついこの前。突然という感じで歩き始めた。その前までは、つかまり立ちから、数歩歩くという感じだった。本人も歩けることがすごく楽しいという感じで、ニコニコしながら歩いている。

Con: 移動能力が獲得されたので、「移動運動」が一挙に上がるだろう。気になるのは発語。Cは意思が分かっている。気持ちに乗せて、こちらから接触してやりとりする機会を増やさないと、冷えていってしまう。今回はビデオの中で言葉のコミュニケーションのことを見ましょう。

<ビデオフィードバック>

<シーン>

夕食での撮影。全体で20分ほどの食事。一日をC担当と一緒に過ごした上での夕食。1テーブルに子ども4人、職員2人。C担当の隣に動きの激しい他児がいたためそちらの対応をしなければならずCは自分で食べている。時折、C担当からの声かけがある。

(C担当感想: 今までビデオを意識はしていたが、今回はビデオに向って食べたよというアピールをしていたのでカメラに慣れてきたのかと思った。最近は介助しようとしても「やだ」とさせてくれないことも多く、他児の介助に手がかかってしまうこともあり自分で食べてもらうことが中心で食事が進まない時に介助することが多い。)

Con: これは割といつもの食事場面？

C担当: 同じ机にいる職員は、交代職員。いつもだと、4人を1人で見ているという感じになる。Cより月齢の低い子の介助をしながら、時々Cに話しかけて、8割Cは自分で食べた。

【ビデオ】

C担当は食事の準備をし、Cはビデオの方を向いている。その後、右隣りの子を見る。C担当が<Cくん。いただきます>と声をかける。Cは左斜め前の子を指さして、「〜〜」と言う。職員は<はい、ちゅるちゅるがおいしいの。はい>とお皿を出す。C担当は隣の子に食事を<あーん>と食べさせている。CはC担当がお皿に取り分けてくれたおかずを左手でゆっくり口を持っていき、自分でもぐもぐ食べる。

【コンサルテーション】

Con: Cのこういう目線。絶えず控えめだけど、Cは先生の顔を見ている。隣の子どもは小さい？

C担当: 1歳1ヶ月。

Con: まだまだ介助が必要だし、アピールの行動がはっきり出ている動きの激しい子ども。この子と<あーん>とか、

見つめあいをしている。

【ビデオ】

Cはビデオの方を見ている。C担当がCを見ると、CもC担当を見る。二人で一瞬目が合うと、C担当は「おいしい？C君」と声をかけるがCは特に反応がない。C担当は隣の子へ食べさせ、Cは口に食べ物をつけたまま、もぐもぐしている。C担当が味噌汁を配っているのをCは見ている。Cがビデオの方を見ていると、C担当はCを見ている。少しした後、<ごはんも食べようか>とスプーンでごはんをよそってCに食べさせる。Cはビデオを見ながらもぐもぐし、C担当はすくってお皿におく。Cは手でおかずをつまんで口に持っていく。

【コンサルテーション】

Con.：先生、このときCを見たでしょう、何を思った？

C担当：Cだけにならないように、と。(Cは)気付いてないですね。

Con.：先生は2人に等分にしてやりたいと思っている。お互いに見ているのだけれど、視線が合っていないからもったいないことになっている。先生がCを見ている時は、声に出すといいかもしれない。じっと止まって、黙ってすうっとCの様子を見て、見守ってくれている感じが分かるけれど、Cはもうちょっと先生からコンタクトが欲しいかもしれない。食事自体は止まっている、これはCが空虚な感じを持っているということ。Cの発達段階はコミュニケーションを楽しみたいところにいる。前よりも求めている。先生がいない間、ビデオ撮影者（施設心理）に意識が向っている？

施設心理：はい。

Con.：前は、ビデオが怖くてじーと見ていたが、今はそうではなく見ている。言葉を学習しようとしているので、おいしい、とか声掛けをしてもらえるといい。隣の子は介助が必要だから、Cはもっと関わってもらうためには自己主張が必要。あるいは先生がこっちに座って、両方の子どもに90度に座る。Cは2人のやりとりをあまり見ない。そうすると3人で一緒にいる感じがしない。見ていて<Cくーん>と話しかけると3人で食事ができる。それから6分くらいで、スプーンのシーンがあり、3人でつながる場面が出てくる。

【ビデオ】

Cはじーっとビデオの方を見ている。少ししてC担当が「ごはん、はい」とCへスプーンを向けると、Cはスプーンを使って食べる。(ビデオ：<ごめんね、気になるね>と移動する。)隣の子がスプーンでコツコツと音をだすと、Cはにこっと笑いながらスプーンでカンカンカンと音をだす。C担当が「反対だよ」とフォークを反対の手に持たせる。C担当が隣の子と席を交代し、Cと90度で座る。C担当は隣の子に食べさせている。Cはビデオをじーっと見ている。その後、左手で食べる。Cは「ああ！」「ああ！」とビデオを向いて時々発声。C担当が味噌汁を近づけると、Cは飲む。C担当がCを見て「おいしい？」というCはビデオを向いて「ああ！」と言う。Cは手づかみでゆっくりもぐもぐ食べている。C担当がスプーンでごはんをすくい「ごはんあんまり進まない？」と口に持っていくが、ビデオの方を見ており何度か「ああ！」と言い食べない。C担当は隣の子に食べさせつつCを見ている。

【コンサルテーション】

施設心理：手前の子が、自分を気になって食事ができないので、移動したんですが。

Con.：それまでCは一人の食事だったが、隣の子がちょっとコン、としたらCはコンコンするでしょう。隣の子の方は分かっているんだけど、Cは叩いて、隣の子の顔を見ている。つながろうとして、つながってるよねーとちゃんと確かめようとしている。そこに先生も入って行って、Cが叩いたことに、応答してるよーと乗ってあげるといい。言葉は発していないけれど、言葉を獲得する上で一番大事なコミュニケーション、それが出てきている。意思表示で、イヤイヤもするのでは？

C担当：はい。Cは、食べたくないものだったりとか、はっきりヤダと言うし、お手伝いしようかー？と言ってもヤダと言う。意思がはっきりしている。

Con.：ヤダと言うのが、最初に“自分”ができる上で必要。「ヤダ」→「あっそうなのね」で終わっていると、まだ自己が育たない時期。「ヤダ」→「やだ〜でもー」と関わるとよい。課題に関しては助けを受け入れられないけれど、情緒のやりとりは重ねてもらった方が、一人にならない。ちょっとやりにくい時期だけど、やってもらおうといい。歩けるようになり、歩くと「おーっ」と言う？

C担当：言っている。

Con.：立ち上がると、「おー」と情動が沸き起こってくる。<早く早くー>など、声を乗せるチャンス。情緒が高くなるのがCは少ない。歩き始めに情動が活性化されているのは、今までに無い機会だからもっとそこに乗せていくといい。

施設心理：やっぱり自分でやりたいという時期。じゃあ自分でやってね、と自分としてはよくあるなあと思った。でもそういう時も、自分でやりたいというのをを使って、何かコミュニケーションできたらと思う。

【ビデオ】

C担当がCを見ると、CもC担当を見てお互い見つめ合う。C担当がCの口へごはんを持っていくとCは食べる。C担当がくもぐもぐもぐもぐ>と声をかけるとその言葉のリズムに合わせてCは少し体を揺らす。手づかみで食べながら時々C担当を見るが、C担当は隣の子に食べさせている。Cがビデオに向かって「あ！」と言うとC担当はCを見る（Cはビデオの方向に向いたまま）。Cは再び手づかみで食べ始め、C担当は隣の子を食べさせている。少ししてC担当がCへくあーん>とスプーンを持っていくとCは食べる。

【コンサルテーション】

Con.：座る位置を変えたのがすごくいい。距離を変えて見つめ合う、そういうことがたっぷりできる先生。次は言葉が出てくるといい。発達検査で遅れているところを伸ばすといいと思う。先生方はどう？

FSW：席を変えてから全然違う。

Con.：真正面だと、視線をまず合わせて、寄せて行かないといけないけど、90度だと、身体を寄せて行くことができる。

園長：私もそう思った。最初のうちは、ごはんを食べていても全然楽しそうでなかった。

Con.：隣の子は月齢がまだ低いから、いつでもハッピー。“食事ができている”ということと、“食事体験のクオリティーが高まっている”のは別の問題。テーブルの中で発達差がばらついているので大変な時期だと思う。

まとめ

6月はぼーっとすることが多く全体的に活動レベルが低かった。7月に入ると喜怒哀楽の記載が増え、活動的になってきた。主体的に遊ぶようになったことで、遊びを通して感情が賦活され、発語が少しずつ増えてきていた。8月には“やりとり”の記載が増えており、発達検査の対人関係領域も伸びてきた。また、ごっこ遊びができるようになり、イメージを使った遊び徐々にできた。

9-10月にかけて、職員の言葉を理解する力が伸びたり、喃語だが少しずつ言葉でCの要求や感情を表現するようになってきており、発達検査の「発語」も伸びてきた。11月に入ると情緒の表現が大きくなり、それに伴い一語文ができる。遊びやおやつへの積極性も見られ、自分から催促したりとCの意思が表現されるようになり、職員もCの意向をよりくみとることができ、やりとりの積み重ねが言語の成長につながったのだろう。

12月になると始歩により移動の範囲が広がっており、日誌、発達検査両方から身体運動の伸びが見える。職員の言葉かけを理解できるようになっており、発達検査の「言語理解」も上がっている。しかし、発話の記録が少なく、11月にぐっと伸びたままである。始歩前より移動と笑顔がセットで記録されることが多く、身体を動かすことによって情緒が賦活され、発語につながるこれがこれからの課題として考えられる。

(南山今日子・青木紀久代)

Ⅲ章 総合考察

1. プログラムを体験した担当養育者の体験

3つの事例のコンサルテーションの経過を述べてきた。これらの経過を総合して考察していくが、その前に、コンサルテーション・プログラムを受けた当事者の体験がどのようなものであったかを検討していこう。

プログラムの振り返りインタビューの概要

全プログラムが終了後、各担当養育者に振り返りのインタビューを依頼し、承諾を得た。インタビューは、コンサルテーションを行った部屋と同室で、およそ各30分～45分程度であった。インタビュー内容については許可を得て記録し、全て逐語に起こした。

質問は、プログラムを終えてどうでしたか？といった導入の質問から思ったことを自由に語ってもらったが、感想を聞き取ることが主たる目的ではなく、コンサルタントと共に、プログラムを振り返り、意味を共有していく臨床的な目的を優先させているものである。それゆえ、コンサルタントも意見を述べ、二者の対話が深まるように、努めた。

また、一部背景として、ご本人が語って差し障りのない範囲で、キャリアや家族背景などをうかがっている。ここでは、この乳児院に勤めてからの職場での自己成長という点に着目した部分を述べることとする。以下、そこでの担当養育者とコンサルタントである筆者(青木)との会話を抜粋しながら、このコンサルテーションが、担当養育者にどのような意味をもたらしていたのかを検討していこう。

中心となるのは、もっともキャリアの長いAの担当養育者（A担当）の語りである。そこに、B担当、C担当の語りを加えて、特徴を述べてみたい。

A担当 つながりを感じながら生き生きと関わること

A担当は、この乳児院に17年来勤務するベテラン職員である。子どもの想いをくみ取る深さと、深さ故に生じる葛藤が日々あるという。

プログラムについて「どうでしたか？」と尋ねると、「勉強になった」、という。そして次のように語っている。

A 担当：私は今まで食事をそんなに重視していなかったのが本音なので、でもこれやってきて、こんなに食事場面って深いんだ、と勉強になってよかったです。

Con.：食事とは、お腹を満たすことと、社会化の葛藤の接点ですね。むさぼり食べてそれで良かったのが、上手に食べるのを教えられて、おいしいし、楽しいし、となる。でも、残さず食べる、とコントロールされて、ぶつかったり、というように、いろいろバランスが崩れやすい、生活の一場面ですね。

A 担当：私自身は食事をすごく大切にしているんですけど、仕事の中ではちゃんと食べさせて、きちんと始まって終わって、というほんとに「こなす時間」。食べさせるとか寝かせるとか。遊ぶときは何も考えないでとにかく楽しくやっているんですけど。食事場면을こなすんじゃなくてと言われて、やってみて、こんなに豊かになったのにびっくりしました。

筆者には、A 担当の関わりの豊かさと、非言語的なコミュニケーションのセンス、また、子ども側の非言語を言語に翻訳する感度の高さが、印象的であった。

A 担当は、毎日の食事が、一生懸命やろうとすればするほど、仕事になってしまう、という葛藤を次のように語っていた。

A 担当.：このままでは自分がこんな食事されたらどうなのと思った。でも思いつつも、お昼ごはんなんかでいえば、眠気が襲ってくる子どもたちに、早く終わらせてあげたい、と思って。でも今教えてもらったことを考えれば、ちょっと余計なお世話なことで、子どもはきっと自分でできることなはずなのに、それを引き出す前に、押し付けているというか。

Con.：押し付けようと思ってるわけではないけれど、そうしないと如実に…こう食事が残っているということは、自分の担当児が、ちゃんとできていない、食事が終わっていないと見られがちですね。

A 担当：常に思うのは、自分がされて嫌なことは子どもも嫌だと思って仕事している。嫌いなものを食べさせなきゃいけないというときは、ほんとに自分だったら嫌だなぁと思うんですけど…仕事だと言葉巧みに、これ食べたらおかわりできるよーとか、はたから見ればやんわりした強要。でも、（それをしなくても）青木先生に教えていただいて、気持ちが通い合えばほんとにスムーズにいった。食べさせる技術ではないんですね。

主任の立場で、後輩を育てつつ、子どもの世話の技術は申し分ない。しかし、A 担当が次の自己成長と考えることは、それだけに限らない。むしろ、こうした子どもを世話する技術は、あくまでも背景にすぎない。気持ちが通じ合っていると感じられる関わり方を、いかに優先させていけるかが、一番価値のあることととらえている。

それを食事というあまりにも何気ない生活場面から、見事に切り取って言葉にされていたといえる。

食事をしながら、子どもの情緒表出に対して、沢山の調律が展開したときの「つながり感」をコンサルティングで大きく取り上げたが、これは食べさせる技術という範疇では語れないものとして、彼女の中で、明確に区別されているようであった。

さらに、A 担当は、17年間に及ぶご自身のキャリア発達について、次のように振り返っている。

A 担当：ここに来たのは、実習したときにどこよりも子どもの笑顔がかわいかったから。入ってみたら子どもの笑顔が出る時間はそう長くはなくて(笑)、私たちがいっぱいやって、笑顔が生まれる。そのために働く、とにかく働く、大変だった。

Con.：自分で養育の仕方に影響を受けた先輩というのがいますよね、それはどんな？個人技がうまいとか、色々あると思うんですが。

A 担当：遊ぶという場面では、本音を言ってしまえば、なんていうんでしょう。周りを気にせず思い切り遊ぶ先生が好き、でしたね。その反面、子どもの泥んこ遊びとかもやるので、後片付けをする先生とかには不評でしたね。でも子どもたちは何も考えず楽しそうなので。ここ(手を横に動かして)の先生とのやりとりを気にする先生は、子どもへの規制も強い部分がある。いいなと思う部分も確かにあるけど、これは違うんじゃないかな、自分ならこれはやだな、と。

この乳児院の風土と、A 担当の資質がバランス良く適合していく様子がよく伝わってきた。

先輩の関わり方をなぞりながら、学び、しかし、自分の中に感じる違和感を保持しつつ、自分なりにどう関わるかを選択していく。新米の頃から、多くのことを感じ、内省し、葛藤しながら、その場で何らかの行動を選び取って、今の自分があるという語りが展開していた。

このような自立的な学びができる段階の担当養育者にとって、このビデオフィードバックは、自分のあり方を様々な角度から見直し、かつ、子どもとつながる新しい入り口を模索するために適した方法であった。

前章にあるように、食事場面のフィードバックを通して得た、子どもとの繋がり感や、共感的な子ども理解を、他の生活場面に広く関連づけていた。そしてそれらを、職員と共有するなど、コンサルテーションを受けた体験を、自発的に様々な形で生かし、さらに内省を進め、そこでの気づきをコンサルタントに語りかける、というように、発展させていた。

しっかりとした子ども理解と自己成長の場として、高い動機付けが維持できたのは、子どもの変化が大きかったこともあるだろう。しかし、それにも増して気づきを得ている自分自身に気付く過程が、重要な役割を持っていたように思う。

B 担当 自分の関わりを見直し、別の見方と比較した上で自分なりに消化する

B 担当も、この乳児院で、キャリアをスタートし、10年になるという。プログラムについて「どうでしたか？」と尋ねると、次のように語っている。

B 担当：そうですね、毎日 B と関わりがあって、忙しい中で流れてしまっている部分もあって、それを食事場面だけを切り取って見たり、先生からアドバイスいただいたりして、考える機会になりました。こういうところは確かにこうした方がいいかなというところがあったり、逆に自分のキャパシティでは追いつかない部分もある、ということが分かりました。B は障害があるけど、すごく育ててくれるということが改めて言ってもらって、すごく嬉しかったし、これからもそうであってほしいし、その手伝いが出来ればなと思いました。

Bのような障害児の担当となるのは初めての経験であり、いろいろと迷いながら、対応を工夫されていた。

B担当： 最近お話したことなんですけど。Bは今立ちたいと思っていて、それを叶えてあげることがBの自尊心を高めてあげることになるということが印象的でした。心と体はほんとにつながって成長していくんだなと思いました。そのとき、立ちたいって気持ちは分かっていたけど自尊心ということは考えていなかったのも、そこは良かったと思います。

自分は受け止めるタイプの養育だ、というように、自分なりのスタイルを確立し、自覚している。しかし、もともと自らのコミュニケーションの発信が弱い障害児の場合、担当養育者の能動的な働きかけは重要となる。受け止めるタイプを自称するB担当は、それをほとんど言語化しなかったが、Bとのコミュニケーションで、筆者が思いもつかなかったやりとりが沢山見られている。

そこを大きく取り上げようとしても、ご本人は、「ただ自然にそうしただけ」、と応えることが多かったように思う。

しかし、上記にあるように、Bの行動の意味をつかもうと、非常に主体的に関わっている。

自分なりの物が育ってくるキャリアであり、これは自分らしい関わりか、そうでないか、ということを通してコンサルテーションで助言された内容を吟味して、消化されていることがよくわかる。

C担当 具体的な関わり方を身につける

C担当もまた、この乳児院で最初のキャリアをスタートさせ、まだ2年目だという。プログラムについて「どうでしたか？」と尋ねると、次のように語っている。

C担当： 私自身、先生から教えていただいたことを意識はするようになっていました。例えば食事の場面で目を合わせて一緒に共感し合うとか、一対一だけではなく、他の子もいるときには、他の子と一緒に食事を楽しむ。毎回は難しい時もあったんですけど、やっぱりゆとりがある時には、Cだけに限らずに、子どもが何か訴えてきた時にはオーバーに受け止めてあげることがすごい印象的で、すごいオーバーリアクションで受け止めてあげようになりまして。

毎日精一杯だが、同期にも先輩にも恵まれていて、学びの多い毎日だという。

Con： 例えば先輩のあの養育を参考にしようとか、ここで1年2年やってきてどうですか？

C担当： ありますね。保育園みたいに、午前だけ、午後だけじゃなくて、夜も一緒に寝て、という生活で、常にゆったりした気持ちで、子ども達に関わっている職員。いつも穏やかで。子どもが沢山いて、人間なので大人もイライラする時もあるかなと思うんですけど、この職員はいつもゆったりしていて、そこはプロだなあとと思います。感情的になって子どもに接するのはよくないことですし。私もそんなふうに関わってきたいなと思いました。

Con： 自分だったらワーっとなりそうというのは、どんな場面ですか？

C担当： 宿直の場面、あとは食事の場面ですね。そういう時に、なりそうになるんですけど、でもはっとなったりします。

Con： 自分が切羽詰ったときに肩を叩いてくれる先輩はいますか？それとも自分ではとつする？

C担当： どっちもあります。直接その場でどうということではなくても、話を聞いてくれる先輩とか、そういう場でこうするといいいよとか後から教えて下さいます。

職場の中で、自分の感情を使って子どもとの距離が近くなると、揺さぶられる体験となりやすい、そんなときに、お互いが声を掛け合い、助け合う風土が、若手のキャリアを育てている様子がよくわかる。

以上を見ると、コンサルテーションの体験の仕方は、様々である。もちろん、ケースによっても異なるであろうし、個人の感じ方の差もあるだろう。しかし、職員が一定期間長く努め、乳児院の中でキャリア発達を遂げられる風土が定着しているこの院では、キャリアの長さによって、コンサルテーションの活用の仕方が明瞭に異なっていた。

20年に近いベテランは、技術以上の何を得ようと、子どもの心と自分の心を重ね合わせながら、(つまり間主観的な発想を持ちながら)コンサルタントと対話する。そして、そこで得られた気づきを、生活の他の場面や、職員間で共有し、子どもへの関わりの密度が高まるような動きを作り出していた。

10年目のベテランは、自分のこれまでの関わりを一区切りとし、それなりの自己分析を元に、新しいものを自らの基準で精査していくスタンスを持ち合わせていた。

そして、キャリアをスタートしたばかりの若手は、具体的な行動を得る機会にというところで、多くを学んでいたのである。

こうした違いは、コンサルテーションで早めにつかめると、個々のキャリア支援に適切に対応できる機会を提供することが可能となるだろう。

2. コンサルテーションの展開過程と関係性アセスメント

この報告書では、実践経過をできるだけ詳細に示すことに重点をおいてきた。紙面の関係で、口語

のやりとり等が、やや唐突な終わり方や断定的な表現になっているものが見られるが、実際のコンサルテーション場面では、むしろ、それをどのように受け止めるかは、各参加者が自由に選択できるニュアンスとなっていることを申し添える。

さて、それぞれの事例についての所見は既にまとめられているので、ここでは、心理職が生活場面の一部について、継続的なコンサルテーションの方略を考える上でのポイントと、このコンサルテーションの中で起こった様々な関係性の変化について、論じてみたい。

コンサルテーションと発達検査

毎回のコンサルテーションでは、心理職による発達検査資料を、縦断的な変化として把握できるように整え、活用した。しかし、検査項目や発達の能力について、結果の数値を論じることよりも、大まかに子どもの発達全般の進捗を確認する目的に限定していた。またこの発達検査を毎回のコンサルテーションで活用したことは、一つの実践評価をわかりやすい形で提示できる利点もあった。

しかしながら、このコンサルテーションが次第に焦点化したように、介入のポイントはあくまでも、子どもと担当養育者の関係性にある。担当養育者が子どもと自分の関係を、食事場面のコミュニケーションを振り返りながら咀嚼し、展開することを後押しすることが、大きな目標であった。

また、もともと障害のあるケースなどは、子どもの発達指数がめざましく伸びることなどは、想定しにくい。このようなケースの場合、数値的な伸びよりも、そこを出発点として、情緒の安定であるとか、絆の形成について着目し続けることが、担当養育者をエンパワーすることに役立っていた。

子どもの発達に関して、担当養育者にコンサルテーションを行う場合、常勤の心理職ならば、当然長期の発達を視野に入れた継続的なものとなる。定期的に検査を実施しておくことは、子どもの発達のニーズをとらえる上で、重要である。しかしながら、乳児院で生活する全ての子どもに個別の発達検査をまめに取ることは容易かという点、決してそうではない。その上もし、実施した検査の所見を、半ば自動化した形式で作成し続けることに膨大な時間を費やすようなことになっては、心理職の力を効率よく現場に発揮させることが困難になってしまうだろう。

発達検査は、心理職が提供できる生活臨床プログラムの主要なものの一つだが、全てではないのである。特別な目的で、詳しい検査を実施する必要性が生じるかもしれないが、それ以外はむしろ、生活場面で子どもの育ちを簡便に記録できるような検査を利用する方が現実的であろう。

というのも、発達検査を重ねても、そこから得られる子どもの発達への直接的な影響は、ほとんど期待できない。検査結果が示唆することは、フィードバックの段階で、担当養育者にも十分理解できるであろう。しかし結局、その結果を担当養育者がどのように体験的に理解し、今、ここでの子どもとの関係性理解に結びつけ、いかにこれまでにない文脈で子どもとの関係に変化を起こすかで、検査が臨床的に生きるかが決まってくる。数字のフィードバックだけでは、絶対に臨床的には機能しないのである。

検査結果を入りに、心理職との対話を通して、担当養育者がいろいろと内省する中で、実際の生活場面で介入する意味のある文脈が広がったり、狭まったりするのである。

養育日誌を読む

養育日誌は、複数の担当者が、毎日子どもの成長を記録する貴重な資料である。発達検査の裏付けや、食事場面のコミュニケーションのあり方を理解する上で、生活場面を広く記録する可能性のある日誌に目を通すことの意義は大きい。もっとも、子どもの育ちの記録としてみると、例えば親が日記を綴っているようなものとは、かなり隔たりのあるものである。仮に子ども自身が、自分がどんな風に育ってきたのかをこの記録を読んだときに受け取れるものがあるかということ、成長に関する事柄が記載されているにもかかわらず、残念ながら、無味乾燥な文章に感じてしまうだろう。その最大の違いは、子どもの様子を養育者がどのように感じているのか、あるいは内省的な語りというように、「書き手の思い」といったものがそぎ落とされていることであろう。

またこの乳児院では、日誌が電子化されており、子どもに関する育ちの所見が綴られていく。電子化された記録のフォーマットだと、ノートに記録を重ねる場合に比べて、他者の記述を読みにくく、一日ごとに記入者がとらえた子どもの様子が、それぞれ関連を持たずに記載されがちになるのはやむを得ぬことである。しかし、このような条件にもかかわらず、コンサルテーションを開始してしばらくしてから、子ども達の記録の印象が目に見えて変わってきたのである。もちろん、子どもの社会・情緒的な発達の達成があつてのことだが、養育を担う大人達の見方が質的に変わったことと対になっての変化だといえる。

これに関連して考えると、今回、コンサルテーションに参加した担当養育者と心理職、FSWらが、他の職員と情報を再共有する場を並行して作り出していたことは、複数の担当者が問題解決志向を持って、養育に望む環境を作り出すことに大きく貢献したといえる。

また、担当養育者自身が、子どもとの関係をいかにつくるかについて内省し、子どもの心を探求する姿勢がかなり強化された結果でもあるだろう。

そして何より、複数の大人達にとって、当該の子どもとの関わりが進展し、絆の形成について、大いに動機づけられてきたことが伝わってくる。

発達の三つの側面「身体・運動」、「社会・情緒」、「認知・言語」を統合して見立てる

子どもの発達的な変化やその後の可能性について、どのように伝えるかが、1ヵ月後の子どもの成長にも、養育者の気づきに大きく影響してくる。今回のケースも、食事場面を主としながら、生活の中のごく簡単な関わりを意識することで、子どもの発達の様々な領域が伸びてきた。

ところで、人生早期の発達援助の重要性は、社会的養護の場に限らない。世界銀行やユニセフ（国連児童基金）は、乳幼児期の発達（Early Childhood Development、以下 ECD）の大切さに着目し、世界で積極的に支援事業（ECD プログラム）を推進していることは、周知の通りである。ECD プログラムは、乳幼児にとって最善の身体的、認知的、情緒的、社会的発達を包括的に促進するマルチセクターのケアと教育活動である。大きなプログラムでは、健康や栄養の改善などのプロジェクトと共に、幼児教育のプロジェクトが動いている、というように複数の活動が同時に展開していく。

子どもの発達を保障していくために、乳幼児の発達の三側面（身体の発達、社会的心理と感情の発達、認知と言語の発達）は、それぞれ独立しているのではなく、相互に影響を及ぼし合っていると考えら

れている。つまり一側面の発達状況が、良くも悪くも他側面の発達に影響を与えていく。単一の要因で直接的で機械的な発達を想定するようなモデルは慎み、かつ、刻々と変化する子どもの発達の様相をとらえながら、自分たちの仮説を修正し、子どもの発達への理解をより豊かにしていく必要がある（青木，2012）。

このようなスタンスでのコンサルテーションは、大規模なプロジェクトでなくとも、もちろん採用可能である。実際に、発語のおぼつかない子どもに対して、食の細さの改善（しっかり噛んで食べられるような食事）や運動機会の方をむしろ積極的に整えるように助言したり、子どもの目線を拾いながら、呼吸を合わせてかかわることを大切にしたりなど、複数の入り口から介入していくプランを立てるのが常であろう。

「伸び」の広がり意識して、プラスの資源の探索と発見を話題にする

月に一度のコンサルテーションで、果たして1ヵ月後に子どもがどのような発達を遂げるのか、誰も確定的なことは言えない。しかし、上記の包括的な資料と担当養育者との対話の中から、翌月に向かうための支援計画が必要である。

この時に、社会・情緒的な発達への関心を柱に、様々な伸びの可能性を探っていく。「伸びの芽」に対する感度を上げることは必須だが、それ以上に、子どもの個性と担当養育者の個性の適合や、生活全般を見渡して、プラスの特性と資質を援助資源として活用しようとアンテナを張ることが、介入の成功率を高めるだろう。

この乳児院の場合、筆者が最も大きな援助資源とみなしたものは、乳児院全体が持っている、「学びに対して開かれた風土」であった。現場の養育に当たる職員と、養育を直接担当しない職員が継続してコンサルテーションの場にかかわり、そこで得られるものについて、毎回共有していった。一人の子どもの発達を援助していく際に、ある程度同じ文脈で、望ましい関わり方に対する共通イメージを持てるようになることが、生活臨床プログラムの質的な向上に貢献したものである。

関係性のアセスメントを視野に入れて

以上を通してみると、今回のコンサルテーションは、日常生活における子ども－担当養育者の関係性に働きかけ、それが子どもの社会情緒的発達を起点とした様々な領域の発達を促進したプロセスだと理解できる。

関係性のアセスメントの重要性は、乳幼児心理臨床の中では、共通認識されているが、アセスメントの方法が、画一的に手順化されているものではない。そもそも、心理職が協働的メンバーの一員として加わるとき、このアセスメントの意味合いを慣習的にどのようにとらえるかに違いを感じることも多いかもしれない。

例えば、児童相談所のアセスメントは「診断」であり、「社会診断」「心理診断」、そして一時保護所の「行動診断」を含めた「総合診断」となる。調査によって、情報を収集するし、これらの診断がなされる。宮島(2012)は、診断はアセスメントと言い換えられるが、より、対等な関係での実践を目指して、その意味を「評価」から「把握する・理解する」とすることが望ましいという。ソーシャルワ

ークの基本的スタンスとして、アセスメントは、問題点ばかりでなく、強みの着目が重要だとも述べている。

このあたりのことは、臨床心理学の中でも、コミュニティ援助の考え方の基本に合致しており、介入プランを立てるためのアセスメントには、「援助資源」を見いだすことに力を注いでいく。アセスメントの訳語には「査定」を当てることが多いが、様々な観点から状況を把握することを通して、これからどういう方向で介入をしていくかの「見立て」の意味で使われることも多い。

また、児童相談所でのアセスメントと異なり、乳児院という施設内で行われるアセスメントでは、入所時の一時保護機能に即したアセスメント、様々なニーズを抱えた子ども達への専門的養育が行われる生活臨床プログラムに対して行われるアセスメント、そして、家族関係再構築のためのアセスメントというように、出会いと別れの展開過程の節目で、異なるアセスメントが必要となる。特に心理職が行うべきアセスメントを検討するとき、子ども個人の発達や心のアセスメント以上に、子どもの育ちを支える環境のアセスメントが求められるであろう。

なぜなら、子どもは、一人で存在しているのではなく、親であれ里親であれ、担当養育者であれ、自分を育ててくれる他者との関係の中に存在しているととらえられるためである。乳幼児期の子どもの発達は、大部分が、子どもに直接関わる養育者が介在して達成されていく。乳幼児期の子どもの心の発達を考える上で、養育者との関係性をアセスメントして、より良い応答的養育環境を作り上げることを支援しようとするのが、乳幼児期の心理臨床の基本的スタンスであり、心理療法として述べるならば、親—乳幼児心理療法の前提である。子どものメンタルヘルスは、養育者とのふれ合いの中で促進されるのであり、この種のコンサルテーションは、関係性を中心において展開される(Johnston, K. and Brinamen, C., 2006)

この関係性とは、子どもと担当養育者の主体と主体が出会い、交流する中で育っていくものである。言い換えれば、行動上のやりとりの中に、それぞれの「想い」が持ち込まれ、絡まり合って展開していく(青木, 2011)。この想いをコンサルテーションにおける心理職とのもう一つの関係において語り、自らに問いかける作業を通して、担当養育者が子どもとの関係を発展させる機会をうることができるのである。

そしてまた、食事場面のコンサルテーションを通して、子どもと担当養育者の関係性にアプローチした結果、乳児院の他の職員と子どもとの関係や、職員間の関係など、一年を通じて、多様な関係を介しながら、システム全体に変化がもたらされていることが示された。それがまた、一人の子どもの発達の變化に凝縮されて映し出されているとも言えるだろう。

文献

青木紀久代 2011 間主観性と乳幼児期の心理臨床 FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会誌, 4, 13-17.

青木紀久代 2012 アジア貧困地区での子育て支援～小規模ECDプログラムのデザインと活用～
愛育ネット 子育て支援の実践 <<http://www.aiikunet.jp/practice/>>

ECD 世界銀行ホームページ <<http://www.worldbank.org/children/>>

Johnston, K. and Brinamen, C. (2006). Mental health consultation in child care. Washington, DC.: ZERO TO THREE Press.

宮島清 2011 子どもと家族のニーズの把握・アセスメント・支援の留意点 庄司順一・鈴木力・
宮島清(編) 『子ども家庭支援とソーシャルワーク』 福村出版 Pp.39-52.

(青木紀久代)

＜資料＞

資料 1. 1 回のコンサルテーションで用いた資料一式

1) 日誌

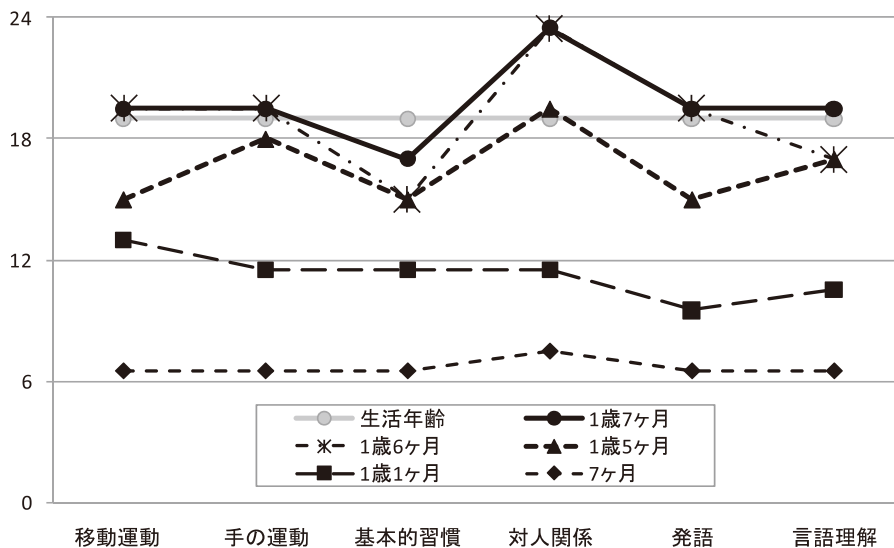
協力乳児院から提供される 1 ヶ月分の日誌 (A4 で 3-4 ページに及ぶ)

2) 発達検査結果

A (1 歳 7 ヶ月) の検査結果 (発達月齢)

遠城寺式発達検査	7 ヶ月	1 歳 1 ヶ月	1 歳 5 カ月	1 歳 6 ヶ月	1 歳 7 ヶ月
移動運動	6.5(93)	13(100)	15(93.8)	19.5(108)	19.5(102.6)
手の運動	6.5(93)	11.5(89)	18(112.5)	19.5(108)	19.5(102.6)
基本的習慣	6.5(93)	11.5(89)	15(93.8)	15(83.3)	17(89.5)
対人関係	7.5(107)	11.5(89)	19.5(121.9)	23.5(130.6)	23.5(123.7)
発語	6.5(93)	9.5(73)	15(93.8)	19.5(108.3)	19.5(102.6)
言語理解	6.5(93)	10.5(81)	17(106.3)	17(94.4)	19.5(102.6)

単位は月で、発達月齢を示した
括弧内は、参考に算出した DQ



＜次に通過が期待される項目＞

移動運動—「ひとりで一段ごとに足をそろえながら階段をあげる」「両足でぴよんぴよん跳ぶ」

手の運動—「鉛筆でぐるぐるまるをかく」

基本的習慣—「お菓子のつつみ紙をとって食べる」「排尿を予告する」

対人関係—「電話ごっこをする」

発語—「二語文を話す (『わんわんきた』など)」

言語理解—「『もうひとつ』『もうすこし』がわかる」

2) ビデオの逐語記録

時刻	<A担当>	<A>
	<撮影時の状況> 11/21撮影。約18分間。全体で25分ほどの食事。午前中をA担当と一緒に過ごし、その流れでの昼食。他児が他の机を希望したので、結果的に1対1の食事となる。 <A担当感想> めったにない1対1の食事だった。前半は、自分の立ったり座ったりの動きや、Aくんもお腹が空いていたこともあり、後半になって落ち着いたやり取りが出来た。1対1だけあって、Aくんが自分を意識してくれることが多く、そのせいかやり取りも多くあった。スプーンの受け渡しや、おかわりがなくなったことへの理解がスムーズに出来ていた気がする。	
00:00	「♪キラキラ…♪」 歌いながら座らせようと補助	イスに足を掛けている 「うう、うう、うう、うう！」 「うう！」とイスから外れて尻もち。 エプロンを自分で外す。
	「いただきます」	「しゅうしゅうしゃ」
	「しゅうしゅうしゃ？今日はあるかなー」 立ってどこかへ。	つけていたエプロンを広げたり自分に当てたり
00:57	「ごめん、見当たらない。ぞうさんでいい？」 「いただきます」	指吸い A担当の顔を見る。
01:14	「はい、どーぞ」と皿を用意する	指吸いを止めて、すぐに食べ始める。 右手スプーンで上手に食べている。 ビデオを向いてにっこり「やだぶ」
01:56	取り分けながら「おいしい？」	
02:26	「かけてあげようか？」 「おいしかった？もっと食べる？おかわりする？」 「施設心理さんいると気になるね」	ビデオの方を向いてにっこり、手を動かす
	「食べるー？おかわりする？」大皿を見せる	A担当の持つ大皿に手を伸ばす
	「やだぶ」	「やだぶ」
03:00	「ちょっと待ってて、サランラップしてくるよ」 「待っててねー」とAの顔の前で手をひらひら	A担当の行った方を見る ビデオに向かって「ぶ！」手を動かす。
03:17		
03:37		「あばぶ、あばぶ」独り言 スプーンからご飯が落ちる。 ビデオに向かって「落ちちゃった、～ちゃった」
04:02		左手で手づかみで食べ始める。 手についたご飯を右手のスプーンですくう。 右手スプーンで食べる。 A担当の行った方向を見る ビデオに向かって「あわぶ」
04:30		
04:40	「はい、ごめんねー」 「お待たせー。ただいま」	A担当に向かって「あわぶ」
	「すごい、きれいに食べてる。これ嫌いな？」	手をよける。
	「すごいね」	「あわ」
	「マンツーマンなんてないよね」	ビデオに向かって「あわぶ！」
	「くりくりする？」	「あわぶ」
05:17	「今日、収集車見れなかったね。」 「日曜日だから」 「火曜日かな？」 「お口大変！あむあむあむ」 「口詰め込みすぎだよ」 「大好きなんだ」 「施設心理さん、おいしいよーって」	「しゅうしゅうしゃ」 窓の方を指差して「しゅうしゅうしゃ！」 手づかみで口いっぱいにして食べる。 ビデオに向かって「あばぶ」
06:48	「〇ちゃんおやすみー」 「ゆっくりゆっくり」「あむあむあむ」	A担当が声をかけた方向を見る A担当を向いて「やばぶ」 A担当の顔を見ながら、左手で手づかみで食べ
07:33	「すごい！なくなった。びかびかじゃん」 「ね」 「おかわりあげようか？」 待って、お皿を受け取る。 取り分ける。 「はい、どーぞ」 Aにスプーンを渡す。 「じゃこっちゃんようだい」	笑う。 「ただ」と言ってお皿を高く上げる。 「あ！～～だ」と窓の方を指差す。 取り分けるのを見て体を跳ねらせる。 A担当のスプーンに手を伸ばす。 A担当に右手に持ったスプーンを代わりに渡す スプーンですくおうとするが、手づかみで食べ
08:21		
	「大きいのかな、お芋が」 「美味しいね、お芋」 「ちょっとちょうだい」	A担当の顔を見て「あばぶ」 「あばぶ」右手に持ったお芋を胸に寄せる 「あばぶ」

	Aのお皿の方に手を出す。	→ A担当の手を叩く
09:09	遠くで泣いている子の方を2人で向く 「〇ちゃん、えんえん、だね」	→ 顔を真ん中に寄せて「あう」と応答
	「うまい！上手」	→ 右手スプーンですくい始める
	「ゆっくりゆっくり」「あむあむあむ」 「早すぎる、お口まだいっぱい入ってるよ」	→ お芋になると、左手で手づかみ
		→ 「あばぶ」 A担当の目を見て「あばぶ」
10:25	他の職員が側を通る 「～さんは、～なんだよ」	→ 首で追いながら、「～ちゃっちゃ」
	お皿を受け取りながら、 「じゃーしなくていいよ、おかわりです」 「なんで最後じゃーしたくなっちゃうんだらうね？」	→ お皿を上を持ち上げる。 → 「～～(おかわり?)」
	「全部食べちゃおうか？」	← たくさん発声しながら大皿にスプーンをやる
	「ないない、おしまい」	
11:07	「あ、〇ちゃんだ。Aちゃん、ちょっと待って」	← 大皿に手を伸ばしたままびたりと止まっている ずっと見ている。
11:23	戻ってくる。「はい、ただいまー！」 「～ちゃん来た。後で遊んでもらおうか」	← ずっと来た人の方を見ている。食べながら。
11:35	ご飯をスプーンによそうがAの様子を見て戻す。 「上手～」 スプーンをAの口の前に持って行く	
	「上手～！おいし♪」	← それまで手づかみで食べていたお芋を、 スプーンに一回乗せて食べようとする。
12:13	「もう一回！」 「もう一回しないんだ、乗せればいいのに」	← 「おいち！」 ← スプーンでお芋をすくう
	「おお、上手！」	← 食べる瞬間、大きく口を開いて見せているよう。
	Aの頭をわしやわしやなでる。	← どこかを見ている。 ← スープを飲む。「っああー！」
13:13	「ああ、おいし」 「あー待ち構えちゃう、じゃーするかな」 「じゃーする？」「聞いちゃった」 「ゆっくり、ゆっくり」	← A担当の顔を見る。 ← 左手手づかみ。 ← A担当のスプーンから食べる。 ← A担当の後ろやどこかを見ている。
14:20	「痛い、痛いだったね」 職員同士で会話をする お皿を持つ	← スプーンを使い始める。 ← A担当の顔を見る ← A担当の会話の相手の方向を見る
14:59	「あーん」 「Aちゃん、これもうないんだ、ご飯ならあるよ」 空の大皿を見せて「なくなっちゃった」 Aの手から皿を受け取る。 「ねー、偉い。びかびかだもん」	← 「あっちゃ、あっちゃ」自分のお皿を見せて訴え ← A担当が取り分けているのを見ながら「ええーい」
15:44	「これもAちゃんたいらげた。見て、ないー」 「こっちちょうだい」 スプーンを受け取る。	← 大皿の大きなスプーンを左手に持つ。 ← 「あばぶ」両手にスプーン。 ← スプーンを一つ渡す。
14:13	「大きいこれ」「おっきーい大変」 「たーいへん、頑張って」 「よいしょ、よいしょ」 「難しいねー大きいからね」 「あーでかい口！」 「こっちにする？」小さいスプーンを渡す 手を出す。 「どっちちょうだい」	← 大スプーンで食べようとする。 ← 「ええ！」とスプーンを持った手をA担当に見せる。 ← 「おいちゃった」 ← 右手に持ちかえる。 ← 「ばば」小さいスプーンも持つ。 ← スプーンを二つ束ねて持つ。 ← 「ばばぶ」「ただぶ」 ← 「はい」と小さいのを渡す。
17:30	「大きいスプーンで頑張って」 「大きくなるね、口も」 Aの後ろの部屋にいるMIに話しかける	← 大スプーンで食べようとする。 ← スプーンをかんかん鳴らす ← スープをスプーンで飲む。

<資料2>振り返りシートのフォーマット

**2010年度「乳児院における子どもの社会情緒的発達を促進する生活臨床プログラムの模索」
振り返りシート**

お名前

1. 今回の協働研究に参加して心に残ったコンサルテーションがあれば、お聞かせ下さい。

2. 今回の協働研究に参加して、**思ったこと・考えたこと**をお聞かせください。

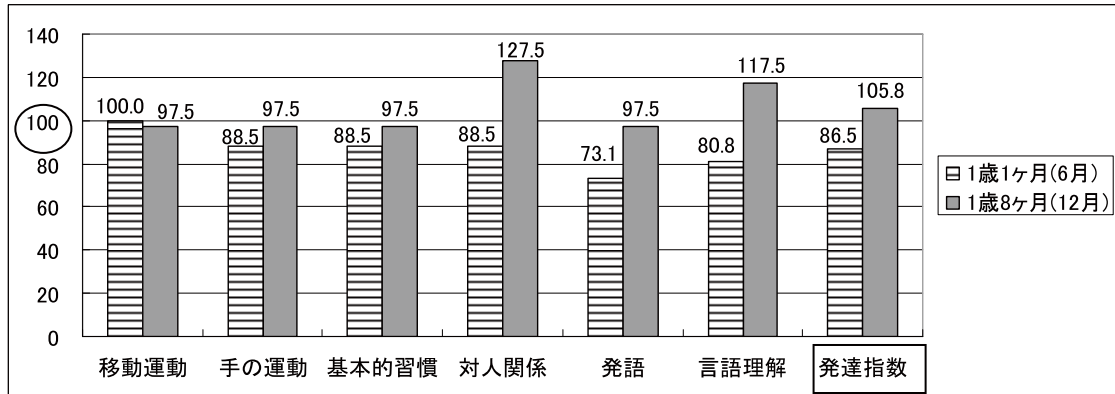
3. 今回の協働研究で、**もっと検討したかったこと・もっと知れたかったこと**をお聞かせください。

4. この協働研究に対する **ご意見・ご感想・ご要望**をご自由にお書き下さい。

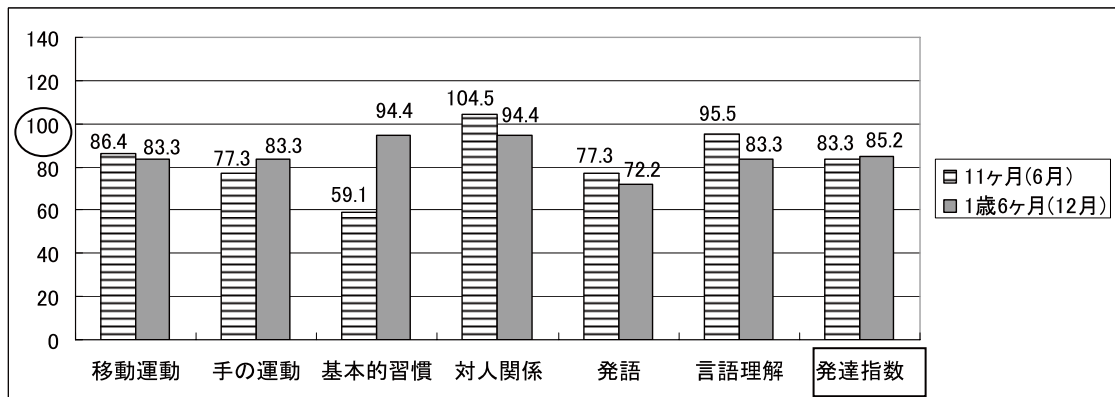
<資料3> 研究報告会の資料

【プログラム対象児の発達の推移】

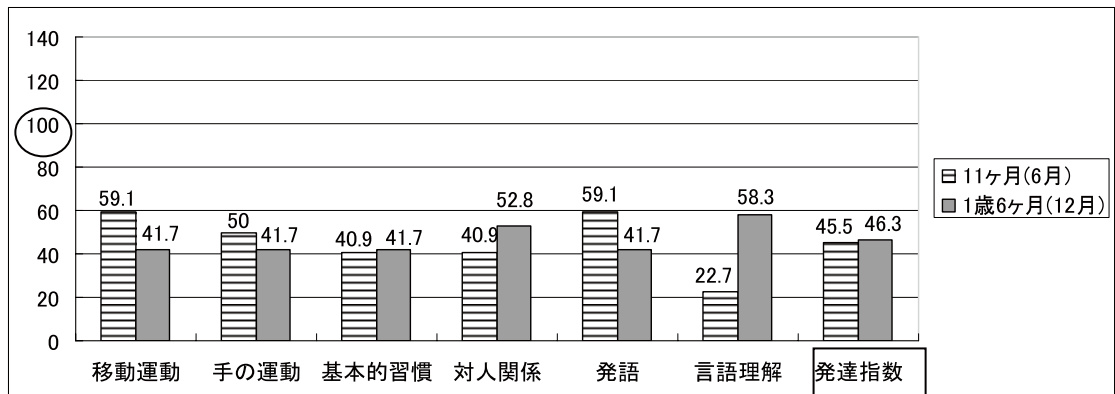
<A君の発達検査結果の推移>



<B君の発達検査結果の推移>

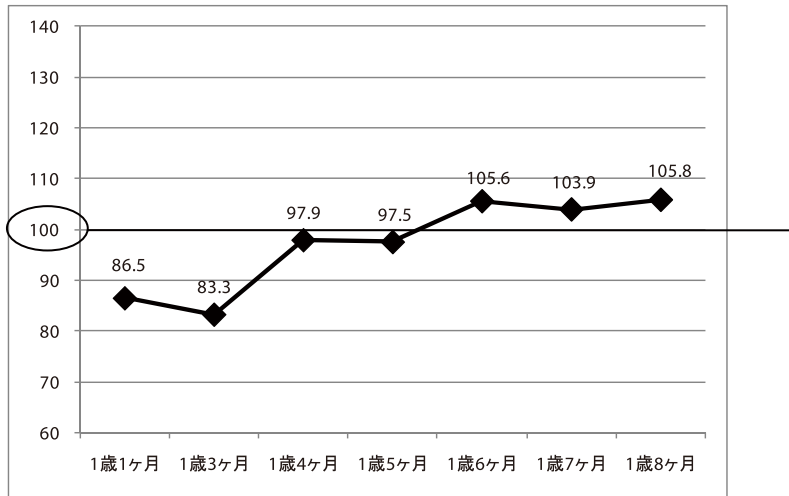


<C君の発達検査結果の推移>



【A君の発達検査結果の推移】

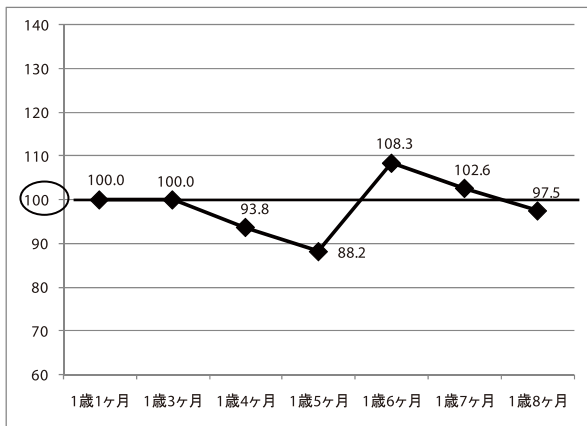
<発達指数>



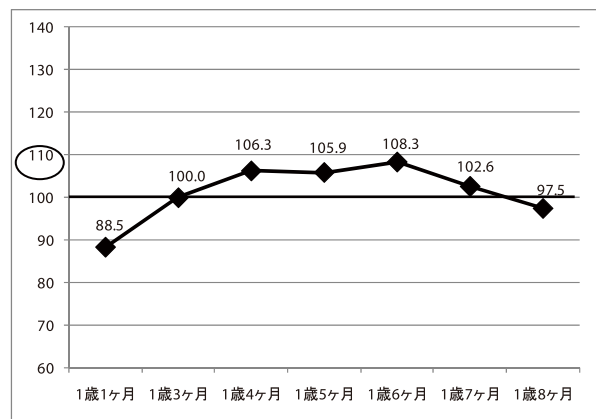
(参考)



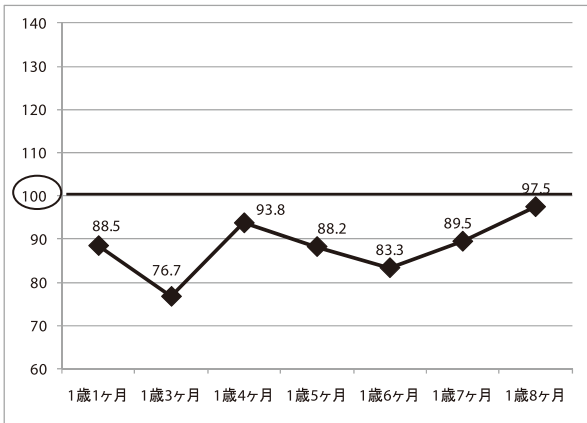
<移動運動>



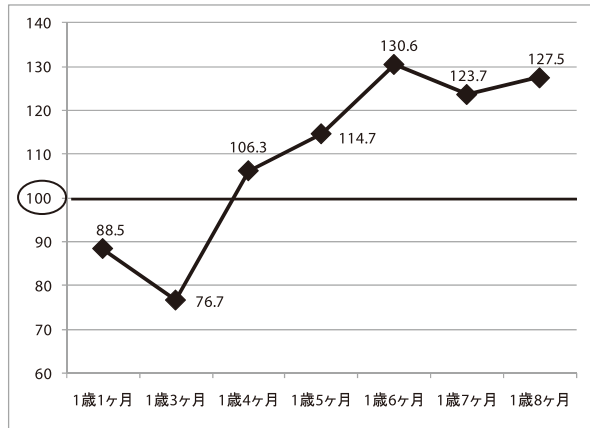
<手の運動>



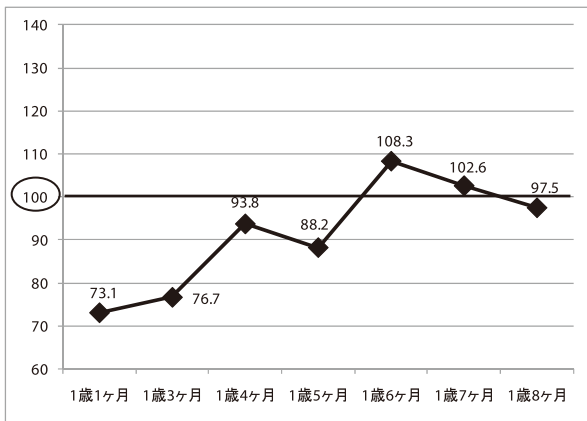
< 基本的習慣 >



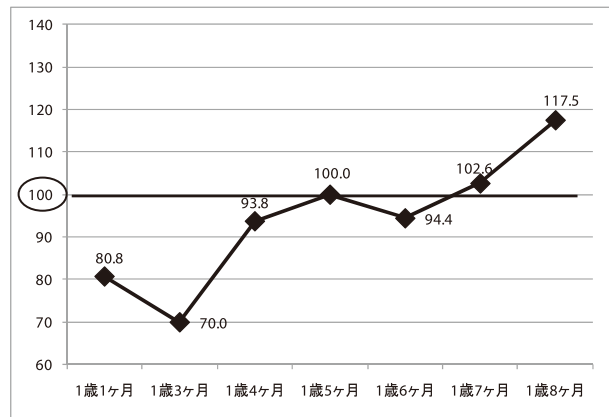
< 対人関係 >



< 発語 >



< 言語理解 >



執筆者一覧

- 青木紀久代 お茶の水女子大学；研究代表者（Ⅰ章、Ⅱ章、Ⅲ章）
南山今日子 子どもの虹情報研修センター；共同研究者（Ⅱ章）
山崎玲奈 お茶の水女子大学大学院；研究協力者（Ⅱ章）

研究協力者

- 摩尼昌子 ドルカスベビーホーム
小幡律子 ドルカスベビーホーム
芝 太郎 ドルカスベビーホーム
深澤美香 ドルカスベビーホーム
谷島美佑 ドルカスベビーホーム
平本 祐 ドルカスベビーホーム

平成22年度研究報告書

乳児院における子どもの社会情緒的発達を促進する
生活臨床プログラムの模索

平成23年12月26日発行

- 発行 社会福祉法人 横浜博萌会
子どもの虹情報研修センター
(日本虐待・思春期問題情報研修センター)
- 編集 子どもの虹情報研修センター
〒245-0062 横浜市戸塚区汲沢町983番地
TEL. 045-871-8011 FAX. 045-871-8091
mail : info@crc-japan.net
URL : <http://www.crc-japan.net>
- 編集 研究代表者 青木紀久代
共同研究者 南山今日子
- 印刷 株柏苑社 TEL.045-711-5600(代)